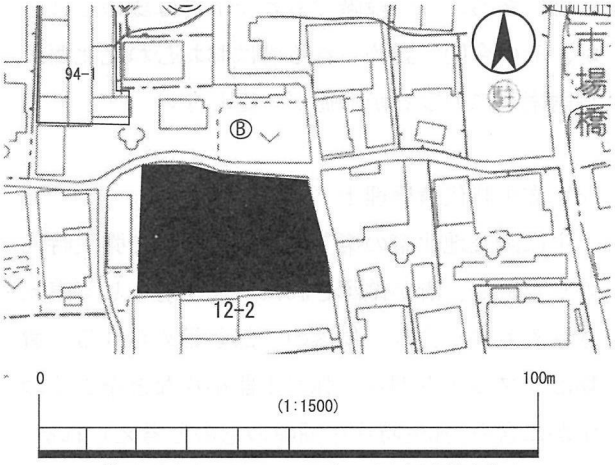
第16節　私部城東の調査

第1項　2012－2次調査

（1）地点と調査に至る経過

本調査地は、通称四郭の南東に位置し、出郭とみられる光通寺からみると北東にあたる。字市の範囲内に位置する。現在は北北西から南南東に軸を持つ町割りに沿って住宅地が並ぶ。城域が東へ張り出した標高が高い地点に位置する。



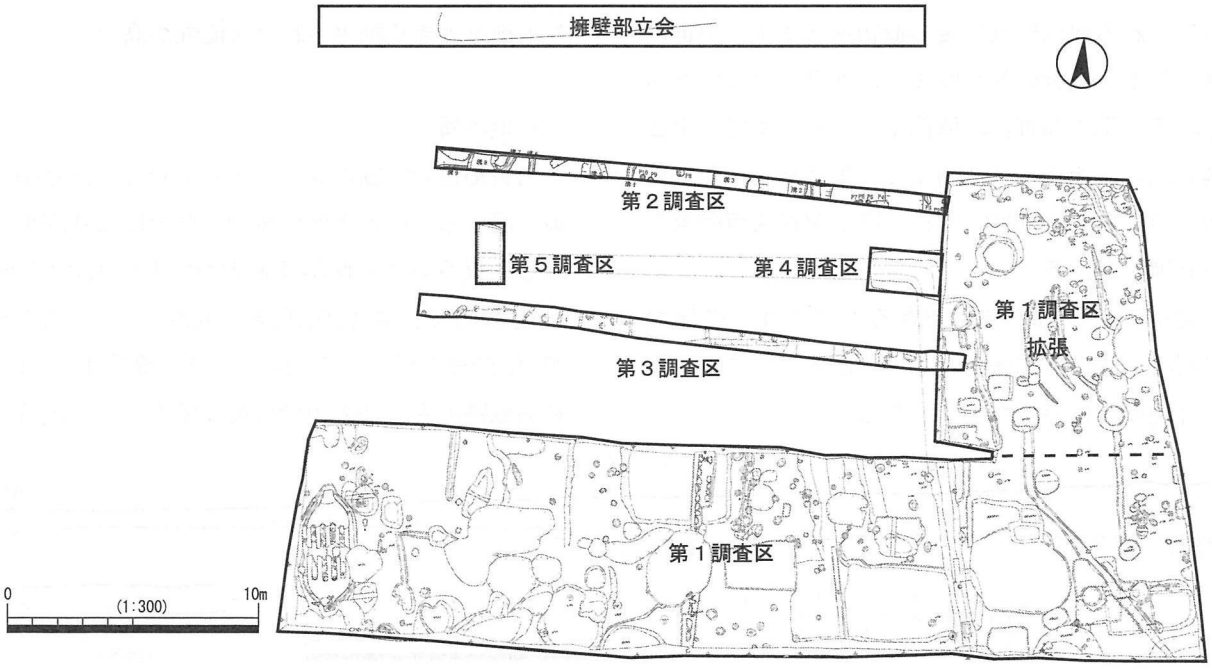
第278図　2012－2次　調査地位置図

従来の縄張り研究において馬部隆弘氏により、四郭に付属する外枡形虎口の可能性が指摘された（馬部2009）。また、百々川より南方へ堀が延長する可能性も想定されるなど、私部城の東端を確定する上で重要な地点であった。

宅地開発に先立ち調査を実施したところ、現地表下数十cmで地山層の上層に、瓦器椀片を含む層の堆積が認められた。遺構破壊が及ぶ範囲は敷地の一部だったが、城域確定のため、原因者と協議の上、本発掘調査を実施した。

第1調査区は当初調査地南半に南北約9m、東西約36mで設定し、その後北東に拡張したが、遺構密度が高く、調査期間が不足したため、第2・3調査区は規模を限定し東西方向に設定し、第1調査区で確認された南北方向の溝等の延長を確認した。この中で、中世段階の区画溝の延長は確認できていなかったため、補足的に第4・5調査区を設定した。

工事に伴い擁壁設置がされる範囲については立会調査を実施した。



第279図　2012－2次　調査区割図

（２）層序（第 280 ～ 285 図）

(a) 現代表土～近世堆積層

調査区の主要断面図を第 280 図から第 285 図に示した。現代表土は調査地東半では宅地化した整地土、調査地西半では耕作土層である。第１調査区北壁（第 283 図）第 12 層まで、同拡張北壁（第 285 図）第 10 層まで、第２調査区北壁（第 281 図）第９層まで、第３調査区北壁（第 282 図）第９層までが対応する。第１調査区南・東壁では大半が同層である。

表土直下では近世以後の堆積層が堆積し、下面は地盤層が大きく削平されていた。また、達磨窯など近世以後の瓦生産関連遺構（第１調査区南壁第１～６層）・土取り穴・廃棄土坑などの可能性がある巨大な土坑なども検出された。

(b) 近世初頭～中世末遺構埋土・整地土

近世遺構の著しい改変・堆積層の下面で、幅広い時代の遺構埋土が残存していた。同層は、近世の攪乱層に切られるが、後述の 14 ～ 15 世紀頃を中心とした遺構埋土上に堆積する。出土遺物は中世遺物を含むほか、37 溝中に 17 世紀頃の古銭が含まれる他は近世以後の遺物を含まず、中世の終わりから近世の初め頃までに埋没したものとみられる。第１調査区北壁第 13 ～ 16 層まで、第２調査区北壁第 11 ～ 12 層まで、第３調査区北壁第 10 ～ 16 層までが対応する。第１調査区南壁第７～９層にあたる。

遺構の方位軸が確認できるものでは、37 溝など南北の正方位に軸をとるものが多い。これは本調査地内では特殊なものである。

(c) 中世遺構埋土

近世初め頃までの層により整地された層の下面で検出された。複数段階に区分される。遺構の中で確認することとしたい。

区画溝（10 溝）とピット群　屋敷地を区画するとみられる推定 20m 四方以上の区画溝およびピット群が検出された。出土遺物から 14 ～ 16 世紀頃と時期幅は長い。確認できる遺構の方位軸は北北西から南南東に傾く。

不定方向の溝・ピット群　10 溝に切られる遺構群である。この段階でもピット群は認められるが、その合間に認められる溝はおおむね北北西から南南東にのびるが形態が一定しない。

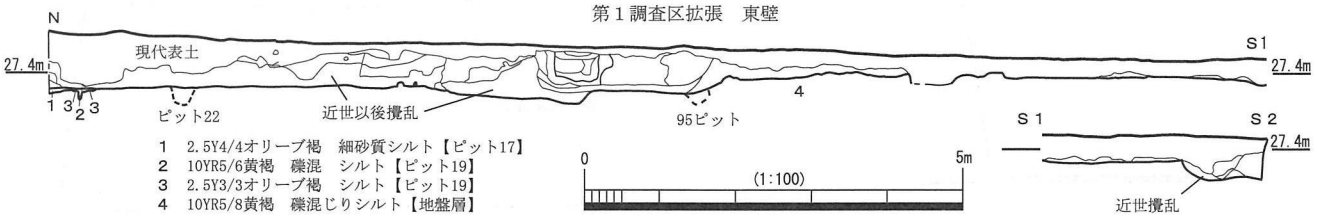
(d) 弥生時代遺構埋土

主に調査地北東の第１調査区拡張区で弥生時代のピット群、溝が確認された。建物跡として復元されるものを含み、集落の一部と認められる。遺物はサヌカイト剥片・弥生土器小片などをごくわずかに含み、弥生時代中期頃のものと考えられる。

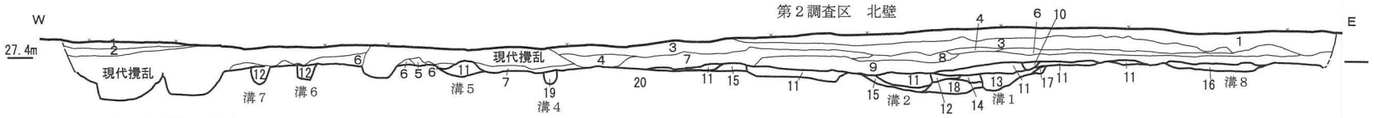
ピット群は深く埋土を残すものも多いが、建物周溝の埋土は浅いものである。近世の堆積層により上部を大きく削平された可能性が高い。

(e) 地山層

明黄褐色の堅固なシルト・粘土層で、白色礫が多く混じる。その上面は後世の改変により削平される。東西方向の傾斜は調査地中央で T.P.27.6m 前後と高く、調査地西端、東端で T.P.27.3 ～ 27.4m 前後と低くなる。南北方向の傾斜は小さい。私部城跡の周辺地の中では最高所の一つである。



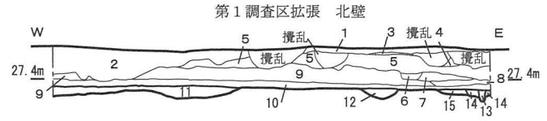
第 280 図　2012 - ２次　調査区東壁断面図



1　10YR5/4にぶい黄褐　砂質土
2　10YR4/3にぶい黄褐　砂質土（礫含む）
3　10YR6/1灰黄褐　砂質土（礫含む）
4　10YR6/8明黄褐　砂質土
　（2.5Y8/2灰黄　シルトを縞状に含む）
5　10YR4/3にぶい黄褐　粘質シルト
6　10YR5/6黄褐　粘質土
7　10YR4/4褐　シルト
8　2.5Y5/2暗灰黄　シルト
9　10YR4/4褐　シルト（炭・土器・礫含む）
10　10YR4/2灰黄褐　シルト（炭・土器・礫含む）
11　10YR4/3にぶい黄褐　シルト
12　10YR5/4にぶい黄褐　シルト（礫含む）
13　10YR4/4褐　シルト
14　10YR5/6黄褐　粘質シルト
15　10YR3/3暗褐シルト
　（7.5YR4/3褐　シルトブロック含む）
16　10YR4/6褐　細砂質シルト
17　10YR4/3にぶい黄褐　粘質シルト
18　2.5Y5/4オリーブ　中砂
19　2.5Y4/2暗灰黄　中～細砂質シルト
20　10YR5/4にぶい黄褐　シルト混じり中砂

0　(1:100)　5m

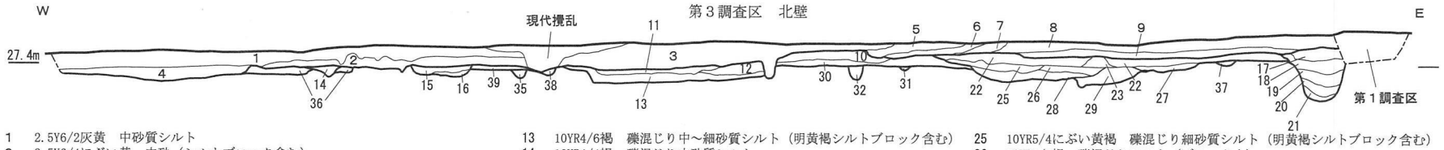
第281図　2012－２次　第２調査区北壁断面図



1　10YR3/3　暗褐　粘質
2　10YR4/2　灰黄褐　礫混じり粘質
　（明黄褐、浅黄シルトブロック含む）
3　10YR5/4にぶい黄橙　礫混じり弱粘質
4　7.5YR4/4褐　礫混じり弱粘質
5　7.5YR5/6明褐　礫混じり弱粘質
6　10YR4/4褐　礫混じり弱粘質
7　10YR5/6黄褐　中砂質
8　7.5YR5/6明褐　礫混じり弱粘質
9　2.5Y5/3黄褐　礫混じり粘質
　（明褐、灰オリーブシルトブロック含む）
10　2.5Y3/3暗オリーブ褐　礫混じり弱粘質
11　2.5Y4/3オリーブ褐　シルト混じり中砂【溝２】
12　5Y4/4暗オリーブ褐　礫・シルト混じり中砂
　【溝１】
13　10YR5/4にぶい黄褐　シルト【ピット17】
14　2.5Y4/4オリーブ褐　細砂質シルト【ピット17】
15　10YR4/6褐　礫混じりシルト【ピット？】

0　(1:100)　5m

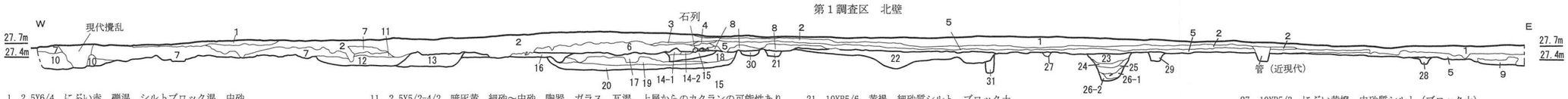
第285図　2012－２次　第１調査区拡張北壁断面図



1　2.5Y6/2灰黄　中砂質シルト
2　2.5Y6/4にぶい黄　中砂（シルトブロック含む）
3　2.5Y5/4黄褐～2.5Y4/4オリーブ褐　礫混じり中砂質シルト（シルトブロック含む）
4　2.5Y4/3オリーブ褐　中砂質シルト（シルトブロック含む）
5　10YR5/6黄褐　礫混じり粗～中砂
6　2.5Y4/4オリーブ褐　中～細砂質シルト（黄褐シルトブロック含む）
7　2.5Y5/4黄褐　中砂（明黄褐シルトブロック含む）
8　2.5Y4/4オリーブ褐　シルト混じり中砂
9　10YR4/6褐　礫混じり中砂質シルト
10　2.5Y5/4黄褐　中砂質シルト
11　2.5Y4/3オリーブ褐　粗砂質シルト
12　2.5Y7/4浅黄～10YR6/6明黄褐　礫混じりシルト（ブロック土）
13　10YR4/6褐　礫混じり中～細砂質シルト（明黄褐シルトブロック含む）
14　10YR4/4褐　礫混じり中砂質シルト
15　2.5Y4/3オリーブ褐　中砂質シルト
16　2.5Y4/4オリーブ褐　石・礫混じり細砂質シルト
17　2.5Y5/6黄　中砂質シルト（明黄褐シルトブロック含む）
18　10YR5/4にぶい黄褐　中砂質シルト（黄褐シルトブロック含む）
19　10YR5/4にぶい黄褐　中砂質シルト（明黄褐シルトブロック含む）
20　2.5Y5/3黄褐　礫混じり中～細砂質シルト（灰白シルトブロック含む）
21　2.5Y4/3オリーブ褐　礫混じり細砂質シルト
22　10YR4/4褐　礫混じり中～細砂質シルト
23　10YR5/4にぶい黄褐　礫混じり中砂質シルト（ブロック土）
24　10YR4/4褐　中～細砂
25　10YR5/4にぶい黄褐　礫混じり細砂質シルト（明黄褐シルトブロック含む）
26　10YR4/4褐　礫混じりシルト（ブロック土）
27　10YR4/6褐　礫混じり中～細砂質シルト
28　2.5Y4/4オリーブ褐　細砂質シルト
29　10YR5/6黄褐　中砂質シルト（ブロック土）
30　10YR4/4褐　礫・シルト混じり中砂
31　2.5Y4/4オリーブ褐　中砂質シルト
32　10YR4/4褐　細砂質シルト
33　10YR3/3暗褐　細砂質シルト
34　10YR4/4～4/6褐　中～細砂質シルト
35　10YR4/6褐　シルト
36　10YR4/4褐　細砂質シルト
37　10YR4/4褐　細砂質シルト
38　2.5Y4/6オリーブ褐　シルト混じり中砂
39　10YR4/6褐　礫・シルト混じり中砂

0　(1:100)　5m

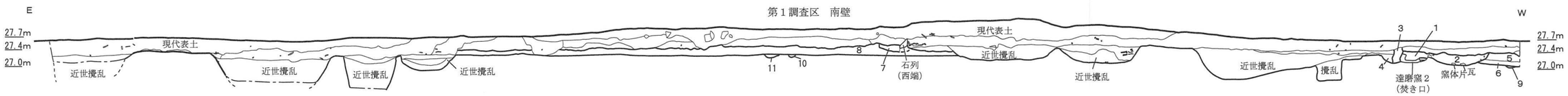
第282図　2012－２次　第３調査区北壁断面図



1　2.5Y6/4　にぶい赤　礫混　シルトブロック混　中砂
2　2.5Y5/2　暗灰黄　礫、石混　細砂～中砂　　シルト（瓦片、現代遺物混）
3　10YR7/6　明黄褐　シルトブロック混　細砂～中砂
4　10YR6/6　明黄褐　シルトブロック混　10YR8/6　黄橙　中砂
5　10YR6/4　にぶい黄橙　礫、シルトブロック混　細砂～中砂
6　10YR8/2　灰白　礫、シルトブロック混　10YR7/6　明黄褐　中砂
7　10YR6/4　にぶい黄橙　礫、石混　中砂
8　10YR6/4　にぶい黄橙　シルト混　細砂～中砂
9　カクラン？
10　10YR7/4　にぶい黄橙　礫混　細砂～中砂　シルト
11　2.5Y5/2-4/2　暗灰黄　細砂～中砂　陶器、ガラス、瓦混　上層からのカクランの可能性あり
12　10YR4/6　褐　シルトブロック混　中砂質　シルト
13　2.5Y5/4　黄褐　中～粗い砂質　シルト
14-1　2.5Y5/6　黄褐　シルト混　細砂質～中砂質
14-2　10YR4/6　褐　中砂質
15　10YR5/8　黄褐　灰白　シルトブロック混　中砂質
16　2.5Y5/4　黄褐　礫、シルト混　中砂質
17　2.5Y4/4　オリーブ褐　礫、シルト混　中砂質
18　10YR4/6　褐　礫、シルト混　中砂質～粗砂質
19　10YR6/8　黄褐　シルトブロック混　10YR8/4　浅黄橙　礫混　中砂質～粗砂質
20　10YR4/6　褐　細砂質シルト　（ブロック土）
21　10YR5/6　黄褐　細砂質シルト　ブロック土
22　10YR7/4　にぶい黄橙　シルトブロック（1～2cm）混　10YR6/6　明黄褐　細砂～中砂質シルト
23　10YR7/4　にぶい黄橙　礫混　中砂質　10YR5/6～5/8　黄褐　シルトブロック混
24　10YR5/8～5/6　黄褐　シルトブロック土　10YR7/4　にぶい黄橙　中砂質含む
25　10YR6/6　明黄褐　中砂質シルト　10YR8/6　黄褐　シルトブロック混
26-2　10YR4/6　褐　シルトブロック土
26-1　10YR5/4　にぶい黄橙　シルト
27　10YR5/3　にぶい黄橙　中砂質シルト（ブロック土）
28　10YR5/6　黄褐　中砂質
29　10YR5/4　にぶい黄橙　中砂質シルト
30　10YR7/4　にぶい黄橙　礫混　中砂質～粗砂質シルト（瓦、土師器片）
31　10YR4/3　にぶい黄橙　シルト（ブロック土）

0　(1:100)　5m

第283図　2012－２次　第１調査区北壁断面図



1　10YR4/6褐　中砂～細砂（焼土ブロック混）
2　10YR3/4暗褐色　粘質（焼土含む）
3　10YR3/3暗褐色　粘質（石・焼土含む）
4　10YR4/6褐　粘質（焼土含む）
5　10YR4/3　にぶい黄褐色　（10YR5/6　黄褐色　柑）
6　10YR3/4　暗褐色　粘質　焼土含む
7　2.5Y4/6オリーブ褐　中砂
　（10YR5/8黄褐シルトブロック含む）
8　10YR4/3にぶい黄橙　粘質　（2.5Y5/3粘質含む）
9　2.5Y4/3オリーブ褐　中砂質シルト
10　2.5Y5/4黄褐　中～細砂質シルト（ピット？）
11　2.5Y5/3～5/4黄褐　細砂質シルト

0　(1:100)　5m

第284図　2012－２次　第１調査区南壁断面図

（3）近世以後の遺構と遺物

遺構全体図は第298図に示した。次に、各期の遺構を整理しておきたい。近世以後の遺構は調査区全面で多量に検出された。多様な遺構が存在する。これらのうち、溝や達磨窯の軸は、北北西から南南東をとり、現在の町割りにも踏襲される。

(a) 井戸

垂直に掘り込まれた井戸痕跡を調査区東半で6基確認した。井戸枠は検出されておらず素掘り井戸とみられる。瓦などの多量の近世遺物のほか、井戸1では中世瓦も混入していた。また、ピット32～36は井戸に伴う建造物の痕跡と考えられる。

(b) 溝

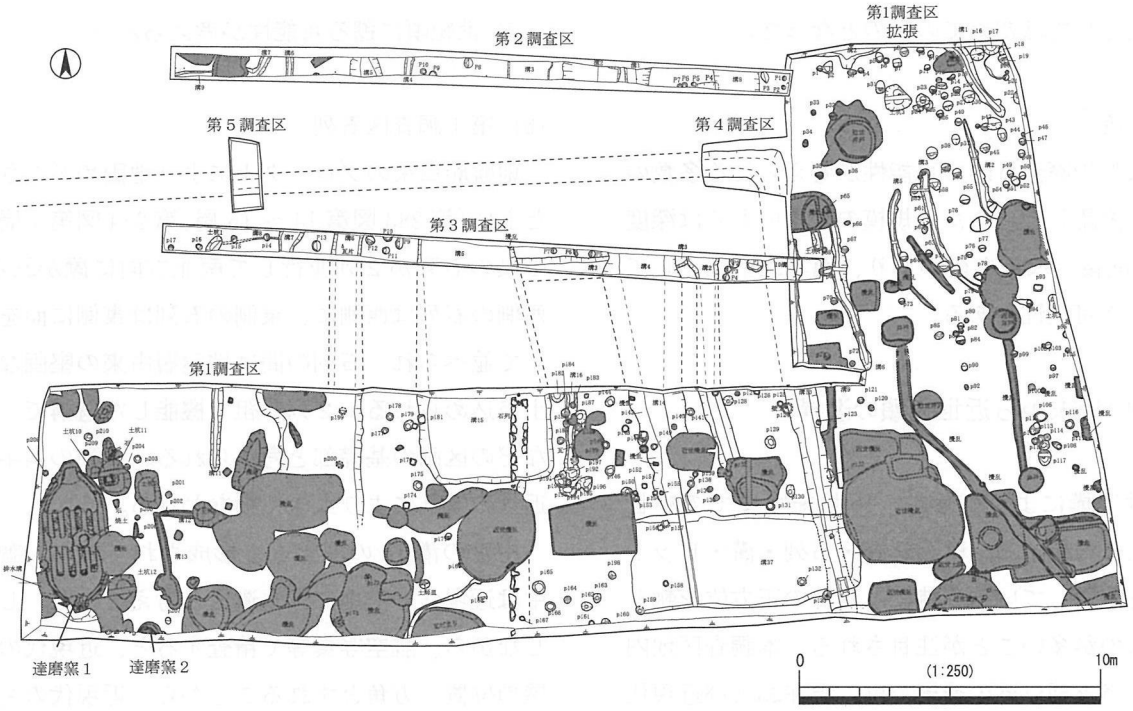
井戸に接続するものが認められ、関連した導水施設などの可能性が考えられる。町割り方向のものである。

(c) 近世以降の達磨窯と関連遺構

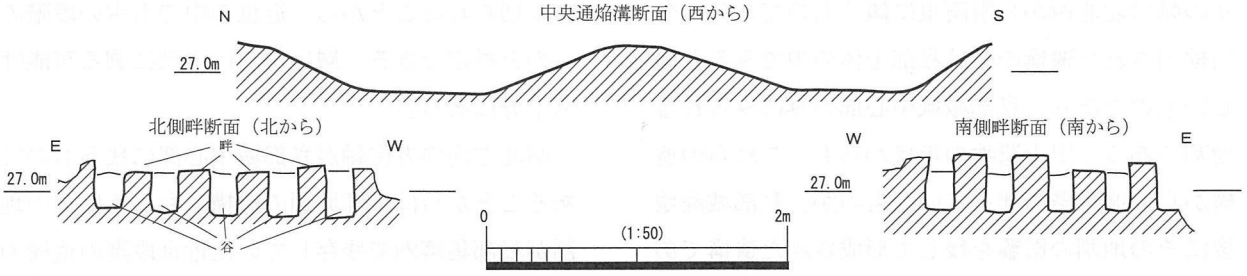
調査区西端で達磨窯跡を2基検出した。

達磨窯跡1は下部構造を良好に残す。地盤層を掘り込んだ半地下式の構造で、全長4.8m、幅2.4mである。焼成室の畔は4条、谷が5条である。畔部は平瓦と粘土を交互に積み重ね、小口面に丸・平瓦を立てた状態で置いて形成している。窯体の南西に、調査区外に排水溝が延びる。

形態と規模は、奈良市西笹鉾遺跡瓦窯跡に類似



第286図　2012－2次　近世以後遺構・攪乱平面図



第287図　2012－2次　第1調査区達磨窯1断面図

する。18 世紀前半と報告されるが、藤原学氏によれば近代に近いものとされる（藤原 2002）。

達磨窯跡２は焚口の一部のみを検出した。その廃絶時の埋土が達磨窯１の焚口を切りこんでおり、達磨窯１より後に廃絶したとわかる。

出土瓦は桟瓦・丸瓦・平瓦が認められた。詳細な年代は不詳ながら、近世でも比較的新しい 19 世紀頃のものとみられる。明治の地籍図に記載がないため近世の間に廃絶したものとみられる。

また、２基の達磨窯の周辺には、瓦片・石などを含む焼土により埋没する土坑 10・11・12・7 などが付随していた。これら出土遺物と堆積層から達磨窯の操業に関連する遺構と捉えられる。

交野では近世から近現代まで瓦生産が知られていたが（交野市文化財事業団 2012 ほか）、瓦窯の調査例としては初めてのものとなった。

(d) 土坑

土取りや廃棄目的の可能性が考えられる多数の土坑を確認した。また、規模の大きいものは深度も２m 前後となるものがあり、地下式土坑として機能した可能性もある。

（４）中世末から近世初頭の遺構

近世遺構により切られ、16 世紀頃までの中世遺構上に堆積する。落ち込み・石列・溝・ピットなどを確認している。特に、南北の正方位を軸とするものが多いことが注目される。本調査区地内では、当該期以外の遺構では、現在および近現代や、後述する 15 世紀前後の私部の集落域の町割りの軸は北北西から南南東に傾くものである。今回検出された遺構の軸は私部全体の中でみると珍しいものであり、私部城域中心部のみにみられる地割である。出土遺物の年代からも、これらの遺構が私部城段階に伴っていたものか、私部城廃城後にその地割の影響を残して形成された遺構である可能性が考えられる。

(a) 落ち込み

調査地北端の擁壁部立会調査で確認した。限定的な調査であり、幅・深さともに確認できていない。少なくとも幅 1.5m 以上、深さ 1m 以上のもので、堀状に復元される可能性が高い。その方角は西南西から東北東にのびる。また調査地西側に切れ目があり、ここに通路が存在したと考えられる。

埋土の中位から、遺構の埋没に伴って廃棄された丸瓦が多く出土した。出土遺物の一部は本郭出土瓦と類似するものも含まれる。近世遺物は含まない。おおむね 16 世紀代に機能し、埋没したものと考えられる。私部城期にも機能していた可能性が高い。なお、方位軸が後述の区画溝に近いことからは、開削された時期は区画溝と同じく 14 ～ 15 世紀頃に遡る可能性が考えられる。

(b) 第１調査区石列

地盤層由来のブロック土により地固めがなされた上に（第 283 図第 14 ～ 15 層、第 284 図第７層）、１段の石列が２列並行して南北方向に置かれる。西側の石列は西側に、東側の石列は東側に面を揃えて並べられ、石列の間は地盤層由来の堅固な盛土が込められる。２列一組で機能した遺構で、塀などの区画の基礎部と考えられる。石列の南半は近世の攪乱により大きく損なわれる。

中世の溝 15 の埋土上に形成されており、調査中は近現代の宅地に伴う遺構と考えていた。しかしながら、航空写真等で精査すると、近現代の家屋の位置・方角とずれることから、近現代のものである可能性はなくなった。また、近世の攪乱により切られることから、近世の中でも古い段階のものと推定できる。層序からは中世に遡る可能性も十分にある。

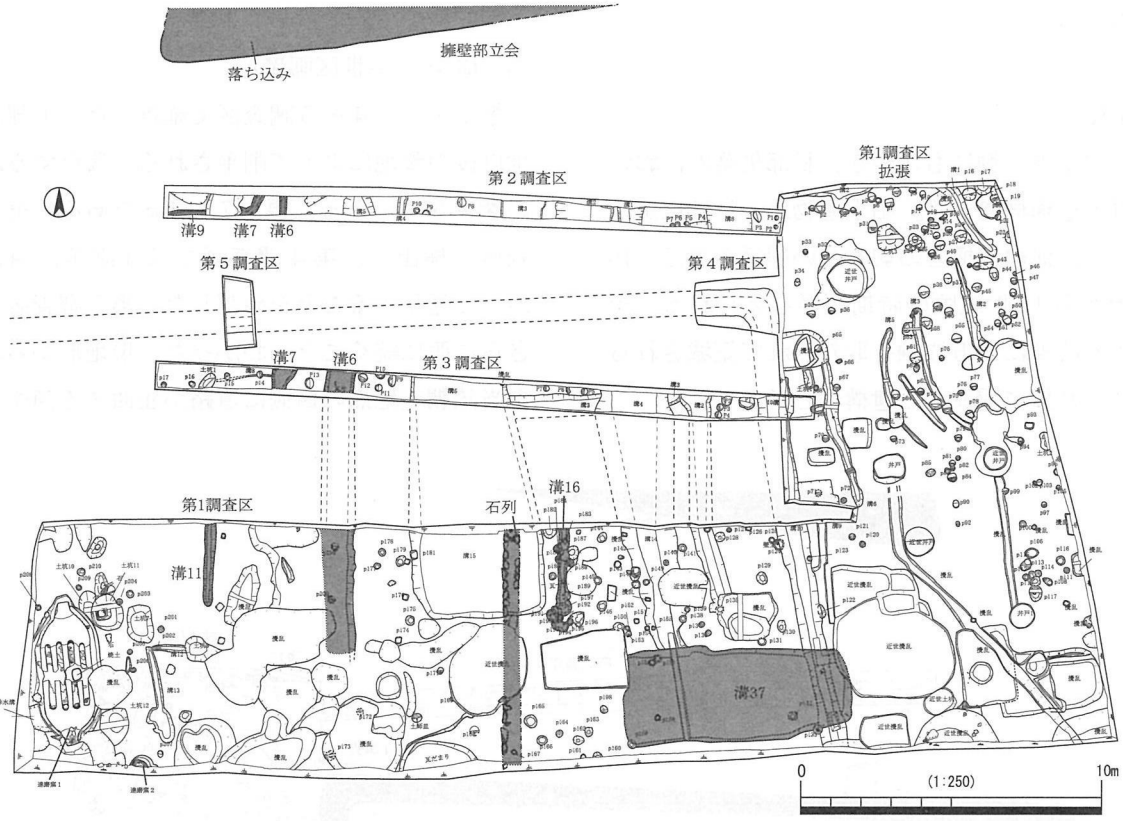
南北方向の方位軸が私部城中心部に残るものであることからは私部城期の遺構、もしくはその地割が私部集落内で残存していた近世段階の遺構の可能性が考えられる。

(c) 第 1 調査区溝 16 とピット群

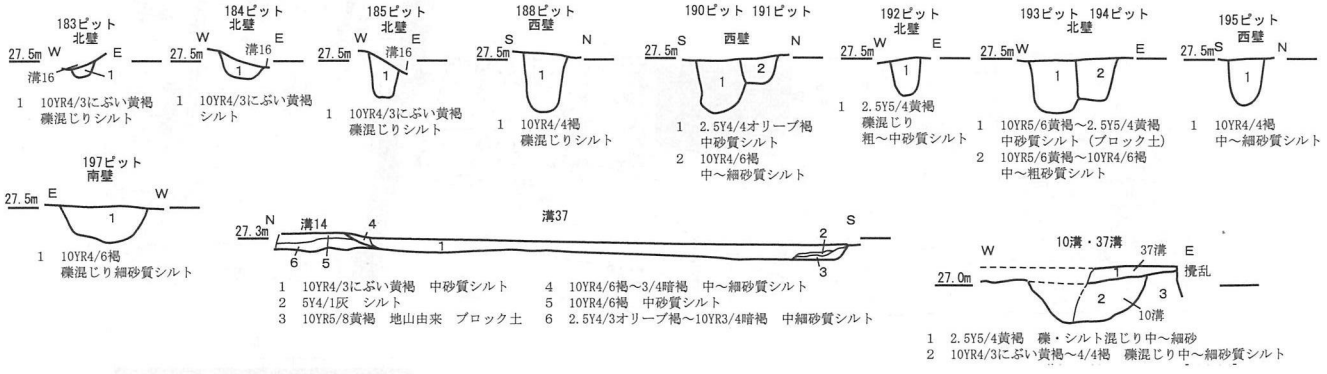
第 1 調査区溝 16 は石列の東に位置する南北方向の溝で、幅 0.4m、深さ 13 ～ 16cm である。その周辺にはピット 183 ～ 185・188・190 ～ 195・197 が密集する。埋土は類似しており、溝とピットは一連のものと考えられる。柵列・板塀などの区画施設の痕跡と考えられる。層序から石列や溝 37 と併存した可能性がある。

(d) 溝 37

東西にのびる幅広の浅い溝である。西が高く、緩やかに東へと低く傾斜する。その形態や埋土から池などの可能性は低い。通路の痕跡とみられる。溝 10 を切り、近世の攪乱に切られる関係からおおむね 16 世紀頃から近世前期までの時期幅が考えられる。溝 16 などと関連して機能したものと考えられる。



第 288 図　2012 - 2 次　中世末～近世初頭遺構平面図



第 289 図　2012 - 2 次　中世末～近世初頭遺構断面図

(d) その他の溝

第２調査区溝６　石列の西に位置する溝である。土地区画などの痕跡か。埋土上部から瓦片が一点出土している。

第１調査区溝 13　南北方向の細い溝である。

第２調査区溝６・７・９　調査区東端で検出された。溝６は南北にのびるものである。溝７・９は攪乱により分断されるが、一連のものとみられ、調査区中ほどまで溝６と並行し、直角に屈曲し、西へのびる。

(e) 小結

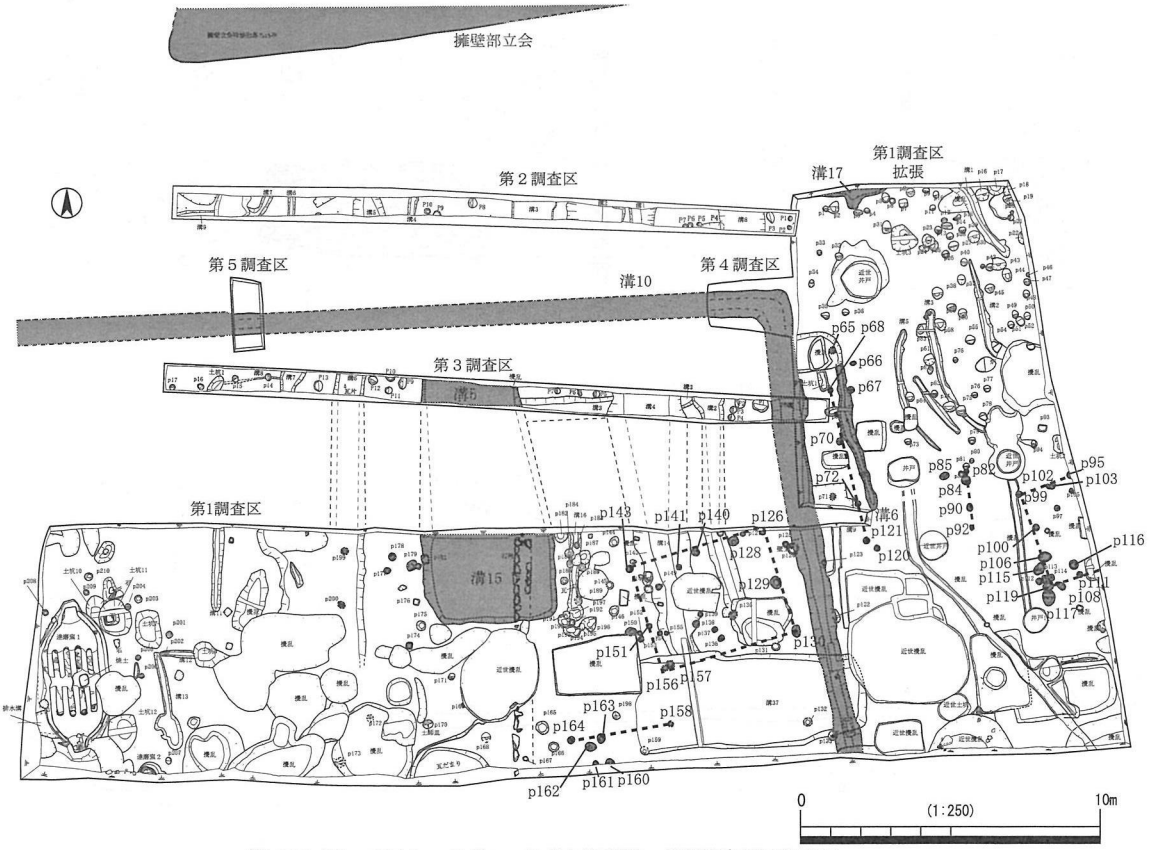
南北の正方位軸にもとづき、私部集落内において異質の遺構群である。出土遺物から年代比定は難しいが、他の遺構との切り合い関係からは、16 世紀頃から 17 世紀頃の時期幅が与えられる。相前後する時期に正方位軸を取り入れて築城される私部城と密接に関連する遺構群と考えられる。

（５）区画溝と中世遺構

10 溝によってＬ字状の区画が存在し、その内側にピット、溝などの遺構が集中している。これらの主要遺構の軸はすでに現在の私部の町割りに近いものとなっていることが注目される。区画を伴うことや、出土遺物の内容からは、14 世紀頃に始まり、15 世紀頃を中心として、私部の有力者が所在したことを示す。

(a) 溝 10（中世区画溝）

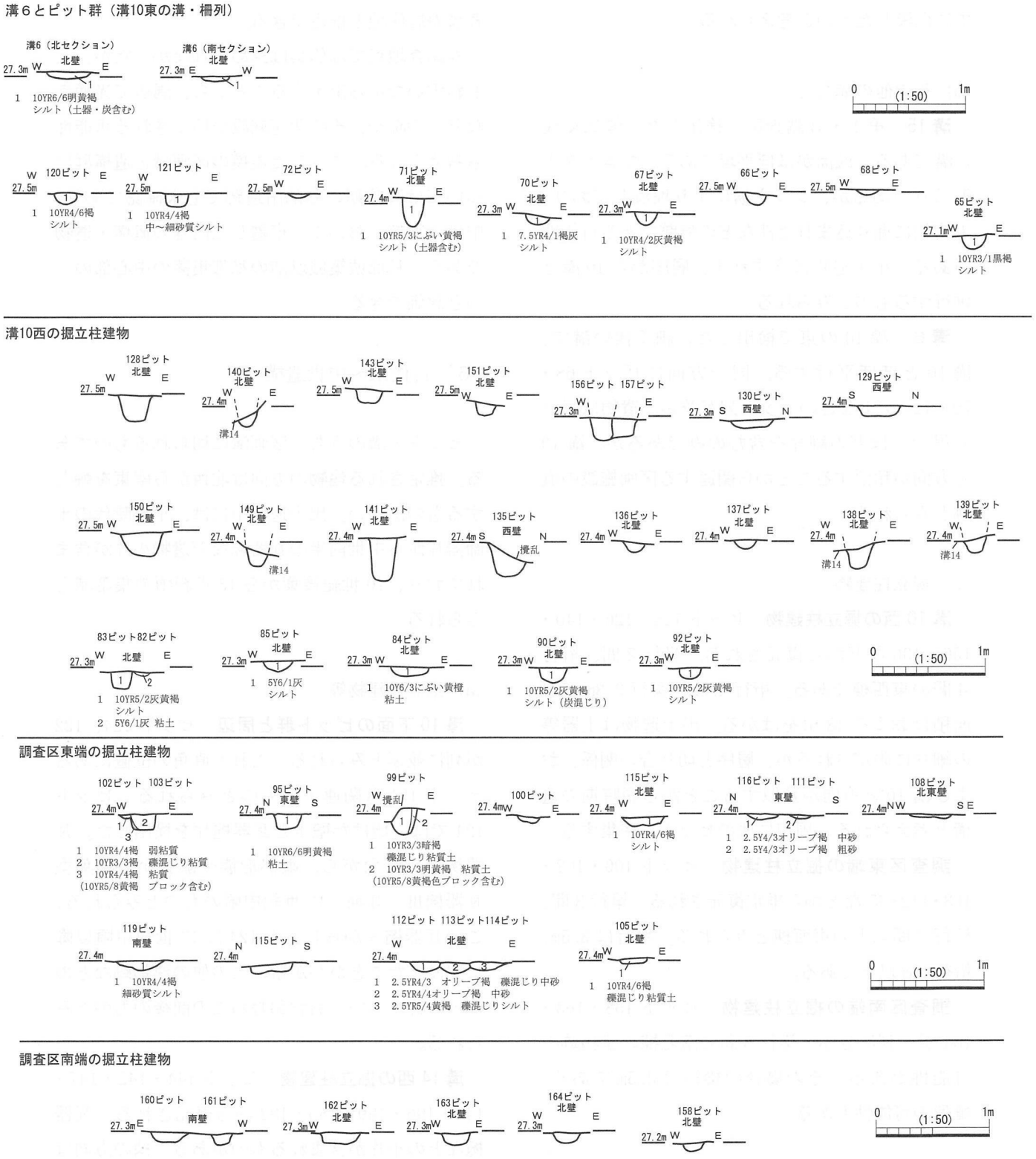
第１・３・４・５調査区で確認した。上部は近世以後の整地によって削平される。残存する範囲の深さ 80 ～ 90 cm、幅 0.7 ～ 1ｍである。第１調査区で検出し、第４調査区でほぼ直角に西に曲がって延長することを確認した。第５調査区ではさらに西に続くことがわかった。現地形からみると当該調査地点の西側に道路が屈曲する箇所が認



第 290 図　2012 - ２次　中世区画溝・関連遺構平面図

められ、この道路屈曲部付近より西では標高が低くなる。この地形状況からこの付近に同区画溝の西端が埋没していると推測する。この場合、東西長はおよそ30mになる。

土師器・陶磁器・瓦など多くの遺物が出土している。出土遺物と切り合い関係から、開削時期は、



第291図　2012－2次　第1調査区中世遺構（区画溝併行期）断面図

瓦器椀が残存する14世紀前半頃まで遡る可能性がある。最も新しい年代の遺物としては15世紀頃までの遺物が含まれる。14世紀から15世紀頃を中心に機能し、おおむね16世紀代の前半頃までに埋没したものと考えられる。

(b) その他の溝など

溝15　第１・３調査区で検出した。幅広く浅い溝である。底面がほぼ平坦である。ブロック土混じりであるが、シルト層により埋没しており、人為的に掘り込まれた池などの痕跡である可能性がある。出土遺物は含まれず、層序から10溝と併行するものとみられる。

溝６　溝10の東で検出した。細く浅い溝で、溝10とほぼ平行する。同一方向にピット68・70・72・121などのピット列が並ぶ。遺物は図化し得ないほどの細片を含むのみであるが、溝10と方向が類似することから関連する区画施設の痕跡とみられる。

(c) 掘立柱建物

溝10西の掘立柱建物　ピット128・126・140・156・130などから復元される。梁行２間、桁行４間の東西棟である。桁行4.8m、梁行3.8mで平面積はおよそ18㎡をはかる。出土遺物は土器等の細片に限定されるが、層序と切り合い関係、および溝10と方向が類似することから同時期の遺構と考えられる。周辺に他のピットも密集する。

調査区東端の掘立柱建物　ピット100・102・103・112・95などから推定復元される。梁行３間、桁行２間以上の東西棟とみられる。梁行は3.5m、桁行２m以上である。

調査区南端の掘立柱建物　ピット158・163・164が一列に並ぶ。梁行３間の南北棟の建物跡の可能性がある。その場合の梁行は3.5mである。柵列の可能性もある。

(d) 小結

区画溝を中心とした建物・溝などの遺構群が検出された。14世紀頃に年代を遡りうることからは、中世の私部集落で勢力をのばした地域の有力者層の居住地と推定できる。

本調査地点では仏具は認められなかったが、瓦もわずかながら出土することから、周辺で光通寺などの寺院や、その関連施設が検出される可能性も考えられる。こうした規模の区画溝と遺構群については同時期の私部南遺跡でも未確認であり、中世の私部において、卓越した内容の遺構・遺物である。私部城築城以前の私部集落の中心部の一つと評価できる。

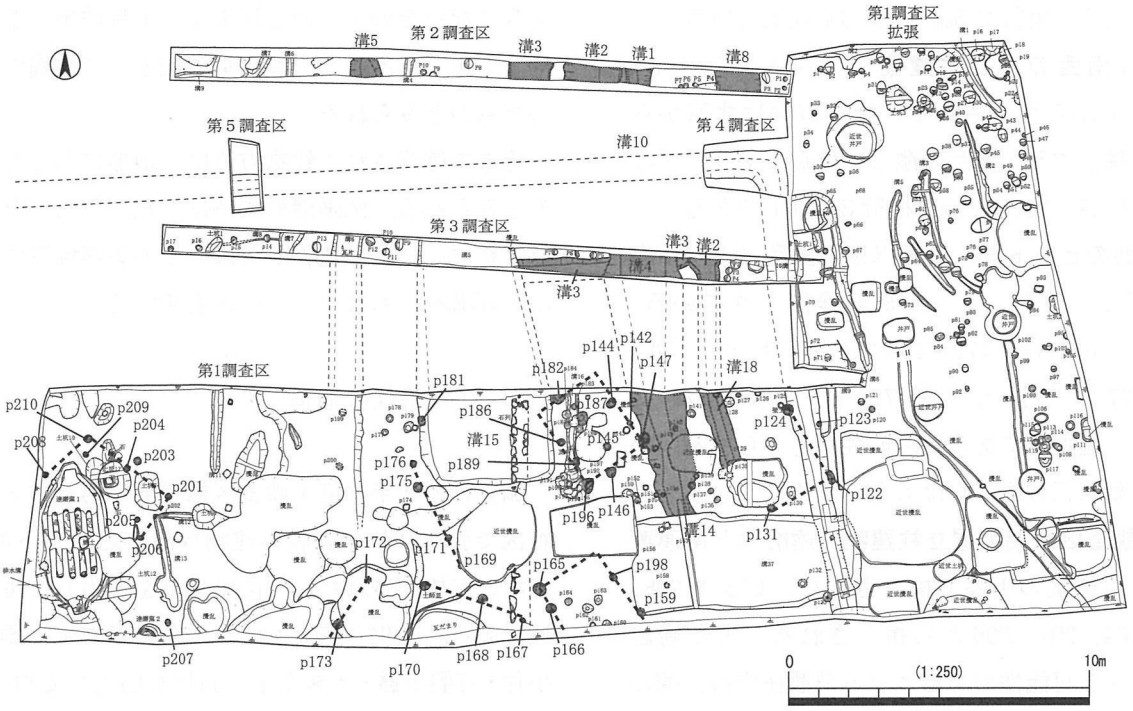
（６）古代末～中世遺構

ピット・溝のうち、区画溝に切られるものである。推定される建物の方向は北西から南東を軸とするものが多い。出土遺物中には、平安時代の土師器片から中世前半の瓦器椀など遺物小片が含まれており、10世紀後葉から13世紀頃の集落域とみられる。

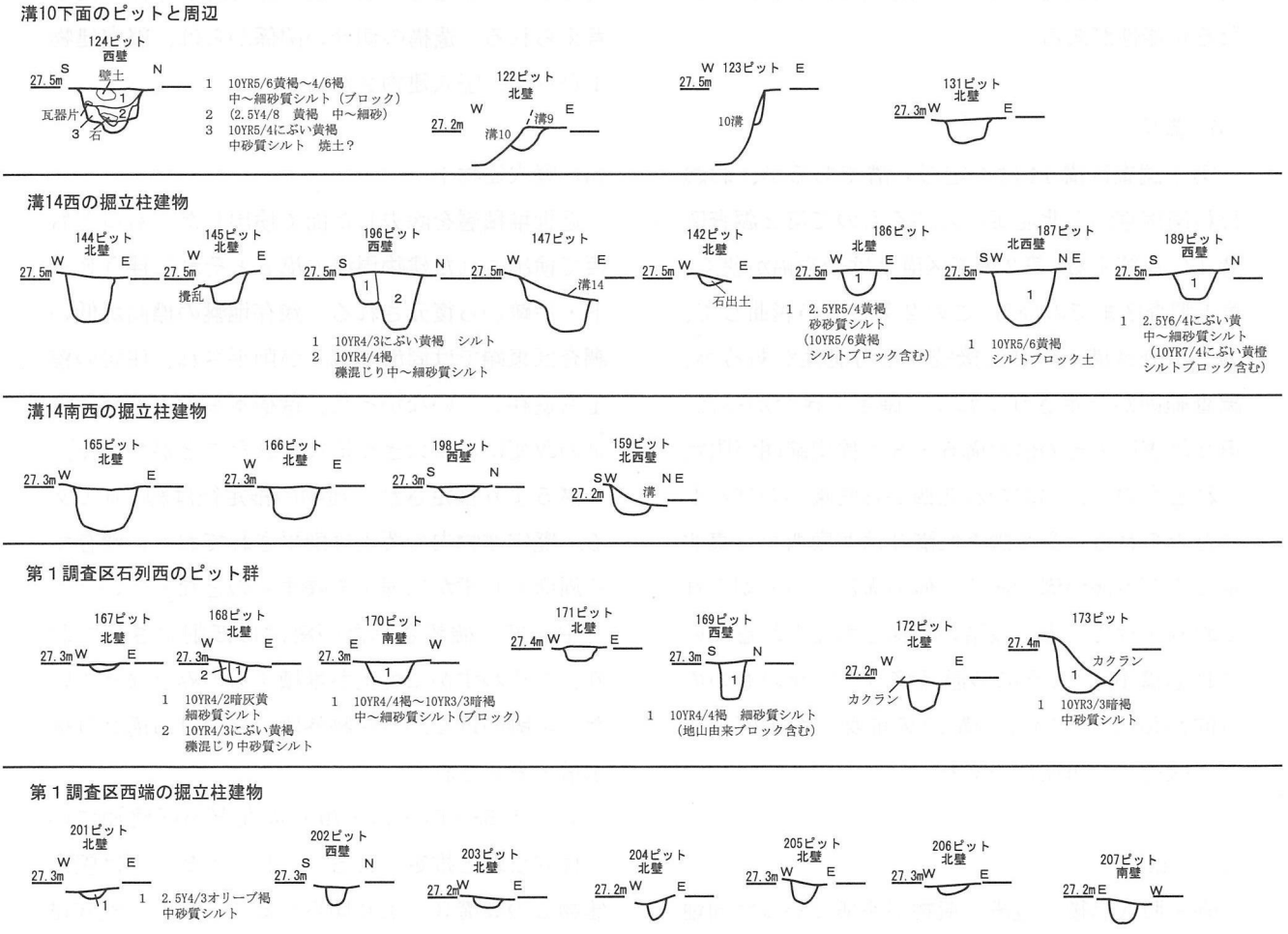
(a) 掘立柱建物等

溝10下面のピット群と周辺　ピット124、122が列に並ぶとみられる。これと直角の位置にあるピット131も関連するものとみられる。ピット124では、焼けた壁土と瓦器椀片を検出した。瓦器椀は小片ながら、端部形態や調整から楠葉型瓦器椀Ⅲ－３期、13世紀中頃のものとみられる。この瓦器椀片からピット124は13世紀中頃以降に埋没したことがわかる。この他の建物跡などのピット群についてもおおむねこの前後のものとみられる。

溝14西の掘立柱建物　ピット144・142・147・146・196・189・186・182から復元される。瓦器椀などの小片が含まれるものがある。棟の方向は北西から南東を軸とし、梁行２間、桁行３間以上



第292図　2012－2次　古代末～中世前半遺構平面図



第293図　2012－2次　第1調査区古代末～中世前半遺構断面図

とみられる。梁行 2.5m、桁行３ｍ以上である。

溝 14 南西の掘立柱建物　ピット 165・166・198・159 から復元される。棟の方向は北西から南東を軸とする。攪乱の激しい地点であり不明な点が多いが、梁行 2.5m、桁行３ｍ以上である。

石列西のピット群　近世以後の攪乱により全容は不明であるが、ピット群が検出されている。ピット 176・175・171・169 で一列、ピット 170・168・167 で一列、ピット 172・173 で一列になり、柵列や、建物跡であった可能性が考えられる。いずれの軸も正方位からは大きく傾く。

第１調査区西端の掘立柱建物　達磨窯と関連遺構による攪乱の下層で検出された。ピット 208、210、204、201、206 から復元される。また周辺に関連する可能性のあるピットが散在する。棟の方向は北東から南西を軸とし、梁行２間、桁行２間以上とみられる。梁行 3.5m、桁行 5.5m ほどとなる可能性がある。

(b) 溝群

第１調査区溝 14 は不定形の溝であるが、おおむね南南東から北北西へのびるもので第２調査区溝４に連続する。第２調査区溝２はやや幅が狭く、第１調査区までのびる。この２条の溝が屈曲して、第２調査区溝１・２に接続する可能性があるが、調査範囲が限定されており、確定できなかった。第２調査区のその他の溝５・８も検出範囲が限定されるものの、おおむね北西から南東へのびるものとみられる。第２調査区溝３は西南西から東北東にのびる浅い溝である。他の溝によって切られており中世でも古い段階の遺構と考えられる。いずれも溝 10 のように形態は整っていないものの方向が類似している。溝 10 の前身となる区画として機能した可能性がある。

(c) 小結

弥生時代以後、遺構・遺物が希薄であった同地点周辺における人為的な活動の痕跡が認められるようになったのがこの古代末から中世前半の遺構群と評価できる。この頃に集落域として整備が進んだものとみられる。

そこで確認された建物方位は、地形に即したものとみられる。区画溝形成時ほど整ったものとはみられない。出土遺物からは、この集落域形成後に区画溝をともなうものへと変貌する。

（７）弥生時代の遺構

調査地の北半の第１調査区拡張部・第２・３調査区で弥生時代の弧状の建物周溝跡とピット群、炉などが検出された。中位段丘上を利用した集落域である。図化し得たものは少ないが弥生土器の小片・打製石鏃・サヌカイト剥片が出土しており、弥生時代の中期頃の遺構群とみられる。残存する周溝から、少なくとも２基の建物跡が存在したと考えられる。遺構の切合い関係からは、竪穴建物１が古く、竪穴建物２が新しい。

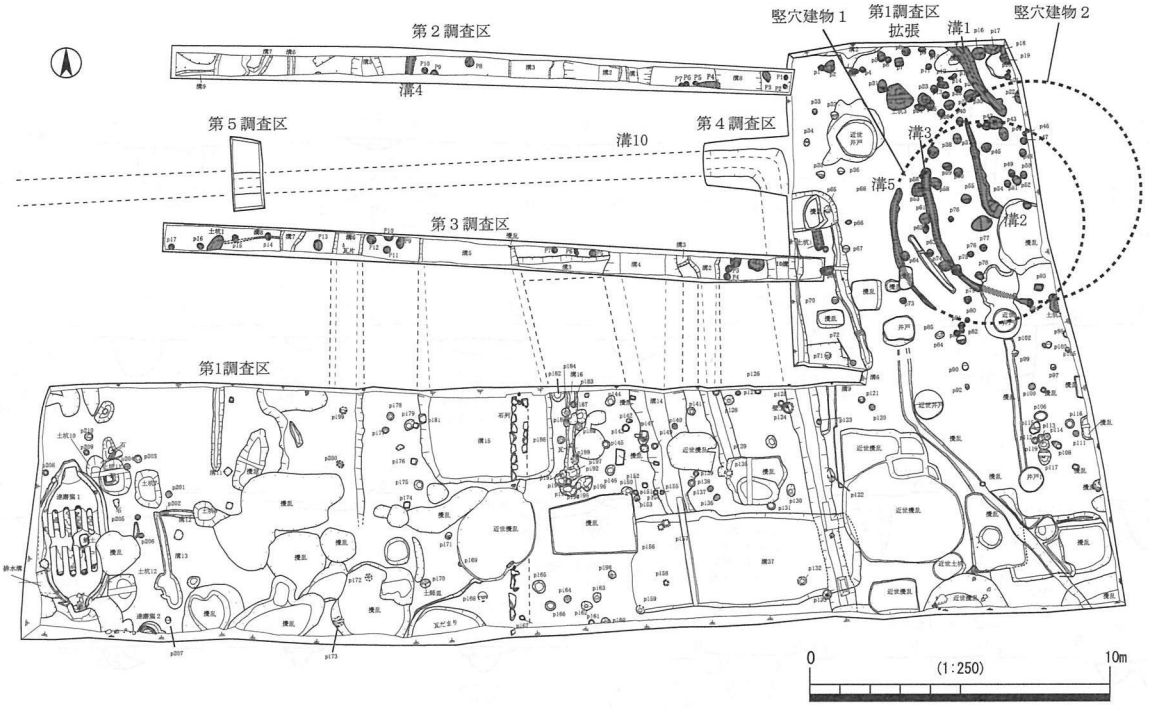
(a) 竪穴建物１

近世堆積層を除去した面で検出した。もっとも西で検出された建物周溝の溝５とそれに伴うピット・炉跡から復元される。残存地盤の標高が低い調査区東端では周溝の溝５が削平され、住居の覆土も遺存していなかった。遺構本来の上部層は後世の改変により大きく損なわれたことがわかる。

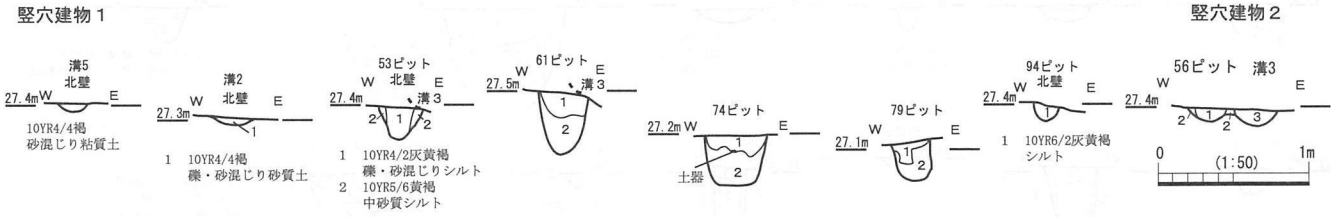
溝５より推定される建物の推定径は約７ｍである。竪穴建物内の覆土は削平されており、残存する周溝もわずかに埋土を残すものとなっていた。

中心部で確認された炉跡はほぼ削平されており、ごくわずかに焼土が堆積するのみとなっていた。炉跡の近くから建物外側へとのびる溝２は排水溝と考えられる。

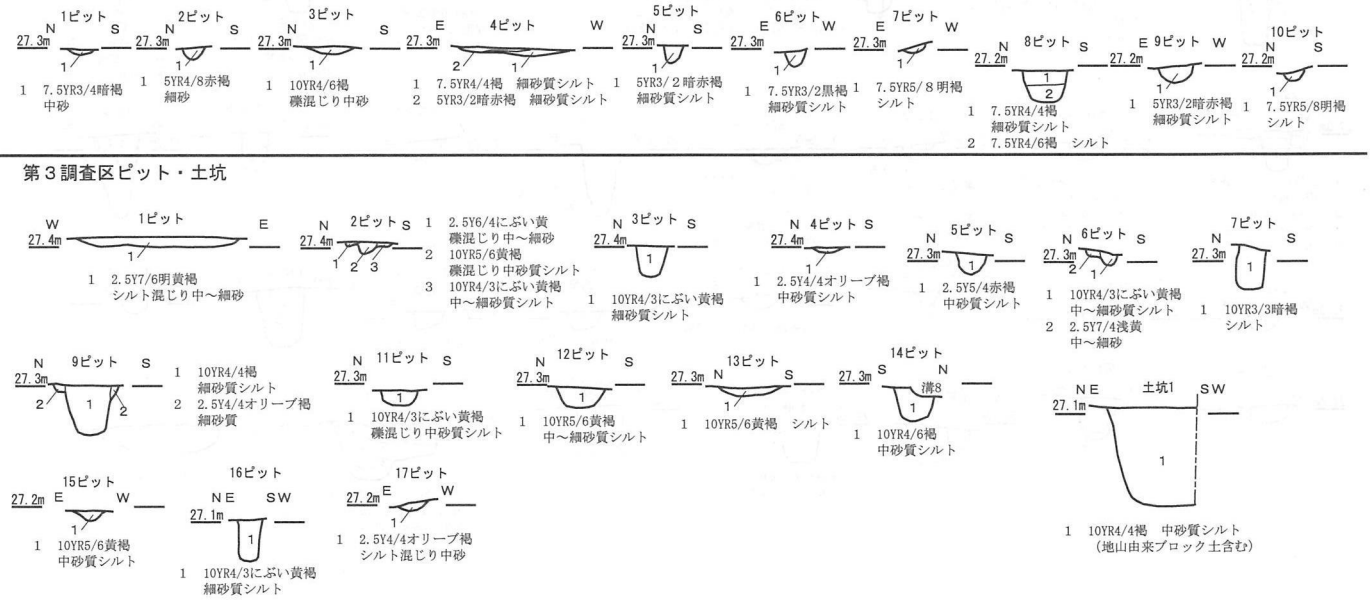
ピット 53・61・74・79・94 などが同建物に伴う柱穴痕跡と推定される。これらのピットは竪穴建物２の周溝３により切られることから、竪穴建物１の廃絶後に、竪穴建物２が建てられたことが



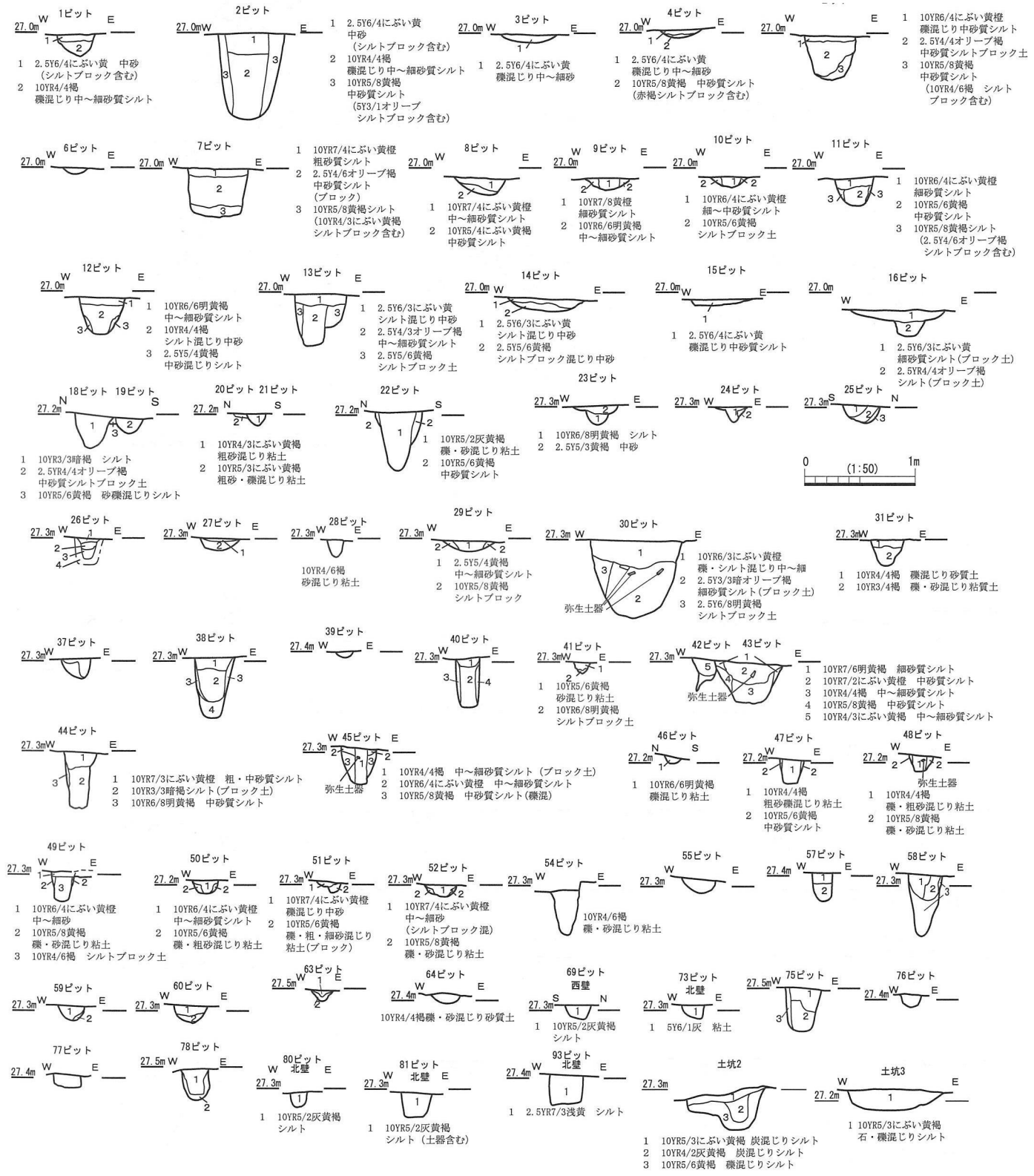
第 294 図　2012 - ２次　弥生時代遺構平面図



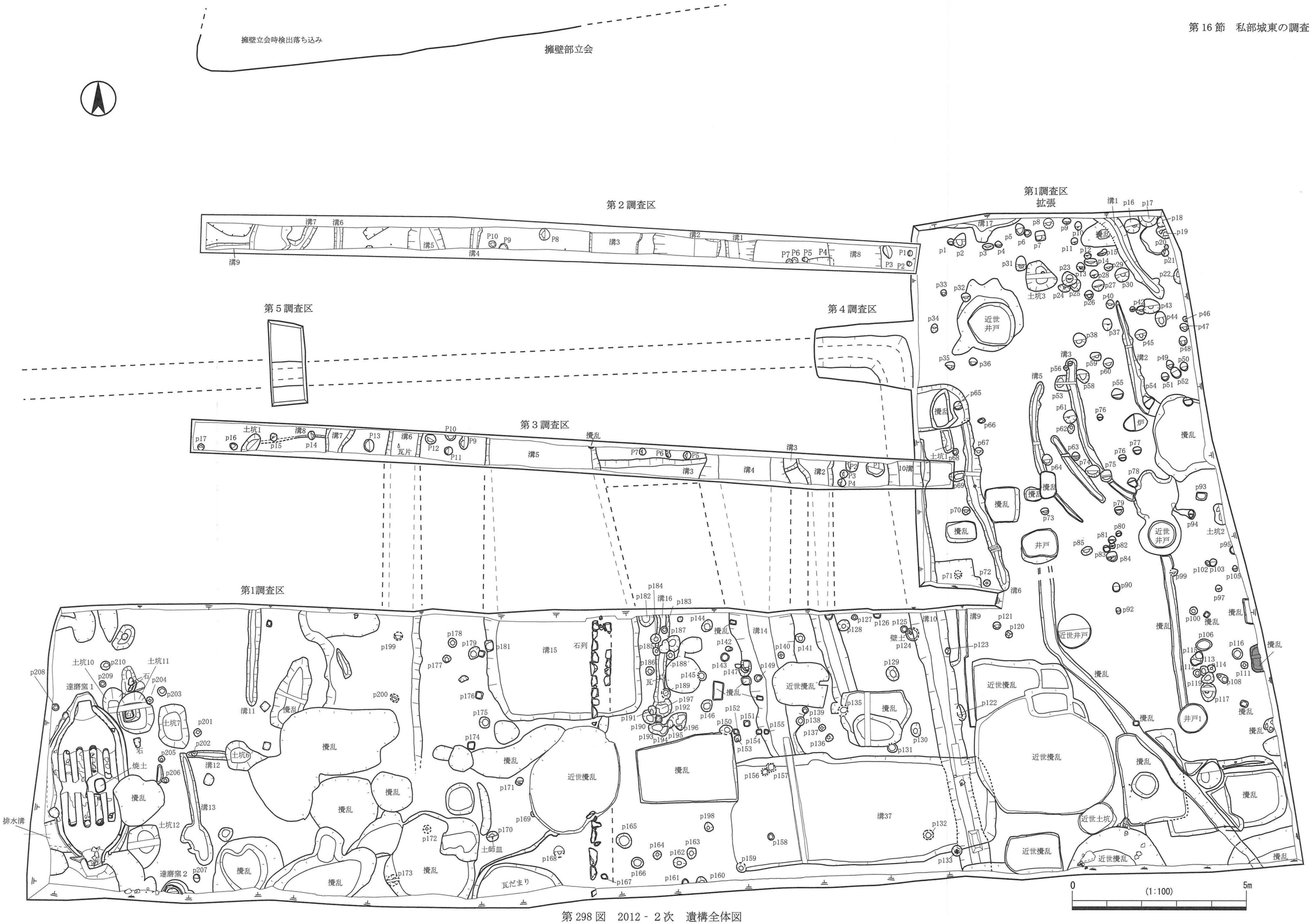
第 295 図　2012 - ２次　第１調査区弥生時代遺構断面図



第 296 図　2012 - ２次　第２・３調査区弥生時代遺構断面図



第297図　2012－２次　第１調査区弥生時代遺構断面図



第 298 図　2012 - 2 次　遺構全体図

わかる。他のピットは、竪穴建物２とも重複し、いずれの建物に伴うものか判断できなかった。

(b) 竪穴建物２

弧を描く周溝の溝３から推定復原される。竪穴建物１と同様に、上部は後世の改変により大きく削平されている。

溝３より推定復元される建物直径は約7.3mである。建物の大半は調査範囲外に残る。

同建物の中心方向に向かってやや屈曲しながらのびる溝１は排水溝と考えられる。

ピット22などが同建物に伴うものと判断できるが、全体を検出しきれていないこと、竪穴建物１との重複範囲が大きいことからいずれのピットが同建物跡に伴うものかは確定できなかった。

(c) その他ピット群・土坑

第１調査区ピット・土坑群　竪穴建物１・２の北側を中心として、竪穴建物の遺構埋土と類似する埋土のピット・土坑などが密集していた。

特に後世の削平が著しい箇所であり建物跡として復元はできなかったが、相前後する時期の竪穴建物が存在したものと考えられる。

第２調査区溝・ピット群　検出されたピット中に弥生土器小片が混じるものが認められ、層相も第１調査区で検出された建物の埋土と類似することから、弥生時代のものと考えられる。溝４は緩やかにカーブする形態から竪穴建物の周溝である可能性が高い。ただ、その周辺は中世の溝により大きく削平されており、建物跡として復元するには至らなかった。

第３調査区溝・土坑群　第３調査区でも層相の類似と、弥生土器小片を含むことから弥生時代遺構と推定されるピット・土坑が多く検出された。周溝は検出されておらず復元には至らなかったが、建物跡が存在したものと推定できる。

以上のように、周囲を低地部に囲まれた台地上の集落域を確認した。

（８）出土遺物（第299～307図）

出土遺物の大半は擁壁部で検出された落ち込みと第１調査区溝10で検出された。また、その他に中世遺構でわずかに小片が検出されている。弥生時代遺構からは、図化し得ない小片や剥片などが出土したのみであった。

(a) 擁壁部堀状落ち込み出土瓦（第299～303図）

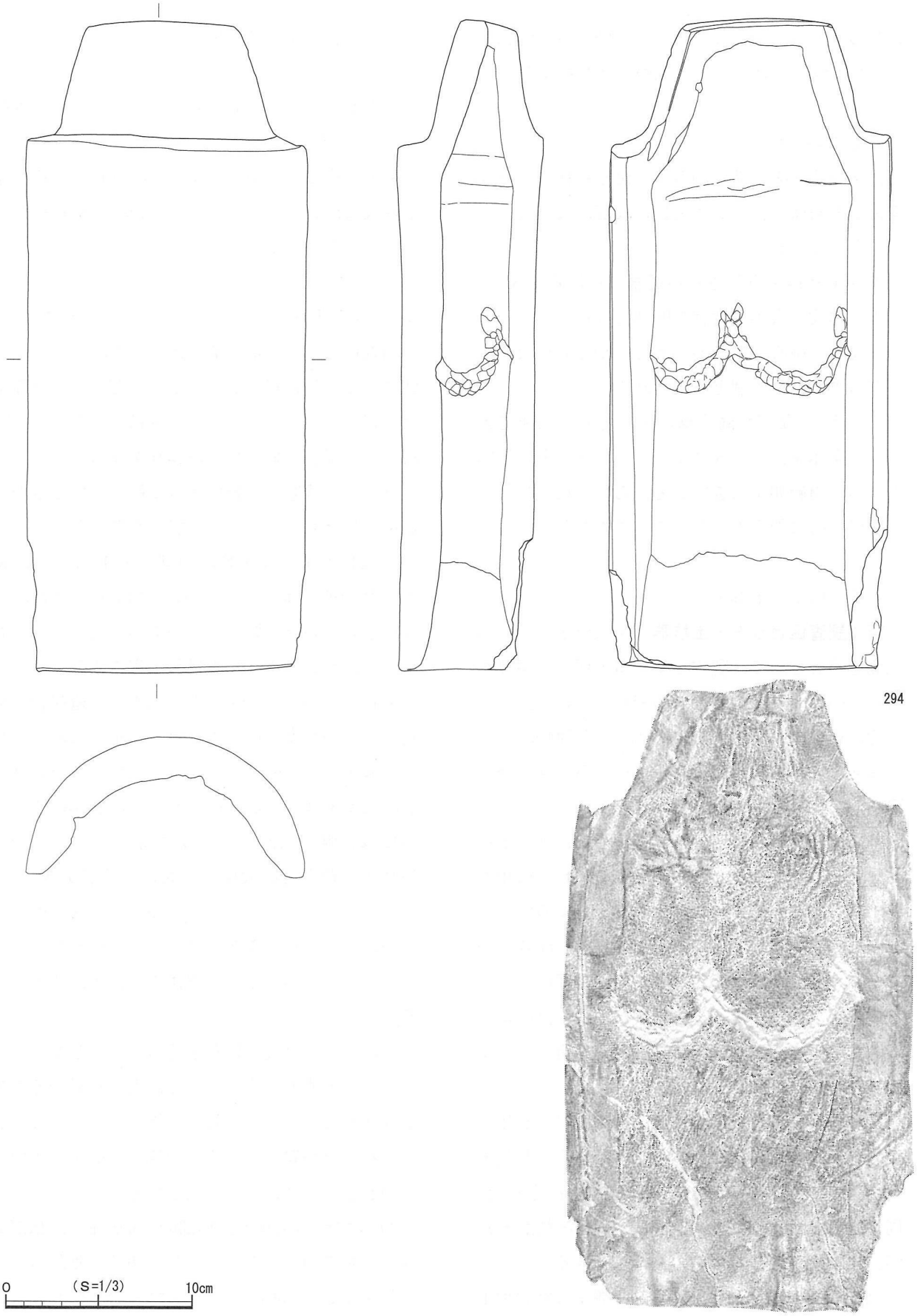
調査地北端の堀状の落ち込みからは、本郭や出郭に次ぐ多量の瓦が出土した。ただし、その種類は平瓦と丸瓦のみであった。定量瓦が出土していながら軒平瓦や軒丸瓦、道具瓦を伴わないことからは、津田城遺跡や勝龍寺城で検出された暗渠に転用されたものであった可能性も考えられる。

平瓦片の製作技法等は出郭上の1997－２次調査区井戸や、本郭上の1994－２次第２調査区土坑出土のものと類似するものであった。いずれも小片のためここでは図版掲載を省略する。

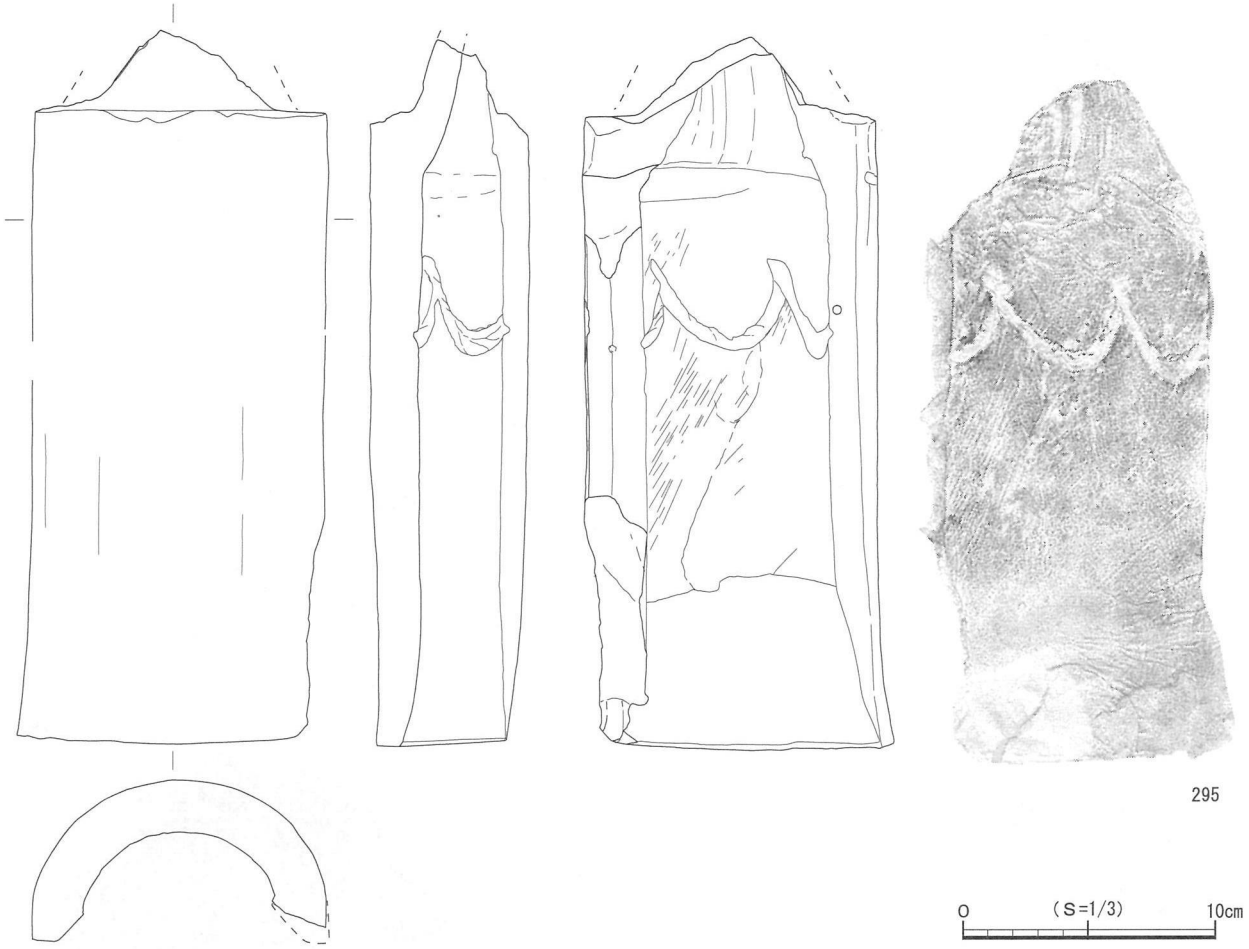
丸瓦については、他調査区に比べて遺存状況が良好なものが多く検出された。法量からみると私部城域出土瓦の中でも大ぶりなものから小ぶりなものまで多様ものが混在する。その製作技法については、胴部凹面の糸切り痕跡（コビキA）や、吊り紐痕跡などの大枠では共通する点が多いが、細部の面取り位置などに差が多い。胴部凸面調整についても、縄叩き後、縦方向にナデを施すという点までは共通するが、個体ごとに差が認められる。

胎土については荒い礫を多く含み類似したものであるが、焼成の程度については大きく異なるものが混在している。こうした差異により一括して記述することが難しいため、形態が判明する主要なものをとりあげ、個別に記述する。

294は全長34.9㎝、胴部幅15.0㎝と、私部城域出土瓦の中で大ぶりな丸瓦である。私部城本郭採集瓦（79）と同法量とみてよい。端部面取りは、胴部凸面狭端縁、玉縁部凸面狭端縁などにも及び、



第 299 図　2012 - ２次　擁壁部出土丸瓦１



第300図　2012－2次　擁壁部出土丸瓦2

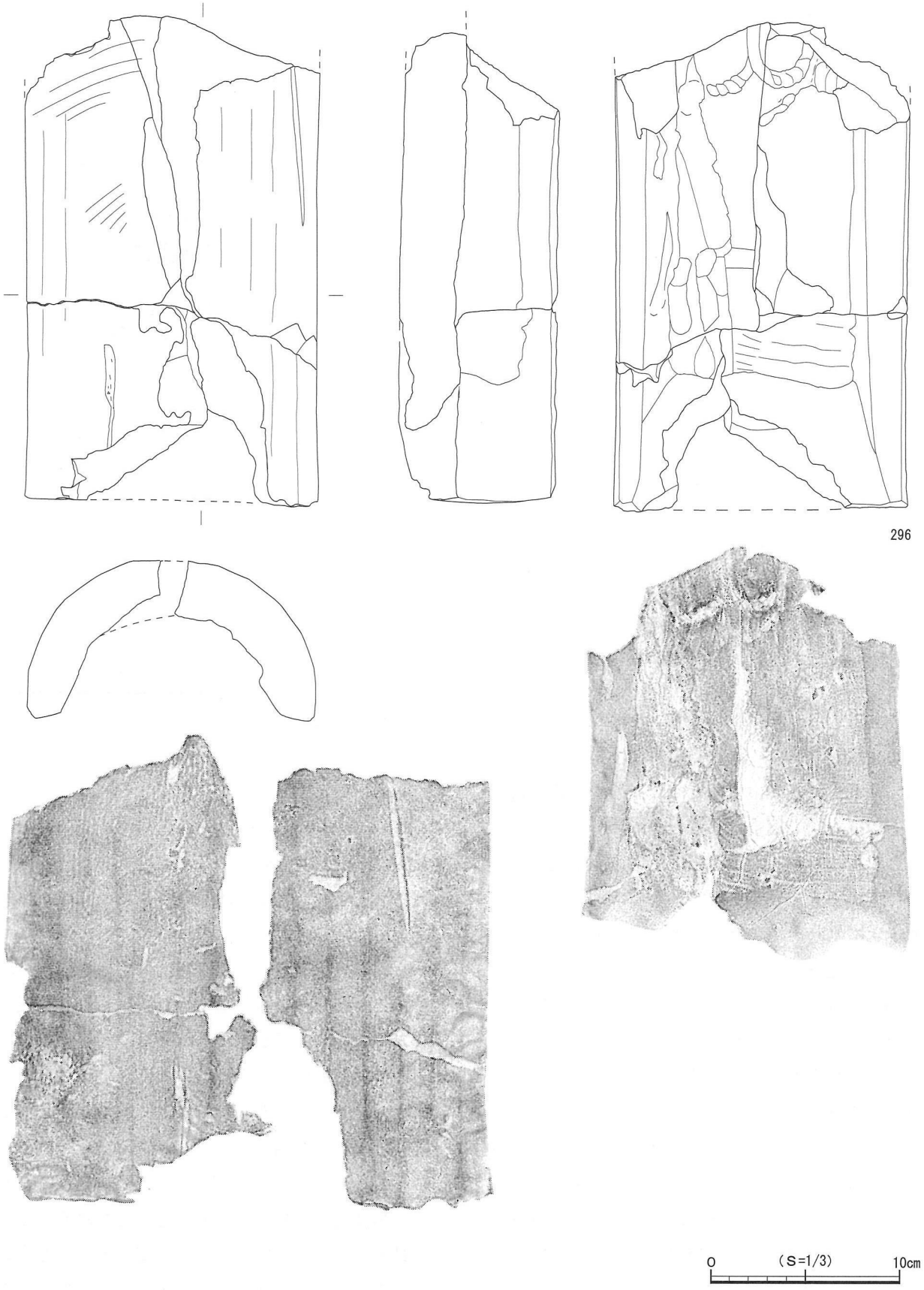
私部城域出土瓦の中でも丁寧なものである。胴部凸面の縦方向の調整は、縦方向のナデも行っているものとみられるが、仕上げに幅1cm未満のミガキに近いナデを細かく施す。他の瓦類と差がある。燻焼きにより黒色に近い色調に焼き上がり、わずかに銀黒色を呈する箇所が認められる。

295は胴部幅11．7cm、胴部長25.3cmである。推定される全長は30cmに満たないものとみられる。幅・長さともに私部城域出土丸瓦でも、もっとも小ぶりなものである。焼成良好だが、燻しは弱く、やや黒味が強くなる程度のものである。胴部凸面は縦方向に板条工具によるナデを行う。縦方向のナデを切って、部分的に斜め方向の擦痕が認められる。縄目叩きの痕跡は認められない。

細部の面取りについては、294と同じく胴部凸面狭端などの細部にも行うが、294に比べると荒いものである。

296は胴部片であり、胴部幅15.5cm、厚さ2.6cmから3.1cm前後の大ぶりなものである。断面は灰白色を呈し、程度の弱い燻焼きにより外面は薄い青灰色に焼きあがる。

凸面は板状工具により縦方向にナデを行う。木製工具のものとみられる木目も認められる。縦方向のナデ後に工具が当たった痕跡や、斜め方向の擦痕が部分的に認められる。糸切り痕跡は広端部よりの位置で横方向に痕跡が残り、コビキB手法のように見える箇所もあるが、胴部中位付近で斜めに変化しておりコビキA手法によるものである。吊り紐痕跡を切って内叩きが行われる。この工具痕には目の粗い布目が伴っている。布を巻いた幅1cmほどの棒状の工具によるものと推定できる。胴部側縁凹面の面取り幅が、胴部側面の面取



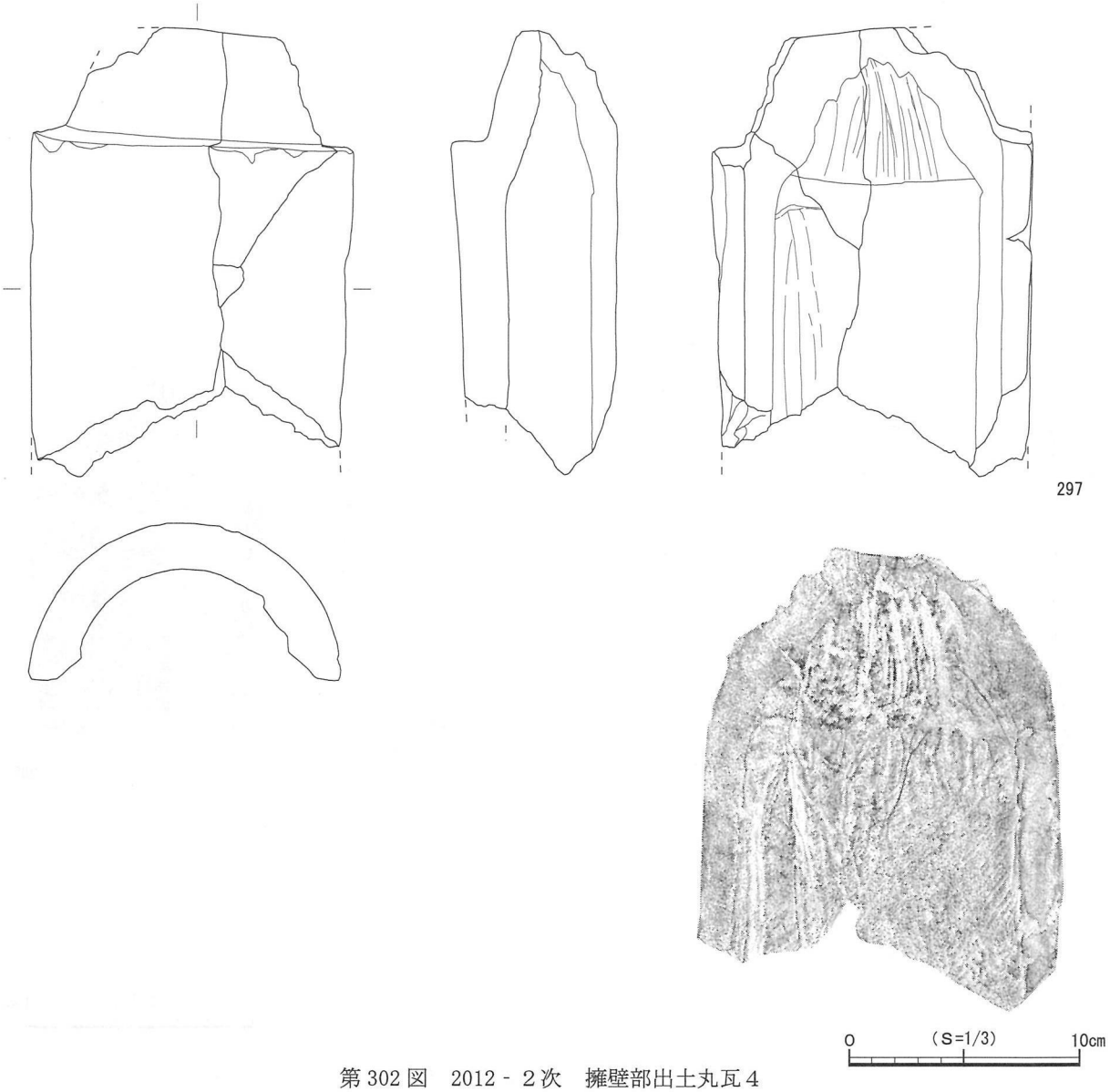
第 301 図　2012 - ２次　擁壁部出土丸瓦３

り幅より大きい箇所が認められ、胴部側縁の端部はにぶい形状を呈する。

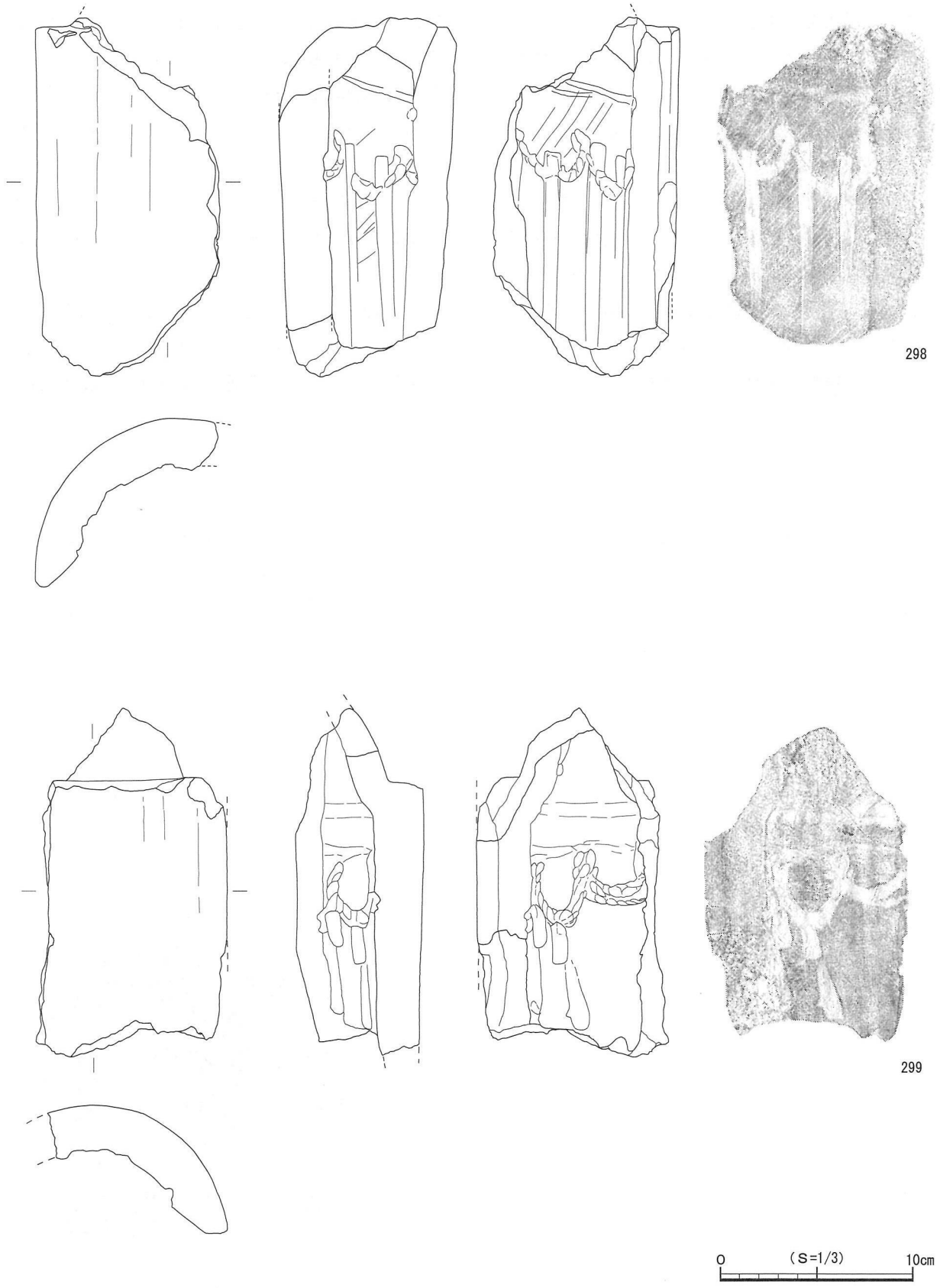
297は胴部幅13.7㎝である。焼成不良のためか、燻しが弱く断面・外面ともに灰白色を呈するものである。胎土に関しては、他の瓦と類似し、礫を多く含むものである。凸面調整は縦方向に工具によるナデを施した後に、部分的に横方向のナデを施している。294と同様に細部まで面取りを行うが荒い。胴部側縁端部の形態はにぶいものである。

298は、胴部片で法量の詳細は不明である。凹面に工具による内叩きを４回行った痕跡が認められる。吊り紐痕跡を切るものであり、凹面調整の最終工程で行われた叩きと認められる。その工具は最大幅0.8㎝で、長さは9㎝以上のものである。次の299の痕跡に比べて角ばったものである。胴部側縁端部は鋭い形態のものである。焼成良好であるが、燻しは弱く、断面と内外面ともに薄い青灰色を呈する。

299も内叩き痕跡を残す丸瓦胴部片である。胴部側縁端部がにぶい形態をとる。焼成良好であるが燻しは弱く、断面・内外面ともに青灰色を呈する。凹面に工具による内叩きを４箇所認めることができる。特に、胴部凹面側縁の面取りを切る叩き痕跡を確認でき、製作工程の中でも最終段階の



第302図　2012－２次　擁壁部出土丸瓦４



第 303 図　2012 - ２次　擁壁部出土丸瓦５

ものであることがわかる。工具の幅は最大0.8㎝で、全体的に丸みが強いものである。同遺構では、出土点数に対して内叩き痕跡を伴う破片点数の比率が高い。

私部城跡1997－２次で検出された瓦群と特徴が類似するものから、本郭出土の瓦群と類似するものまでが含まれる。また、いずれにも認められない特徴のものも存在した。16世紀頃の中でも複数時期の瓦が混在するものと考えられるが、私部城の本郭などと併存する時期に製作・利用された一群も含まれる。後述の区画溝付近出土のものと比べると新相のものである。擁壁部で検出された落ち込みが、私部城と併存したことを裏付ける資料である。

法量・調整技法ともに多種多様であることからは、本来は同一建物の瓦ではないものと推定される。丸瓦・平瓦のみが検出された点から、周辺の瓦を集め、暗渠などに転用したものとみられる。

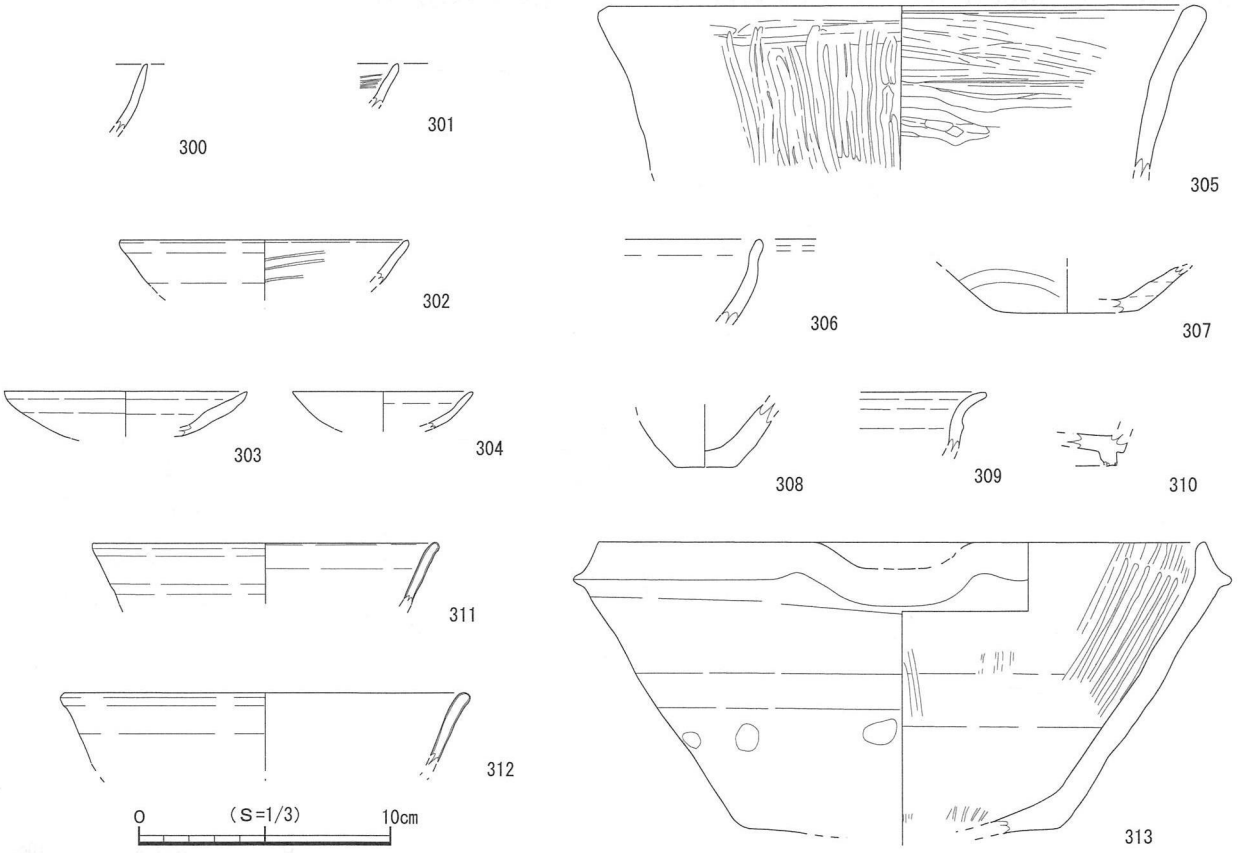
(b) 溝10出土遺物（第304～306図）

瓦器椀　300は口縁は内湾し、端部を尖らせ気味におさめる瓦器椀片である。楠葉型瓦器椀である。301は内湾する口縁部をもつ瓦器椀片で、300に比べると厚みがあり、内面に目の細かいミガキ痕跡が認められる。13世紀中葉前後の楠葉型のものとみられる。301も楠葉型瓦器椀の口縁部片でおおむね13世紀頃のものとみられる。

土師器皿　303の胎土は白色系である。その形態は、いわゆる「ての字」口縁が退化したものである。12世紀前半前葉頃に位置付けられる（千喜良2002）。

304は黄橙色系の胎土で、口縁部は外側に向かって開き、端部はつまみ上げる。15世紀中葉から後葉頃のものである（千喜良2002）。

陶器・磁器類　306は天目茶碗の口縁部片である。褐色の釉をかける。瀬戸美濃産のものとみられる。



第304図　2012－２次　第１調査区溝10出土遺物

青磁　311・312は椀口縁部片である。いずれも屈曲して外反する。白色の胎土に1㎜以下で施釉される。

備前陶器　313は擂鉢である。備前編年Ⅲ期にあたり13世紀後葉から14世紀初頭頃のものである（伊藤1995）。内面は使用により著しく摩耗している。擂り目は７本で一単位である。

瓦質土器　306は深鉢である。口縁部が外反し、外面に縦方向、内面に横方向のヘラミガキを施す。15世紀頃のものとされる（立石1995）。

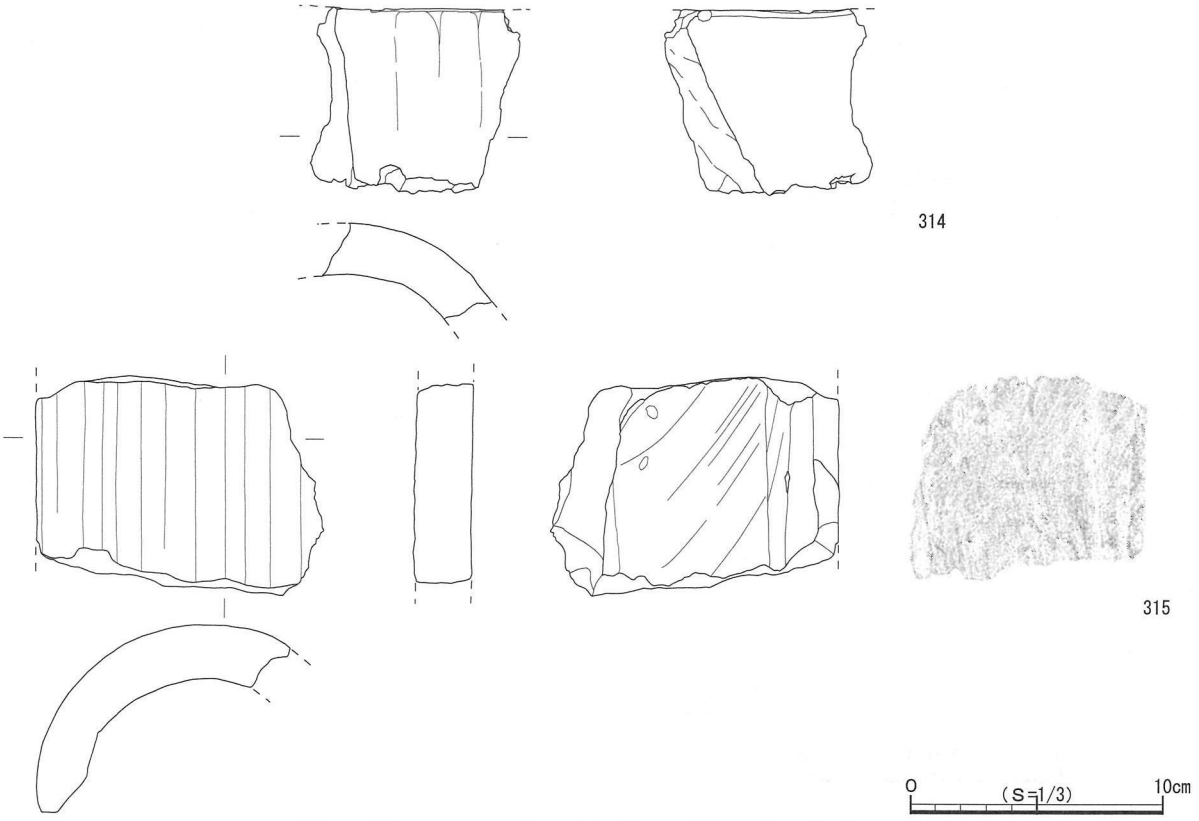
丸瓦　314・315は丸瓦片である。凹面に糸切り痕跡を残す。315はにぶい側縁端部形態をとるものである。

平瓦　316～320は平瓦片である。316は凹面側の側縁より1.5㎝付近に屈曲点がある。同様の位置に屈曲点をもつ破片が数点認められ、凸型台の形状を反映したものと推定される。凸面は糸切り痕跡をかすかに残し、縄目叩き痕跡が認められる。側縁にバリが認められない。以上の特徴からは、製作工程の最終段階を凸型台上で成形されたものと推定される。私部城本郭出土瓦には認められないものである。16世紀代のものではなく、15世紀またはそれ以前の年代のものとみられる。

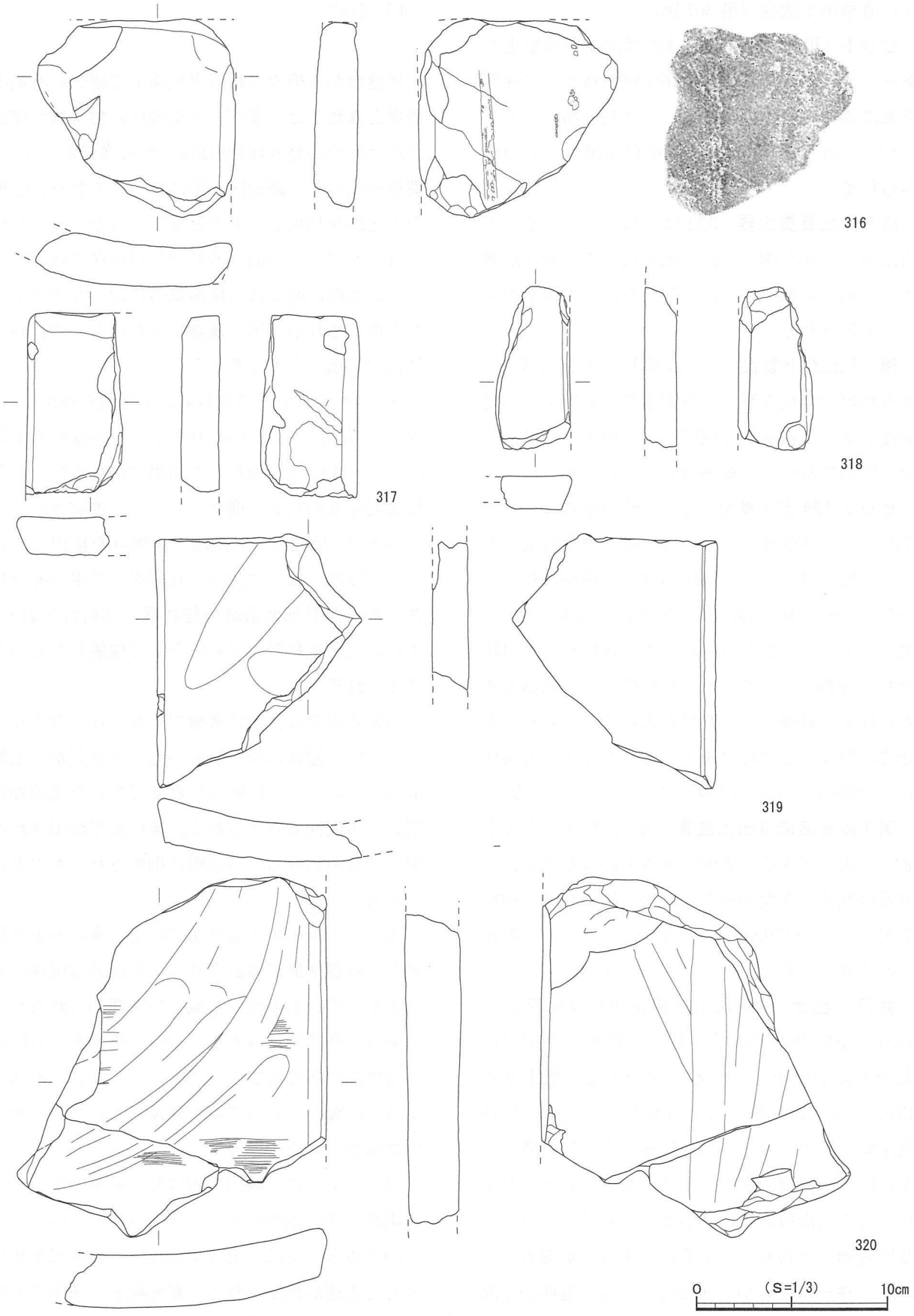
319は硬質に焼成された平瓦片である。中央部で厚さ1.9㎝、側縁部で最大2.2㎝と厚さに偏りがある。その他の調整は320と類似する。

320は、溝10の第１調査区北壁断面下層で出土した平瓦片である。側縁側で2.6㎝、中軸付近で2.2㎝と厚さに偏りが認められる。凹面は横方向と斜め方向のナデを施す。凹面側の側縁端部は丸く収める。凸面はナデを行わず、表面が荒い。砂粒の剥離痕跡や、粘土粒の付着痕跡、指頭圧痕が認められる。凸面側の側縁端部から1㎝ほどに縦方向のナデを施し、端部を丸くおさめている。

以上、13世紀から15世紀頃の遺物が検出された。瓦についても、16世紀頃の私部城中心域のものと異なる特徴のものが多いことから、この頃のものとみられる。



第305図　2012－２次　第１調査区溝10出土丸瓦



第306図　2012－２次　第１調査区溝10出土平瓦

（c）遺構出土遺物（第 307 図）

ピット 170 出土土師器　321 は褐色系の胎土である。丸底の底部外面に指頭圧痕が残り、口縁部外面に横方向のナデを施す。千喜良分類 c 類のⅡ－１期、10 世紀後葉から 11 世紀初頭頃のものとみられる。

溝６出土瓦質土器　322 は口頸部片である。上部に透かし孔が認められ、風炉などの可能性が考えられる。詳細な年代は不明だが、中世後半のものと推定される。

溝 17 出土土製品　323 は輪状土製品である。焼成良好で褐色を呈する。窯道具（トチン）の可能性がある。調査地北端で一部を検出した溝出土で、周辺で関連した遺物は認められなかった。

ピット 124 出土壁土　324 の壁の厚さは 5.2 cm である。内外壁側 1.0 cm分ほどは、礫を多量に含む土で構成される。小舞は腐食して中空になっている。この木舞痕跡には、直径 1.7 cmほどの半円状のものと、V 字状のものが認められる。半円状のものは割竹、V 字状のものが葭などの植物と考えられる。縦横ともに割竹が用いられており、部分的に葭など他の部材を用いる。瓦器椀片も共伴し、中世前半の 13 世紀頃の年代を与えられる。

第１調査区溝９出土銭貨　326 は拓本から宝永通宝と判断できる。裏面の拓本も採取したが、文字等は判読できなかった。宝永５年（1708）初鋳で宝永６年（1709）に通用停止している。溝 10 との切り合い部で出土したものである。

井戸１出土　325 は半截菊花唐草文軒平瓦である。交野市内の山岳寺院・岩倉開元寺跡で同文のものが出土している（交野市文化財事業団 2012）。瓦当貼り付けによるもので、文様から 15 世紀頃のものとみられる。後述の中世区画溝に伴う瓦群と同時期の資料である。なお、瓦当面を中心として二次被熱の痕跡が認められる。井戸１は近世遺物を含む井戸であるが、中世瓦が混入していた。井戸の掘削か、埋没時に周辺の遺構から混入したものとみられる。

（４）小結

地盤層から構成される平坦面上で幅広い時期の遺構を確認した。まず、弥生時代の集落域が確認された円形の竪穴建物痕跡のほか、多量のピット・溝を検出した。調査区北半に集中しており、台地上の北端を利用したものと推定される。その北側には百々川などが流れる低地部が存在することから、低地部に囲まれた環濠集落に近いものであったと推定される。出土遺物は少ないものの、弥生時代中期頃のものと考えられる。

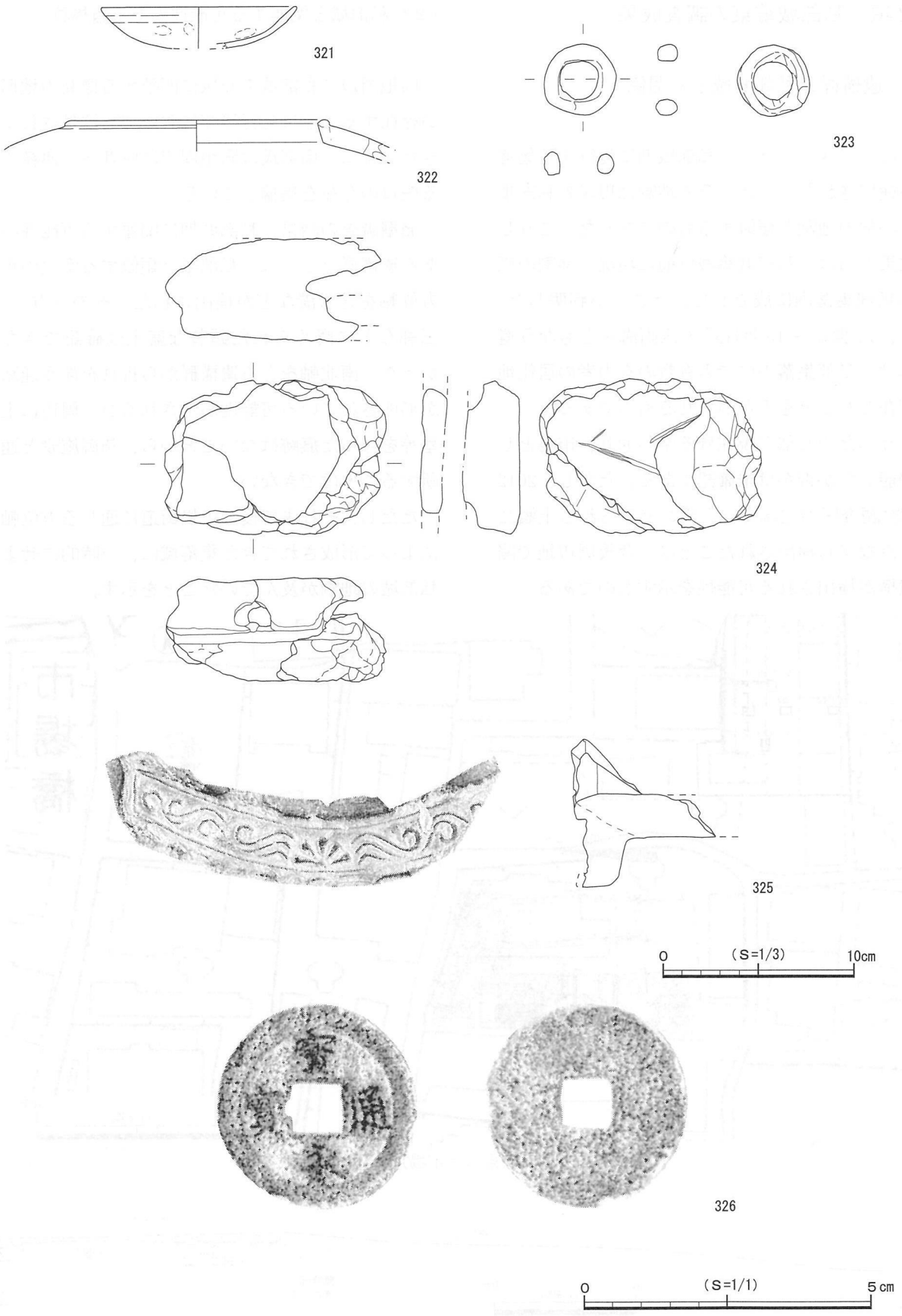
次に、古代末から中世前半の集落域を検出した。10 世紀後葉から 13 世紀頃までの時期幅が考えられる。弥生時代以後長らく利用されてこなかった私部北東部の開発が進展したものと推定される。

14 ～ 15 世紀頃の区画溝と遺構群を検出している。当該期には、古代まで私部周辺で中心的な集落であった私部南遺跡の建物群が途切れており、それに代わる私部の中心部として機能したものと考えられる。

同地周辺では、中世遺構でも瓦小片が含まれていたほか、近世以降の層中からも中世瓦が一定数混入している。室町時代に私部で栄えた光通寺に関わる可能性も考えられる。擁壁部で検出された堀状の落ち込みもこの段階に掘削されたものとみられる。

また、中世後半の遺構を切って、南北の正方位軸をとる遺構群が確認された。同様の方位軸は私部集落中で、私部城中心域にのみ認められるものである。私部城が機能した段階と相前後する時期の遺構群である可能性が高い。この場合、私部城築城の影響がその周辺域まで及んでいたことを示す遺構群と評価できる。

以上のように、同地周辺は私部城期以前から私部集落の中心的な位置にあったものとみられる。その主体としては、第５章で述べられる私部集落の有力者達が想定される。私部城との関係については、次項で整理することとしたい。



第307図　2012－2次　第1調査区遺構出土遺物

第２項　私部城跡東の調査成果

（１）遺構群と私部城域との関係

先に見てきたように、私部城期に先行する集落域が検出された。また、その地割は現況の私部集落中心部の地割と類似するものであった。こうした成果からは、私部城築城以前に現況の地割の原型が私部集落内に成立していたことが判明した。また、14 世紀～ 15 世紀頃の区画溝をともなう遺構群は、私部集落の中でも有数の有力者の居住地が存在したことをうかがわせるものであった。

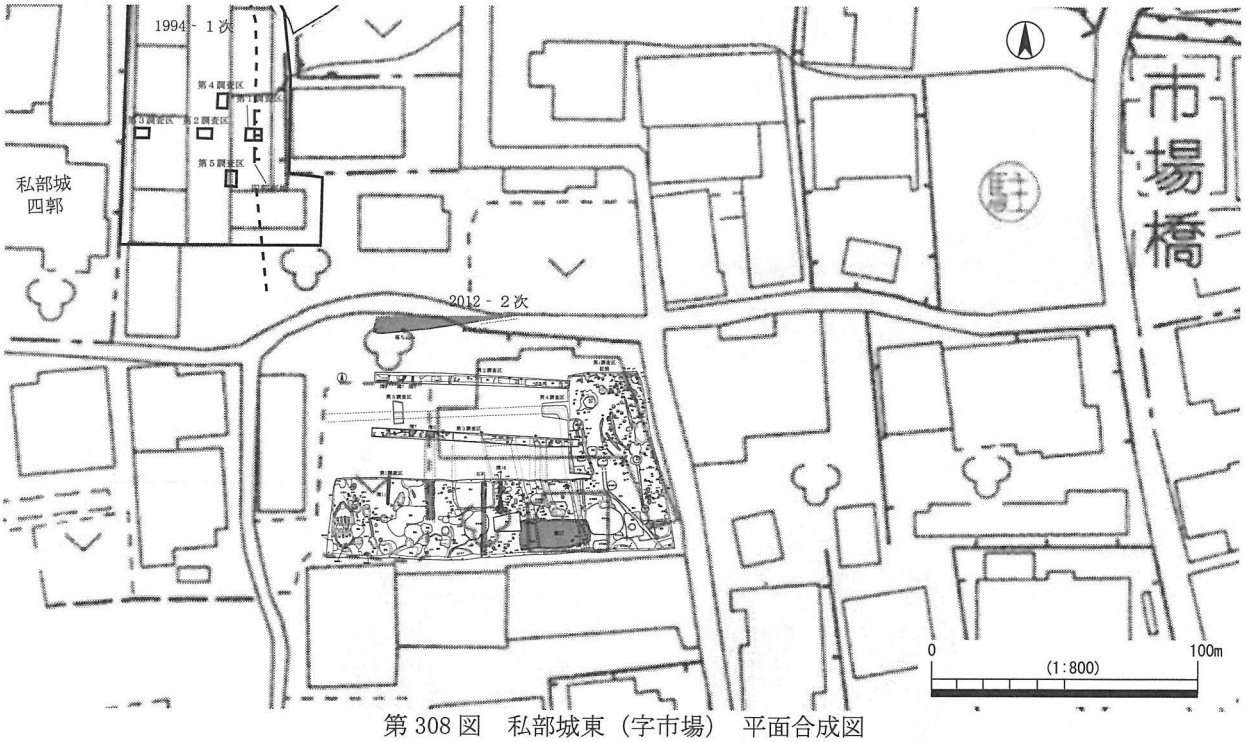
こうした中心部が現在残る字の通り、市場として機能したか否かは未確認である。ただし、2012 - ２次調査区の北端で、トチンとみられる土製品が一点ながら検出されたことは、今後周辺地で関連遺構が検出される可能性を示すものである。

（２）私部城と関連する可能性のある遺構群

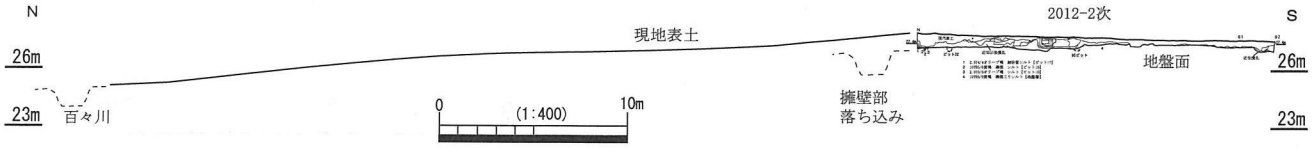
同地周辺に私部城中心域に匹敵する標高の地形が存在することは先行研究においても注目されてきた。特に、馬部氏は同地周辺に四郭へと連続する虎口の存在を指摘している。

発掘調査の結果、私部城期に関連する可能性のある遺構群としては、私部城と類似する南北の正方位軸をとる溝などが検出された。その一方で、三郭などに認められた顕著な盛土は確認できなかった。南北軸をとる遺構群から折れを伴う通路が形成されている可能性が示されるが、周辺に土塁等を伴った痕跡はないことから、防御施設と速断することはできない。

ただし、それまで後の山根街道に通じる方位軸によって形成されてきた集落域に、一時的にせよ私部城の地割が及んでいたことを示す。



第 308 図　私部城東（字市場）　平面合成図



第 309 図　私部城東（字市場）　南北断面図

第17節　私部城南の調査

第1項　2012－5次調査

（1）地点と調査に至る経過

私部城の所在する台地の南に、東西に延びる開析谷がめぐる。今回の調査地点は、この私部城南の開析谷の中にあたり、現在の交野市役所別館の西に位置する。この地点に、市役所の第二別館を建設することとなり、試掘確認調査の機会が得られた。

この開析谷内部については、従来私部城跡の範囲外としていたために、これまで発掘調査が実施されてこなかった。このため谷内部の堆積状況や、堀などの遺構の有無について、これまで確認できていなかった。今回は、こうした課題を解決するために、調査を実施した。

南北約17m、東西約2mの調査区を設定し、遺構の有無を確認しながら掘り下げを行った。

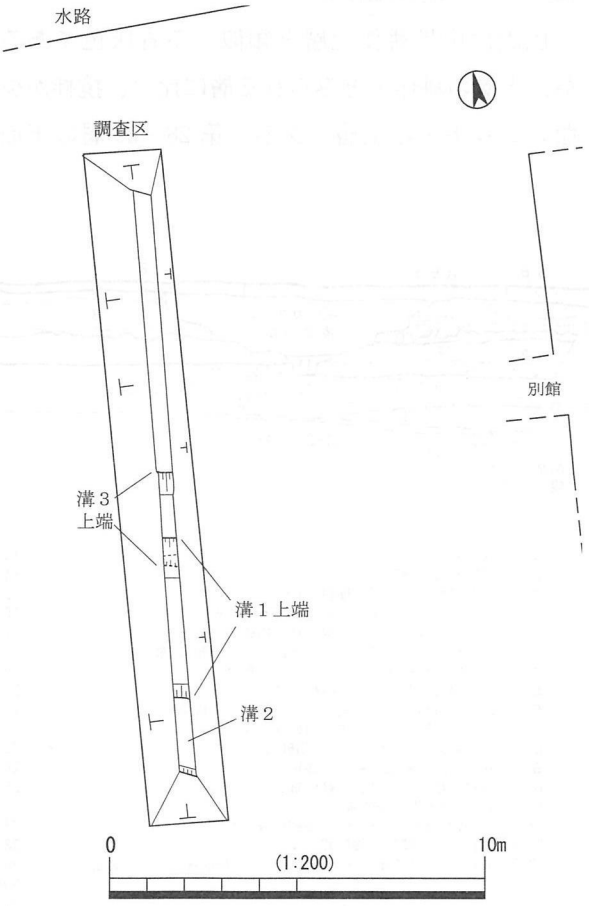
（2）基本層序（第312図）

(a) 近現代整地土

現在の地表面は駐車場として利用されており、アスファルト舗装されていた。2層以下を切る現代攪乱も確認できる。

下層の浅黄色の粗砂は、上面を平坦に揃えるもので、0.8m～1.0m堆積する。市役所別館建設前の学校グラウンドの整地土である。同層中には、スプリンクラーなどの配水パイプが含まれていた。同層の段階の状況は、航空写真や、教育委員

第310図　2012－5次　調査地点位置図



第311図　2012－5次　調査区平面図

会所蔵の風景写真で確認できる。

(b) 近世耕作土

青灰色の砂質シルトが水平に堆積する。水田などの耕作に伴うものとみられる。第12層中で近世瓦片が出土するなど、近世遺物が含まれる。中世以後から昭和初期の学校建設までの堆積層である。

(c) 中世耕作土

近世～近現代層と同様の砂質シルトが水平に堆積する。瓦器椀片等の中世までの遺物を含むことから上層と分けた。同層中には溝などの遺構も確認できる。

開析谷内部が本格的に利用されるようになるのが、この層の段階である。

(d) 中世以前の堆積層

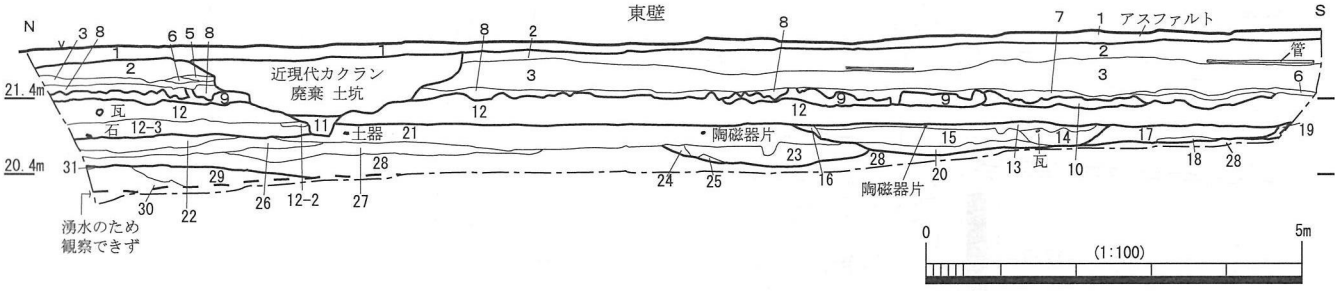
色調は中世耕作土層と類似する青灰色であるが、上層の耕作土とみられる層に比べ、撹拌が少ないシルト・粘土層である。第28・29層の下面で北側が高く、南側が低く傾く堆積状況をみせる。この傾斜は開析谷の自然地形を反映したものとみられる。中世に入るまでは、同谷内部について、本格的な農地利用はなされていなかったことをうかがわせる。弥生土器とみられる土器小片を含む。

（３）遺構

調査地中央から南よりに位置する中世層中で、数条の溝を確認している。緑灰色から青灰色のシルトブロック土を埋土としている。

溝１は、13 ～ 15, 20 層を埋土とし、残存幅は 4.1 mと広いが、深さは 0.2m と浅い。溝２は 17 層を埋土とするものである。北側の上端は溝１により削られる。幅は少なくとも 2.7m 以上である。深さは 0.2m ほどである。

溝３は 23 ～ 25 層を埋土とし、残存幅は 2.7m と広いが、深さは 0.3m と浅い。これらは同時併存するものではないが、方向は一致しており、やや場所を変えながら掘り込まれる。いずれも耕作等にともなう水路とみられる。



1　現代表土
2　10YR8/4浅黄橙　粗砂
3　5GY5/1オリーブ灰　極粗砂(上)
　5GY6/1オリーブ灰　シルト混じり　中砂(中)
　7.5GY5/1緑灰　シルト混じり　中砂(下)
　2.5GY6/1オリーブ灰　シルト混じり　極細砂(最下)
4　7.5GY4/1暗緑灰　シルト混じり　粗砂
5　2.5GY4/1オリーブ灰　粗砂混じりシルト
6　2.5GY3/1暗オリーブ灰　シルト混じり　極細砂
7　2.5GY4/1暗オリーブ灰　粗砂質シルト
8　7.5Y5/2-4/2灰オリーブ　細砂質シルト（シルトブロック混じり）
9　10Y4/1灰　礫混　粗～中砂質シルト
10　5GY4/1暗オリーブ灰　細砂質シルト
11　10BG2/1青黒　細砂質シルト
12　2.5GY3/1暗オリーブ灰　極細砂質シルト
12-2　10Y4/1灰　礫混　細砂質シルト
12-3　5GY4/1～3/1暗オリーブ灰　中砂質～細砂質シルト（礫混じり）
13　5GY6/1オリーブ灰　礫混　中砂質シルト
14　10GY6/1緑灰　シルトブロック土
15　2.5GY7/1明オリーブ灰（最大8cmのシルトブロック含む）　シルト混じり粗砂
16　10Y4/1灰　細砂質シルト
17　7.5Y6/3オリーブ黄　細砂質シルトブロック土
18　7.5Y6/1緑灰　細砂質シルトブロック土
19　10GY6/1緑灰　粗砂質シルトブロック土
20　2.5GY4/1暗オリーブ灰　極細砂質シルト
21　5GY5/1オリーブ灰　礫混　中～粗砂質シルト
22　2.5GY3/1暗オリーブ灰　細～極細砂質シルト（礫混じりｖ）
23　10GY7/1明緑灰　シルトブロック土
24　5GY6/1オリーブ灰　礫混　細砂質シルト
25　7.5GY7/1明緑灰　礫混　細砂質シルト
26　5Y4/1灰　礫混じり　中～細砂質シルト
27　7.5GY5/1緑灰～5/1オリーブ灰　礫混　細砂質シルト
28　5Y6/1-4/1灰　シルト混じり　粗～中砂
29　5Y4/1灰　粗砂質シルト
30　5Y3/2オリーブ黒　礫混じり　中～細砂質シルト　杭など有機物含む
31　5Y6/1～4/1灰　シルト混じり　粗～中砂

第312図　2012 - ５次　調査区断面図

また、調査区より南部における工事時に、井戸を確認した。木枠を伴うもので、近世から近代頃のものとみられる。

（4）出土遺物（第 313 図）

出土遺物は、主に中世の耕作土とみられる堆積層中から土器片が出土している。

中層にあたる第 12 ～ 13 層では瓦器椀片などが出土している。327 は須恵器片で蓋の端部片とみられる。古代のものである。328・329 は土師質土器小片で、椀皿類の口縁部片である。平安時代頃までのものとみられる。中層までの出土遺物には、中世前半までの遺物が認められた。

中～下層の第 27・28 層では瓦器椀・土師器皿が検出された。

334 はやや灰色がかった褐色系の胎土のものである。千喜良分類では k 類にあたり、12 世紀後半前葉頃のものとみられる（千喜良 2002）。

330・331 は大和型Ⅲ期ごろの瓦器椀口縁部片である。12 世紀中頃から 13 世紀中頃のものとみられる。

332 は体部片であるが、内外面ともに濃密にミガキが施されており、Ⅱ－１期ごろまで、12 世紀中頃までにおさまるものとみられる。

333 は三角形の高台片をともなう。内面に輪状のミガキ痕跡が認められ、大和型か楠葉型のものと考えられる。12 世紀後半頃のものとみられる。

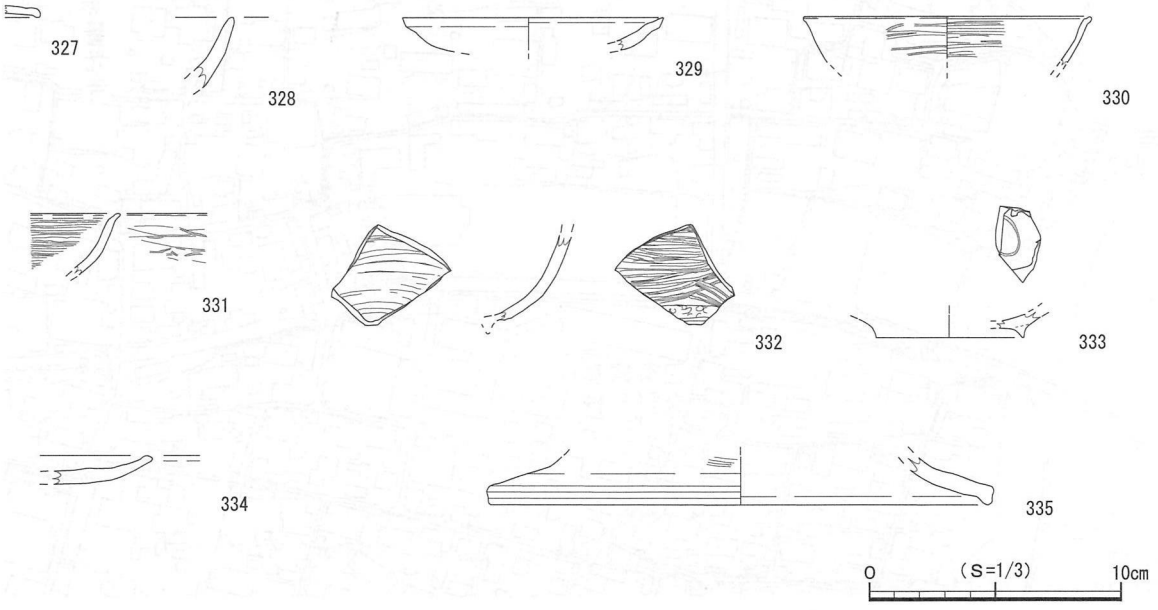
335 は傾斜して堆積する第 29 層で出土した弥生土器の端部片である。高坏の脚端部として推定復元したが、壺類などの口縁部である可能性もある。谷部周辺でも弥生時代の水田等の遺構が確認される可能性が考えられる。

古代後半から中世前半の間の遺物が混じる層から水平堆積が認められるようになっており、開析谷内の水田等の利用が始まった時期を示すものと考えられる。

（5）小結

以上のように、私部城域南の開析谷内部の堆積状況を確認した。調査範囲が限定されているものの、次の手がかりが得られた。

開析谷内の利用の経過については、中世前期までは、自然地形を残していたものと考えられるようになった。



第 313 図　2012 - 5 次　調査区出土遺物

中世前期の鎌倉時代頃に、平坦面を形成し、溝をめぐらすなどの整備がなされ、耕作地として利用されることとなった。以後は、近現代まで耕作地として利用されていたものとみられる。私部城が機能した戦国期頃についても特殊な遺構は確認されず、水田としての利用がなされていたものとみられる。

城に関わる明瞭な遺構は確認されなかったものの、この堆積状況が城の防備と密接に関係するものと考えられる。次項で、周辺の状況を勘案しながら評価することとしたい。

第２項　私部城南の調査成果

（１）私部城南の開析谷の現況

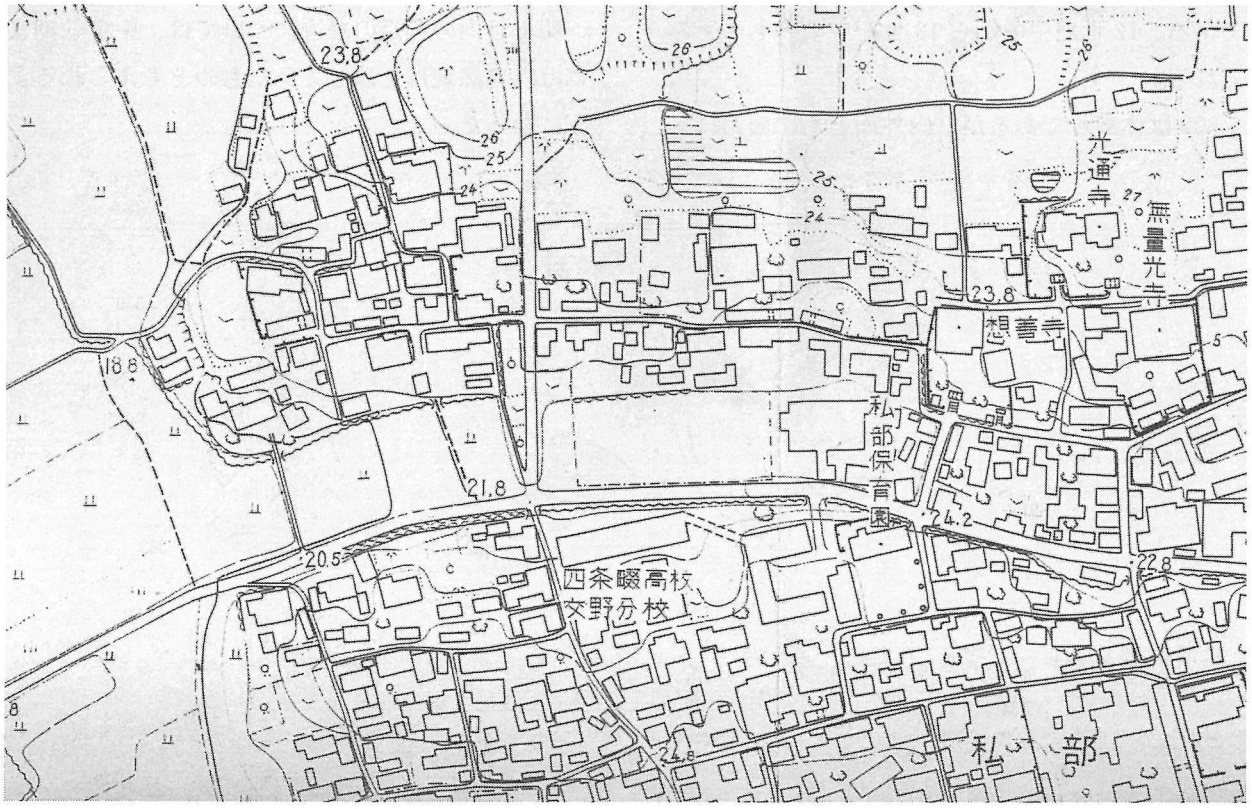
私部城南の開析谷の南北幅は約 50 ～ 80m である。その谷筋は現在の無量光寺南付近から始まり、西に 500m ほど延びて、「長砂」と字名がついた天野川の旧氾濫原につながる。

現況では市役所の建設と宅地化により不明瞭になっているが、昭和初期の測量図や（第 314 図）、航空写真（挿図写真２）では、私部城の立地する段丘との落差が明瞭に認められる。

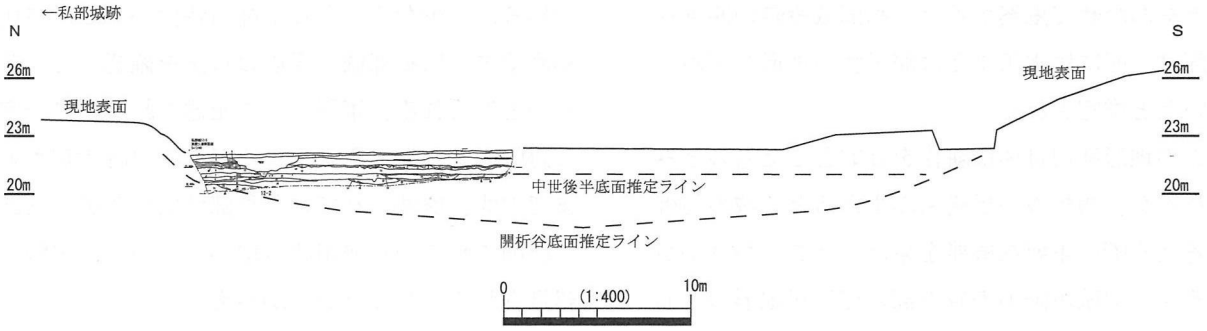
また、現況でも谷中央部を水路が通り、近年まで無量光寺南付近には池がいくつか存在していた。このように水路・池が集中する状況からは、2012 - ５次調査において確認された泥田状の地形が、開析谷内部一面に広がっていたものと考えられる。

（２）谷内部の道

開析谷内部の西側には、私部街道から派生する道が谷を横断して通る。また無量光寺の南には山根街道が谷を横断して北田家住宅方面までのびる。いずれも利用され始めた年代の詳細については不明である。ただし、状況証拠として、2012 -



第 314 図　私部城跡南の開析谷（昭和 36 年大阪府測量図　スケール 3000 分の１）



第 315 図　私部城南の開析谷　南北断面推定図

２次調査で山根街道の軸と一致する区画溝の年代が 14 世紀頃までに遡ることや、街道の周辺で南北朝期頃の遺物・遺構が確認されていることからは、これらの街道またはその原形となる道の年代も中世段階に位置づけられる可能性が高いものと考えられる。

私部街道から開析谷を越え、城側へ入った付近には、昭和 36 年の測量図より、果樹園として利用されていたことがわかる。その状況は旧交野小学校の風景写真で確認できるが、こんもりとした高台であったことがわかる（写真図版３写真 12)。また山根街道から城側に入った付近にも無量光寺やほかの寺院が立地する高台がある。こうした地形とあわせて、城域に入る道をおさえていたものと考えられる。

（３）私部城機能時の開析谷の状況

2012 - ５次調査では、谷内部の堆積状況が確認された。この結果では、堀などの明瞭な遺構は認められず、耕作に伴うような浅い溝が確認されたのみであった。近年までの周辺の地形状況と発掘

挿図写真２　私部城南の開析谷　昭和 23 年（1948）米軍航空写真（国土地理院）

成果をあわせて勘案すると、私部城段階の開析谷内部は一面には水田または泥田状の地形が広がっていたと推定される。

この地形利用自体は耕作を目的としたものとみられるが、開析谷の規模もふまえると、城の防御を考える際に重要な機能を果たしたことがうかがえる。私部城段階頃の谷内部の泥田状地形の上面の標高は今回確認されたもので、T.P.20.5m前後と推定される。すぐ北側の台地部縁辺との比高が２ｍほどは容易にある。私部城中心部との比高は最大で７ｍほどとなる。交野の平野部においてこの比高を生み出す泥田状の地形は、城を守る要害として機能したことは想像に難くない。

（３）『室町殿日記』の記載の「外堀」

ここまでみてきた城の南の開析谷の位置づけを探る時に、『室町殿日記』の記載を欠かすことができない（佐竹編1980、馬部氏より教示）。史実とは異なる記述も認められる史料であり、批判的にとらえる必要はあるものの、現状で最も戦国期に近い時期の城跡の状況と、当時の認識の一端を記した史料として貴重である。

この記述の中では、「後家が城」は、南を大手として矢倉と四、五十間の外堀により守りを固めたと記される。現況の開析谷の痕跡の最大幅が、現市役所付近で南北幅80mほどになることから、おおむね合致してくるものである。また、「深さはふんりやう水なんなんとして積もりかたし」とある。やや誇張をはらんでいるかもしれないが、深く、水をたたえていた様子はおおむね一致するものといられる。ただし、堀の深さを詳細に示す「底へは九間十間なと堀（ママ）せ候へはさためて水際までは六七間つつ候はん」との記述に関しては数値は一致しない。相当の誇張を含む部分があることも確認できる。

「後家が城」の名称が江戸期の枚方市域の文書に登場することなどもふまえると、『室町殿日記』の作者は、少なくとも安土桃山時代から江戸時代初め頃までに私部城と周辺の状況を確認しているものとみられる。軍記として記述される際に一定の誇張もしたものとみられるが、江戸時代初め頃までの間、廃城されていた私部城南の開析谷内部で展開されていた泥田状の地形について、堀跡と認識されていたことがうかがえる。

（４）まとめ

以上のように、発掘調査と現況の地形観察の結果、私部城域南の開析谷については、戦国期に平坦な泥田状の地形を呈しており、水田などの耕作を行っていたものと考えられる。

この水田面を形成する谷筋は、最大幅80m、長さ500mほどの規模が推定された。その北側に城が築かれた際には、自然地形を利用した要害として城の南側を防備する際に重要な機能を果たしたことは疑いがない。安土桃山時代末期から江戸時代初め頃に成立した軍記においては、城の南側の外堀と認識され、記述された。

ただし、私部城築城に伴い地形改変を行った痕跡は現況で乏しい。郭や堀をめぐらすために著しい地形改変を行った私部城中心域との差は大きい、既存の自然地形を水田耕作などに利用されていたものを、巧みに城の防備に活用したものと位置づけられる。

第18節　私部城跡発掘調査のまとめ

第1項　私部城以前の遺構の変遷

（1）私部城跡及び下層遺構の概要

各時代の遺構・遺物の分布状況と変遷の概要を述べた後に、各時期の様相を整理して述べる。また、発掘成果と第4章と第5章の成果との関連についても整理してまとめとしたい。

まず私部城域の遺構・遺物の概要をみておきたい。後に私部城が築城される台地上で活発に遺跡形成がなされるようになるのは、弥生時代中期頃のことである。ここでは、自然地形を利用し、集落域が形成されていた。

ただし、この集落域は弥生時代後期以後に続かず、古墳時代の遺構、遺物はほぼ認められない。

古代については、遺構は不明で、わずかながら奈良時代頃の瓦などの古代遺物が混入する。私部城域より南の私部南遺跡では古代の集落域が認められることから、これに付随する古代の遺構・遺物が今後増加する可能性も残る。

中世においては、私部城の盛土下層などから、おおむね鎌倉時代頃から南北朝期頃および室町時代頃の中世遺物・遺構が検出されている。これは、私部城築城以前から、中世私部の集落域による開発が進展していたことを示すものである。特に、私部城以前の中世遺物の多くは、私部城の中心域ではなく、やや離れた字市などで確認されていることが重要になる。第5章で文献史の成果から、私部城築城以前より活発に活動していた光通寺や、その支持勢力の存在について述べられるが、発掘地調査成果からは、その主体は私部城域の周辺の私部南部から東部に集中していた可能性が高い。こうして中世私部の集落域が展開していた台地の北西端に大きく地形改変を加えることによって私部城が築かれた。

次に各時代の遺構・遺物を整理する。

（2）自然地形と弥生時代の遺構

私部城跡の発掘調査では、多くの自然谷をはじめとした自然地形が確認された。私部城はこの自然地形を巧みに改変して築城され、周辺の谷地形を防御に利用していたことから、中世末にいたって私部城がいかにして築城されたのかを考える時に、極めて重要な点である。

また、この自然地形の台地上には、弥生時代中期頃の集落域が展開していた。

(a) 1966・1969年度地点

三郭の下層にあたる。谷地形に落ち込む弥生時代包含層が確認されていた。これは弥生時代の谷地形と考えられる。人為的に形成されたものではないと考えられるが、環濠に近い機能を果たしたものとみられる。

同堆積層中からは弥生時代の石庖丁等の磨製石器類のほか、弥生時代中期中頃の土器片が検出されていた。弥生時代の間に埋没したものとみられる。

(b) 1994－2次調査地点

現在の本郭中央を東西に分断する位置に自然の谷地形を確認した。この谷は、層序から私部城築城の直前まで存在した可能性が高いものである。

また、谷地形より東半の高台上で竪穴建物1基が検出されていた。出土遺物は少ないが、ピット中から打製石鏃片が検出されている。おおむね他の弥生時代竪穴建物と同じく弥生時代中期頃のものと位置付けられる。

(c) 2011－7次調査地点

本郭の西半に位置する。竪穴建物2基が検出された、そのうち竪穴建物2は一部を検出したのみで出土遺物も極めて少なく、おおむね弥生時代中

期頃と確認できるのみであった。

もう１基の竪穴建物１では、中心部の炉を検出したほか、覆土中から打製石器などの製作に用いられたとみられる敲石、磨製石器の製作に用いられた砥石など製作に関わる石器類が認められた。また磨製石器では石斧、打製石器では石鏃が検出されたほか、覆土中にサヌカイト剥片が少量ながら認められた。

(d) 2012 - ２次調査地点

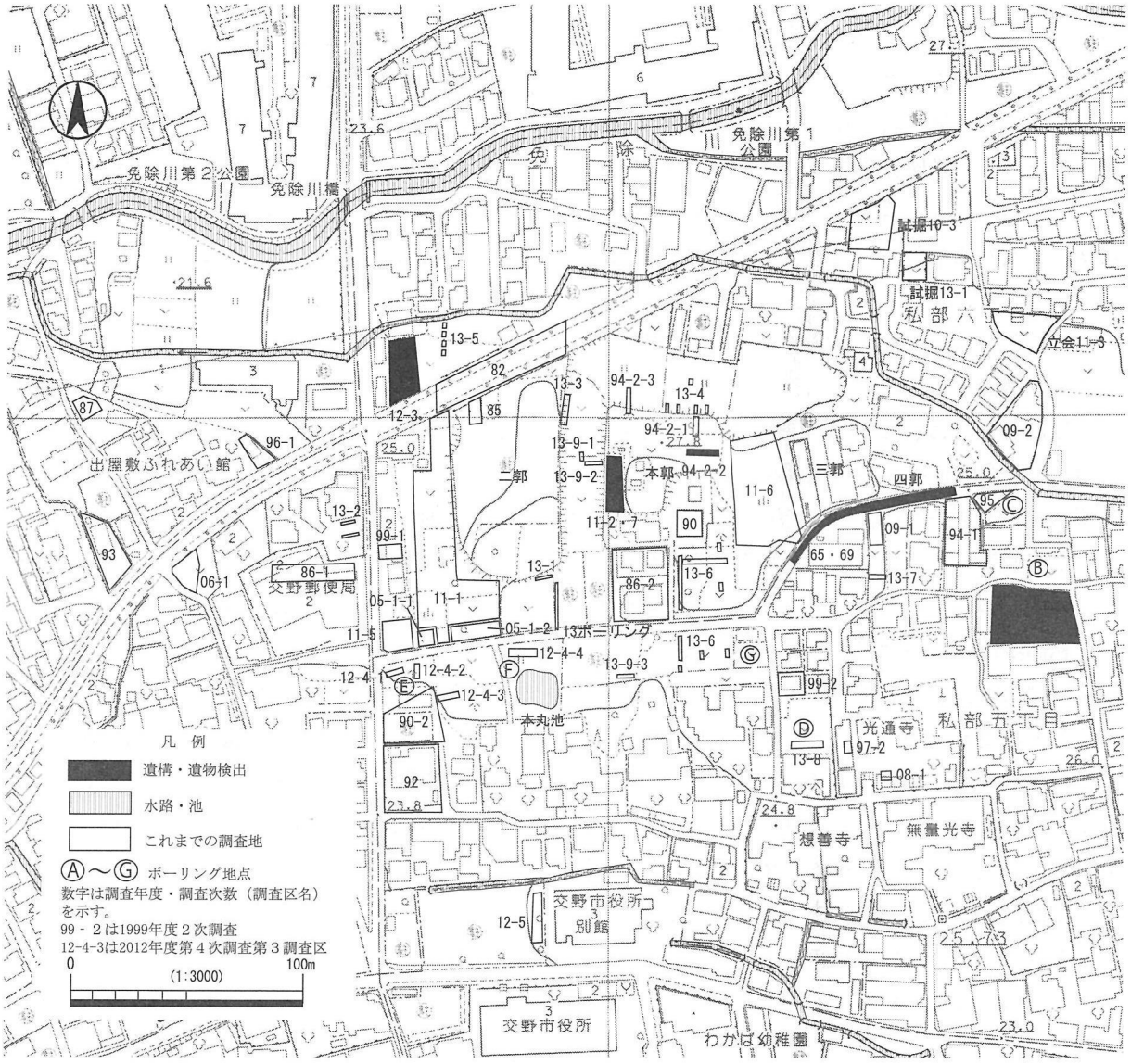
削平により形態が不明瞭になっていたが、竪穴建物の周溝とピット群を検出した。少なくとも３基分の竪穴建物に復元される。出土遺物は土器小片、サヌカイト剥片がわずかに含まれるのみであった。

(e) 2012 - ３次調査地点

二郭北西の郭上面で弥生時代の土器片等を含むピットがわずかながら検出されている。年代の詳細は不明ながらこの台地上も弥生時代に利用されてたことがわかる。

(f) 弥生時代遺構のまとめ

以上のように、私部城の下層では、多くの自然



第 316 図　私部城下層　弥生時代遺構・遺物分布図

谷が埋没していた。そしてその合間の高台上に竪穴建物が立ち並び集落域を形成していた。

枚方・交野台地上では台地上の谷を環濠の代替として利用していることが明らかにされている（荒木・西田 2000）。私部城下層の弥生時代集落もまたこれと同様の性格のものと考えられる。

なお、台地周辺には多くの自然谷ばかりでなく、低湿地帯も多く分布していた。こうした地形を利用して水田が営まれていた可能性は極めて高い。今後の調査の中で注意する必要がある。

その年代は弥生時代中期を中心にしたものである。相前後する時期に、弥生時代前期後葉の私部南遺跡の集落形成が開始しており、この後に続くものであった。当初交野の低地部に定着した人々が、台地上へと進出する現象は、北河内一円で認められていることであり、この私部城下層の弥生時代集落遺跡も同様のものと考えられる。なお、弥生時代後期については私部南遺跡で水田域や、流路に伴うしがらみ遺構は確認されているが集落域は確認されていない。

またその後の古墳時代においても私部城下層では遺構・遺物がほぼ認められない。森遺跡をはじめとして上私部遺跡や私部南遺跡が集落・生産域として利用されるようになるなかで、後に私部城として利用される段丘上は集落域として開発されることはなかったものと考えられる。

（3）古代の遺物

確実な古代の遺構は確認されていない。わずかに認められるのは、奈良時代頃の瓦である。1994 - 2次調査地点など本郭で認められる。

これらはいずれも平瓦また丸瓦片に限定されており軒丸・軒平瓦は確認されていない。また、中世遺物に混入するものである。周辺のものが転用されたものとみられる。確実な遺構に伴うものも認められておらず、現状では周辺の郡津長宝寺跡などの古代・中世寺院のものが持ち込まれたものと考えられる。ただ、今後の調査の中で未確認の古代寺院が私部集落内で確認される可能性は残る。

私部城の築城までの経過を考える時に重要なのは、私部南遺跡の古代集落域などに比べて極端に遺物・遺構が少ないことである。後に私部城が築かれる台地上は、古墳時代以後、古代にいたるまで、開発の対象となっていなかったことがわかる。

（4）私部城築城以前の中世遺跡

これまで私部城は南北朝期に築城された可能性も指摘されてきた。しかしながら、南北朝期頃の遺物・遺構として確実なものは郭の盛土下で検出されるものが大半である。南北朝期頃には現在に残るような城域は築かれていなかった。また、各調査地における堆積状況からは、後述の16世紀中頃から後半の築城にいたるまで、多くの自然谷が存在していたと判断できる。弥生時代の集落域として利用された後は長らく谷地形の入り混じる利用しにくい台地縁辺部として取り残されていたものとみられる。

顕著な遺構・遺物は次のようなものが確認された。

(a) 1994 - 2次調査地点

本郭整地土下層で検出されたピットと遺物が私部城期以前のものである可能性が高い。ただし、集落域としての様相は不明であるとともに、遺物出土量も少ない。

(b) 2005 - 1次調査地点

二郭の南と、本丸池西の郭（土塁状遺構）との間にあたり、溝と中世遺物が確認されている。調査面積に対して比較的多く集落域が存在した可能性が高い。また、わずかながら平瓦片も認められることが注目される。

(c) 2011 - １次調査地点

二郭の中ほどの盛土下層から丸瓦・青磁片などの遺物が溝中で検出された。この溝自体は盛土中から掘り込まれているとみられるとともに、刃先痕跡を残し不定形のものであったことから建物などに伴うようなものではないが、周辺に瓦などの遺物を伴うような遺構が存在したことをうかがわせる。

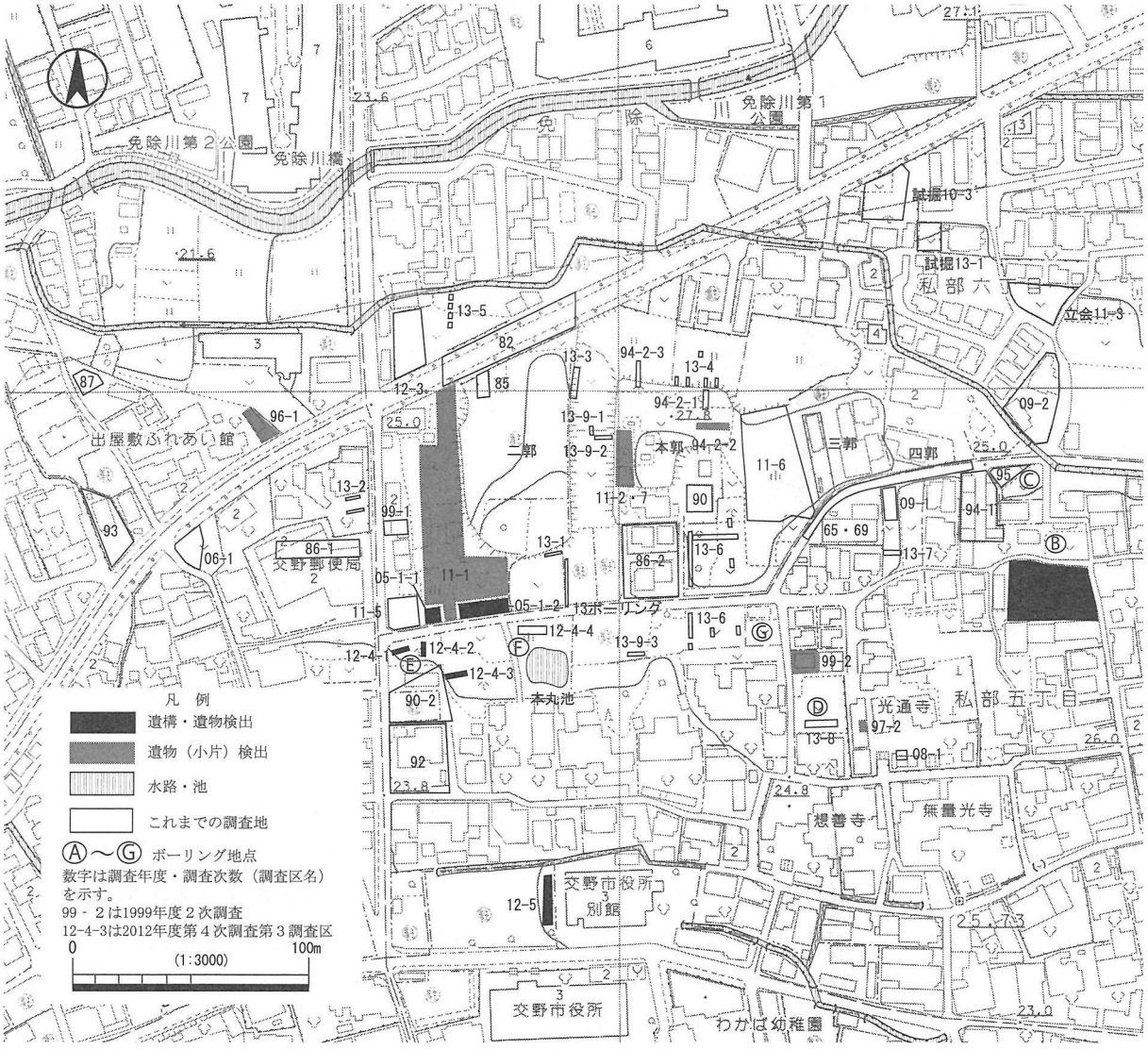
(d) 2011 - ７次調査地点

中世の瓦器椀片などが散布していた。私部城築城に伴い、本郭上の整地土中に混入したものとみられる。本郭周辺にわずかながら集落域が存在した可能性を示すものである。私部城築城に伴う整地土層下面で溝・ピットが検出されており、その一部が集落域の存在を示すものである可能性があるが様相は不明瞭である。

(e) 2012 - ２次調査地点

字市の中でももっとも標高の高い好立地に位置する。同地点では、古代末から中世初頭にはじまる集落域が確認された。

さらにこの集落域は、13 ～ 15 世紀頃の段階において、長さ 20 m以上の区画溝を伴うものとなっ



第 317 図　私部城築城以前　遺構・遺物分布図

ていた。この頃、平安時代頃まで続いた私部南遺跡の建物群が不明瞭になっており、これにかわり、前の私部集落の中心を担ったものと推定される。第5章で述べられる私部城以前の中世私部の勢力の存在を示す遺構群である。

中でも、瓦が比較的多く検出されていることが注目される。こうした区画溝等の遺構が寺院に密接に関連したものである可能性が高い。

(e) 2012 - 4次調査地点

本丸池西の郭盛土下層で溝やピットなどの遺構とともに、14～16世紀頃までの遺物・遺構が検出された。私部城築城以前の集落域が存在したことが確認された。

(f) 2012 - 5次調査地点

私部城域南の開析谷の水平の砂混じりシルト層中で瓦器椀片などが検出されている。その近くでは、浅い溝なども検出された。中世前半から水田などの耕作域であったとみられる。

(g) 中世段階の遺構・遺物のまとめ

以上のように、中世でも15世紀頃までの集落域は私部城の中心域までは明瞭にはおよんでおらず、依然として弥生時代以来の自然の谷地形が多く残存していた。

むしろ、中世前半から始まる集落形成は、私部城の周辺域において著しく進んでいた。字市の中心部である2012 - 2次調査地点をはじめとして、古道に近い地点を中心にしたものであった。さらに注意したいのは2012 - 2次調査の成果で明瞭なように、北北西から南南東にふれる方位軸をもとに集落域が形成されたとみられることである。これは現在の私部集落の大半で踏襲されている地割である。古道の方位軸もこれに沿うものである。

私部城の中心域に限定してみられる正方位軸の地割が、中世でも私部城の築城期のみに現れた特殊なものであることを示している。

(5) 小結

以上、私部城域では、弥生時代以降に遺跡形成が進んだが、その後は古代から中世にいたるまで、人為的な改変が及んだ痕跡は極めて少なかった。中世前半から始まる集落形成に関しても、私部城中心域においては古くからの地形を大きく改変するものではなく、検出される遺構・遺物の量も極めて少なかった。

これとは対照的に、私部城周辺の字市付近などでは、古代末から中世初頭に集落形成が進み、中世前半の間に区画溝を伴う遺構群が認められるようになっていた。また、区画溝の方位軸から、この段階に、現在の私部集落に引き継がれる町割の原型が形成されていたものと考えられるようになった。私部南半の私部南遺跡などの成果もふまえると、私部城築城までの私部集落の中心は、私部の東部の字市周辺や、私部南半に存在したことがうかがえる。

第2項　私部城期の遺構と遺物

(1) 私部城期の遺構と遺物の概要

従来から明瞭に遺存していた郭や土塁状遺構などの地上遺構に関しては、その構築方法や、細部構造、年代について手がかりが得られるようになった。これまでの40年近い調査の蓄積によって、現況の地形では確認しづらい地下遺構も多く残存していることが明らかになった。

私部城の中心域については多量の盛土と、切土を行いながら郭と堀群が形成されていた。また城の周辺に存在した自然地形を、巧みに城の防備に利用していることもうかがえる。

こうした堀や郭は、長期間利用されることによる多量の遺物の蓄積や、機能時堆積層の形成、あるいは改修の痕跡などが認められなかった。発掘の成果からは比較的短期間の間に集中的に機能し

た城の姿が明らかになりつつある。その年代は、廃絶時の出土遺物の年代からみて16世紀中頃から後半、その中でも後半よりの年代とみられる。出土遺物の様相などもふまえると、安見氏による築城期にあたる可能性がたかい。ただし、その年代の限定が難しい箇所もあることをふまえると、安見以前の鷹山氏段階に城郭の一部が形成されていた可能性も考えられる。

遺物などにより年代を限定することは難しい面も残すものの、私部城の中心部の遺構には、それ以前の中世私部で認められた北北東から南南西の方位軸ではなく、南北の正方位軸を取り入れた遺構が多く認められることに注目する必要がある。この正方位軸は、中世から近世の間に一時樹のみながら字市でも採用されている時期がある。これは私部城の築城に伴い城の中心部で採用された正方位の地割が、城周辺の旧集落におよんだことを示している可能性がある。

次に個別に城の各遺構の内容を整理する。

（２）郭・土塁

(a) 本郭と本郭南平坦面

築城以前は、自然谷地形などを残し、上面は起伏に富む形態を残していたものとみられる。これを盛土により埋没させた痕跡が認められた。この盛土と同時に、本郭北側斜面の切岸が形成されたものと推定される。

また、郭上面の地盤面上にも周囲に土塁基礎の高まりを残しつつ、複雑な形状の平坦面を形成していることから相当量の切土も実施しているものと推定できる。

本郭の平面形は、南北方向を軸とする正方形に近く、南東部と北西部に突出部を伴う。この突出部について、外桝形虎口として復元される案もある。周辺の防衛のために重要な部分であったことは確かであるが、ここに虎口が存在した痕跡は確認できていない。

また、今回の調査の中で、本郭南に地盤層から構成される平坦面が張り付くことが確認された。この平坦面上の調査成果からは、本郭の形成と同時期に形成された可能性が高いものである。この平坦面は、そのまま二郭・三郭にも連結するものであり、郭群をつなぐ通路の機能を備えるものと考えられる。また、その周囲にめぐらされた堀群とともに屈折を何地点かに伴う複雑な形状をとっていた。

本郭や、平坦面上面では軒丸・軒平瓦を含む瓦群が出土している。周辺で瓦を利用する建物が存在した可能性が高い。その構造等は現況では不明であるが、現在も石材が散布され、これまでの調査等でも石材が検出されてきたことから、礎石などを伴うものであった可能性もある。

(b) 二郭と周辺

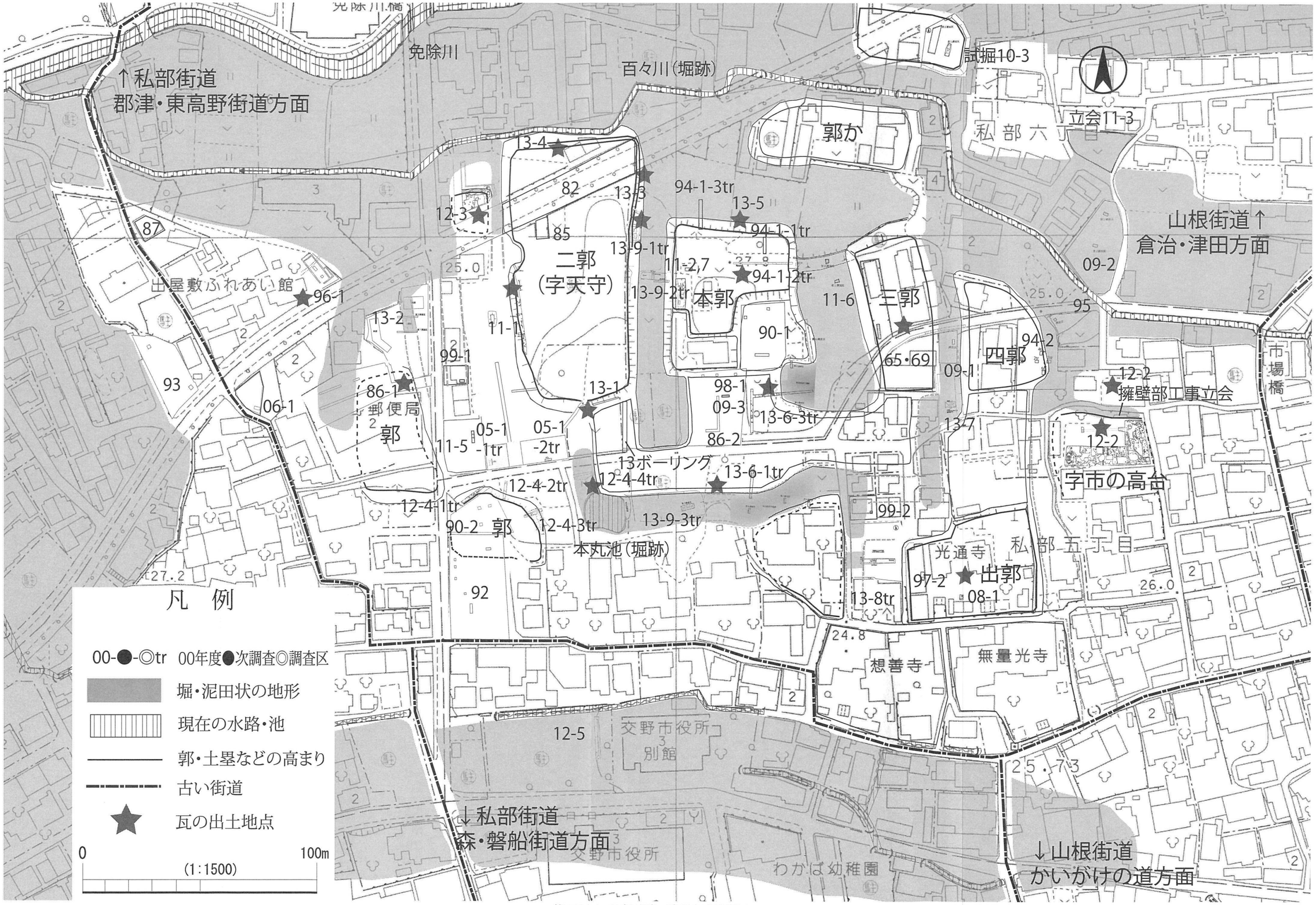
二郭付近の築城以前は、北半に東西方向にのびる自然谷が存在したことが確認された。この自然谷を盛土により埋没させるとともに、郭西斜面を切土して長方形の郭形態が形成された。その方位軸はおおむね南北方向をとるものである。

また、今回の調査の中で、二郭北西には南北方向の堀が存在し、この堀を隔てて郭が存在することが確認された。二郭北西の堀は二郭南半にまでは伸びないことから、二郭南西部には帯郭状に平坦面が張り付くことも確認された。

二郭上面の構造は不明な点が多いが、井戸や土坑・ピットなどがこれまでの調査で確認されており、施設の痕跡が良好に遺存するものとみられる。また、その周辺から瓦や土器類などが多く検出されてきた。郭上面の建物に瓦が伴っていた可能性が高い。

(c) 三郭

三郭付近では、弥生時代の谷部を埋める包含層が確認された。築城以前においても、自然地形の起伏を残す地点であったと推定される。築城時に、



第 318 図　私部城跡　遺構合成推定図

地盤面に少なくとも１ｍ以上の盛土を一定面積行い、現況の長方形の郭を形成したことが確認された。その西辺にはやや傾きが認められるが、東側斜面はほぼ南北方向にのびる形態をとる。

(d) 四郭

調査数は限定されているものの、同地点では盛土はほとんど行わず、地盤層をそのまま利用して郭として利用しているものとみられる。いびつな形態をとるのも、人為的改変が必要最低限に抑えられた結果とみられる。

(e) 出郭

現在の光通寺が立地する高台における調査では、現況の地形は１ｍ前後の盛土を行うことによって形成されたものであることが確認された。その形態は、南北方向を軸とする四角形である。その西側に帯郭または通路として機能する平坦面が張り付き、さらにその西側で堀跡が確認された。出郭上面では、多量の瓦が検出されている。周辺の寺院から転用されるなどして、郭上面の建物に転用されたとみられる。

(f) 本丸池西の郭（土塁状遺構）

現況では土塁状に残存する遺構であるが、昭和初期の航空写真や測量図から、郭として復元される。郭形成以前にも小規模な高台と集落域が存在しており、それを１～２ｍ前後の盛土によって埋没させて郭が形成された。その形は四郭と同様にややいびつな四角形である。上面の遺構としては、郭西縁にて、築地として復元される可能性のある南北方向の２条の溝が検出された。

(g) 郵便局付近の郭

昭和初期の写真・測量図より、郭が存在したことが確認された。現況ではその大半は削平されており、構築方法等は不明ながら、一部は二郭などに匹敵する標高のものであったとみられる。

（３）堀

(a) 本郭・二郭間の堀

現況の堀の形成以前から、自然谷が存在した痕跡を確認した。自然の谷地形に切土を加えることによって、現況の箱堀が形成された。現況で土橋状に残る東西方向の畦畔は、堀の機能時の底面の段差を反映したものである可能性が高い。少なくとも、堀の機能時に土橋が存在しなかったことを確認した。

(b) 本郭・三郭間の堀

堀の底面には低地帯の泥田状の堆積が広がっており、堀の形成以前から低地部が入り込む谷が存在した可能性が高い。本郭東側斜面に切土を行い、三郭西側斜面に盛土を行い堀が形成されたものとみられる。箱堀と推定復元される。おおむね南北方向に延びるが、本郭南東隅の突出部により屈曲して本郭南側に回り込み、複雑な形態をとる。

(c) 三郭・四郭間の堀

堀の形成以前の地形については不明瞭である。ただし、南北方向にまっすぐ延びる形態は不自然である。部分的に自然谷が存在した可能性は高いが、新規に掘削を行うことで設定されたものとみられる。同堀跡の廃絶時の堆積層からは、瓦・陶磁器類が出土し、その年代を16世紀後半頃に置くことが可能である。

(d) 二郭西の堀

二郭と二郭北西の郭の間に南北に入り込む堀跡を確認した。これは二郭南半まで延びるものではないことが確認されている。

(e) 郵便局付近の郭の堀

発掘調査によって、郵便局付近の郭東側で底面に高低差をもつ堀跡が検出されている。また郭西側には自然の谷地形を利用したものとみられる堀

状の地形が存在した。いずれも南北方向に延びるものである。

(f) 本丸池の堀と本郭南平坦面の堀

二郭の南から南へ延びた後、ほぼ直角に東へと屈曲する池が現在も確認できる。これまでも堀跡と推定されてきたが発掘により、箱堀と復元されるものと追認された。これがさらに東へ延び、本郭南平坦面の南に張り付く堀へ続くとみられる。本郭南平坦面の堀は、今回の発掘調査の結果、クランク状の屈曲を伴い東へと延びるものであることが確認された。

２つの堀跡は連続する可能性が高いものであるが、検出された堀底面の標高に高低差が認められた。このため、土橋や堀内障壁などの施設が伴う可能性が考えられる。

(g) 百々川の堀跡

現在コンクリート擁壁がなされており、発掘調査は行えていない。しかしながら、二郭北端などで確認された高低差や幅は、堀として十分機能しうるものであった。その年代などが今後の課題となる。

（４）関連する可能性のある遺構

2012 - ２次調査で確認された北方位をとる遺構は、層序や出土遺物から推定される年代からも私部城期に近いものであった。この正方位をとるのは同地点でこの一時的なものであり、近世以後現代まで西北西、南南東の方位が優位となる。これは、私部の集落中心域にまで、一時的に私部城の築城の影響が及んだものとみることができる。ただし、私部城の築城自体は客体的なものであったために、その廃城以後はその影響が廃れたものと考えられる。

（５）私部城跡の出土遺物

私部城期の遺物と確認できたのは、郭上面で検出された遺物群である。

(a) 瓦

これまでの私部城跡の調査で、もっとも多く検出されてきた。

分布と出土状況・年代　本郭上の 1994 - ２次調査２土坑で大量に出土した。出土状況からは郭上面で利用されたものが、廃城に伴い投棄されたものとみられる。出郭上の 1997 - ２次調査井戸出土資料も同様のものとみられる。他に軒平瓦・軒丸瓦が認められるのは二郭東斜面の 2013 - ３次調査と本郭南平坦面の 2013 - 6 次調査である。二郭周辺では限定的な発掘調査の中で本郭に次いで瓦が検出されており、今後も資料が増加することが予想される。また、本郭南平坦面周辺でも比較的多様な瓦が出土している。建物等における利用が想定されるのはこうした地点である。これらの地点における瓦群は、廃棄土坑や、堀の埋土など、城郭の廃城に伴う堆積土中に伴っていた。また、瓦自体の年代観も 16 世紀代の中でも中頃から後半ごろに位置づけられるものが認められた。このことからは、私部城の機能時には、本郭・二郭やその周辺を中心として、瓦を利用した施設が存在したものとみられる。

なお、私部城東の 2012 - ２次調査地点の中でも第１調査区の区画溝で検出された瓦群は私部城以前のものと考えられる。築城以前の光通寺などの寺院が周辺に存在することをうかがわせる。

このほかに、2012 - ２次擁壁部では多量の丸・平瓦が出土しており、暗渠などに転用された一群と推定される。この他の平・丸瓦のみで構成される出土地点についても建物以外へ転用された可能性が高い。建物に伴うものでないにしても、私部城域において豊富に瓦が利用されていたことを示す資料と評価できる。

なお、私部城全域でも、完形に復元できたものは数点であった。このことからは、再利用可能なものについては、周辺や他の城郭などで転用されたものと推測される。

瓦の特徴・製作技法と系譜　軒平瓦をはじめとした瓦の製作技法については、北河内のみならず、摂津方面や奈良方面などの技術系譜が認められた。こうした特徴のものが入り混じることからは、中世山岳寺院などの構築にともない、交野地域周辺で活動していた瓦工人も動員しつつ、摂津など他地域の工人も併せて瓦製作と供給が行われたものとみられる。なお、それはあくまで摂津・河内・奈良など、比較的近隣の地域内のものであり、広い目でみれば畿内地域在来の瓦製作の延長線上に生まれたものと位置づけられる。

(b) 土師器

極めて出土量は少なく、本郭上、５点ほど、そのほかには堀埋土中にわずかに含まれるのみであった。

(c) 瓦質土器

本郭上の1992－２次調査２土坑、二郭東側斜面の2013－３次調査などで一定量出土している。瓦質の深鉢、擂り鉢などである。出土量は少ないが、内容は大和盆地との共通性が高いものである。

(d) 陶磁器類

私部城期のものと確定できるものは極めて少ない。三郭・四郭間の堀の調査である2013－７次調査で検出された備前陶器大皿などがあるのみで

第５表　私部城跡瓦出土地点・重量一覧

城域における位置	調査次・調査区・採集地点	軒平瓦		軒丸瓦		平瓦		丸瓦		道具瓦		不明	
		点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
本郭上面	1994－２次第２調査区土坑１	3	1583.1	3	617.8	288	48881.9	60	11948.5	4	523.7	1	3.4
	1994－２次第２調査区ピット６									1	56.9		
	本郭採集					6	4009.6	2	3011.0	3	607.7		
本郭北斜面	1994－２次第３調査区					3	234.8					1	24.5
	2013－４次第１～第４調査区					22	2995.8	4	494.7	8	1402.9		
本郭・三郭間の堀	2013－６次第２調査区					3	835.4	1	161.1			1	4.8
	2013－６次第２調査区10溝			1	18.7	3	821.1	1	32.2	1	157.4	1	5.5
	2013－６次第２調査区37堀					10	484.3	5	752.8				
	2013－６次第５調査区					9	1346.0	1	62.5			2	38.7
本郭南平坦面・堀	2013－６次第１調査区１堀					2	134.2	1	53.9				
	2013－６次第１調査区							1	586.0				
	2013－６次第６調査区１堀					1	104.5					3	70.6
	2013－６次第７調査区１堀			1	69.7	8	692.7	2	93.7			1	4.9
	2013－６次第８調査区１堀	1	56.0			1	67.5						
本郭・二郭間の堀	2013－９次第１・２調査区					23	2935.0	3	295.0				
	2013－３次	1	256.3	1	67.7	25	4792.4	7	794.1				
	二郭東斜面採集									2	948.0		
二郭北～北西部	1982年					9	5737.8			1	1198.0		
	2012－３次					1							
	2013－５次					3	240.3	1	88.6			1	54.4
二郭南～南西部	2011－１次					1	521.0						
	2005－１次					1	245.4						
	2013－１次					2	398.9						
二郭南の堀（本丸池）	2012－４次第４調査区									1	807.0		
本丸池西の郭	2012－４次第１～第３調査区					9	1652.1	2	255.1			1	41.9
郵便局付近の郭	1986－１次					87	15928.8	4	168.7		1.0		4.3
三郭～四郭	1965～1969年度					1							
	三郭西側採集					3	539.4						
	2013－７次					3	226.7	5	2278.6				53.6
	四郭採集					4	642.0						
出郭（現・光通寺）	1997－２次	3	3161.5	3	1187.7	279	54131.2	113	34284.6	7	9908.0	5	186.7
	1999－２次								521.0				
	2013－８次					3	314.8						
私部城東（字市場）	2012－２次擁壁部					18	3433.2	12	11554.5			1	58.1
	2012－２次第１調査区	1	475.5			5	544.3	2	849.4			1	14.6
	2012－２次第１調査区10溝					5	844.2	2	1072.5			1	11.2
	2012－２次第２調査区					1	73.4					1	12.3
	2012－２次第３調査区					3	233.0						
合計		9	5532.4	9	1961.6	842	154041.7	229	69358.5	28	15610.6	21	589.5

ある。特に、本郭上面の調査においても出土がほぼ皆無であることが注目される。郭上面を徹底的に片づけたものか、郭上では利用されることが少なかったか、いずれかの可能性が考えられる。

(e) 鉄器類

ごくわずかであるが、2013 - ３次調査の郭斜面で検出された鉄片と 2011 - 1 次調査の二郭上面西端から検出された刀子の可能性のある鉄片がある。いずれも破片で投棄されたものと考えられるが、二郭において利用された可能性がある。

第３項　発掘調査成果のまとめ

（１）私部城の推定範囲

調査結果からは、字城を中心として郭、堀などの遺構が密集していることが改めて確認された。本郭から三郭を中心として、周囲にめぐらされた郭や堀を一連の城域として認めることができる。

その一方で、私部城の周辺には自然の谷地形や低地部が存在し、これも巧みに城の防衛に取り入れられている。これは明瞭な人為改変を伴うものではなかった。こうした地形については、城域とは区別する必要もある。私部城の明確な城域を推定するには、他の城郭との比較検討が必要になるが、現状で畿内地域の平地城郭の様相については不明な点が多い。周辺地域の悉皆調査を経たうえで、城域の詳細について再度検討する必要がある。

（２）私部城の年代・構造と特質

私部城以前の中世私部の集落については高級陶磁を出土する私部南遺跡や、2012 - ２次調査で確認された区画溝と遺構群など、私部南部から東部に中心があったと考えられる。私部城の中心部が築かれた私部集落の北端は、築城以前は自然谷も残り、中世の集落開発が必ずしも及んでいなかった地点と評価できる。

私部城は、16 世紀の中頃から後半の間のごく短期間に、この空閑地を活かして築かれ、機能した城郭である。見方によっては、中世私部集落の中心域に寄り添うように築かれた城とも評価できる。私部城が中世私部の中で客体的な存在であったことは、私部城中心部の南北方向の地割が、その後、私部集落の中で徹底されることがなかったことからもうかがえる。

私部城は交野台地の開析谷と台地を利用しつつも、多量の切土と盛土を駆使して正方位軸を意識した連郭式の平地城郭を築いたものである。発掘調査によって明らかになったことは、東西南北に極めて多くの堀を配置して郭群を防備していることである。

畿内地域における平地城郭の様相は不明瞭なものが多く、類例を求めることは難しい。その中でも本郭南に張り付く複雑な形態の平坦面については、大和の筒井城に類似する面がある。また郭周辺の堀の形態については河内の若江城と共通する可能性がある。３つの郭が連立する点は大和の今市城や伊勢の国府城との共通性が垣間見える。私部城の縄張り形態は、平地城郭として複雑な形態をみせるものの、いわゆる織豊城郭からの影響を認めるほどには至っていない。これは、石垣が現状で認められないことからも判断できる。河内や大和など、畿内地域の平地城郭の延長線上に築かれた縄張りと現状では評価される。

また、私部城は第４章で明らかにされるように、織豊城郭に先行して瓦を利用しているという点で、畿内地域の先進性を示す平地城郭である。瓦の内容のみならず、城主となった安見氏の立ち位置もふまえると、織豊城郭の成立期に重要な影響を与えたことがうかがえる。さらに、第５章で明らかにされるように、戦国期の畿内における争乱の中で重要な役割を果たした城郭であった。私部城は政治・文化の中心地であった畿内において醸成された平地城郭の到達点の一つと評価できる。

参考文献（第１～３章）編著者名五十音順・年代順

足利健亮 1985『日本古代地理研究』、大明堂
芦田淳一 1998「総持寺出土の中世瓦 - 瓦当接合技法を中心に - 」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』、帝塚山大学考古学研究所
網伸也 2006「上私部遺跡と渡来人の動向」『古墳時代に生きた渡来人の軌跡　要旨集』、（財）大阪府文化財センター
後川恵太郎編 2007『私部南遺跡Ⅰ』センター調査報告第 154 集、財団法人大阪府文化財センター
石部正志 1989「考古学からみた奈良街道」『歴史の道調査報告書第４集　奈良街道』、大阪府教育委員会
伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992『有岡城・伊丹郷町Ⅱ』
伊藤晃 1995「備前」『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
岩崎誠編 1991『勝龍寺城発掘調査報告』長岡京市埋蔵文化財調査報告書第６集、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
植木久・鈴木秀典・中川信作・宮本佐知子・八木久栄 1988『大坂城跡Ⅲ』、財団法人大阪市文化財協会
上田修編 1995『光通寺』交野市史研究紀要第６輯、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
上田修編 2003『想善寺』交野市史研究紀要第 15 輯、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
上田修編 2010『無量光寺』交野市史研究紀要第 23 輯、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
内田大輔編 2005『交野市の石造文化財Ⅰ - 私市・私部・神宮寺・倉治地区編 - 』交野市石造文化財調査報告書Ⅰ、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
内田大輔編 2006『交野市の石造文化財Ⅱ - 郡津・森・寺・傍示・星田地区 - 』交野市石造文化財調査報告書Ⅱ、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
近江俊秀 1994「大和瓦質摺鉢考」『研究紀要第二集』、財団法人由良大和古代文化研究会

大阪城天守閣編 1997『秀吉と桃山文化ー大阪城天守閣名品展ー』
大阪府住宅供給公社・㈶枚方市文化財研究調査会 1992『津田城遺跡発掘調査概要報告』
小川暢子 1995『私部城跡 - 発掘調査概要報告書１ - 』、交野市教育委員会
小川暢子 1999『平成 10 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』交野市文化財調査報告 1998 - Ⅱ、交野市教育委員会
奥野和夫・山口博志 1989『昭和 63 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
奥野和夫 1990『1989 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
奥野和夫・小川暢子 2003『平成 14 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
奥野和夫・小川暢子 2005『平成 16 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
奥野和夫・真鍋成史 2000『平成 11 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
奥野和夫・真鍋成史編 2001『森遺跡Ⅷ』交野市埋蔵文化財調査報告 2000 - Ⅶ、交野市教育委員会
奥野和夫・真鍋成史 2004『平成 15 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
奥野平次・鵜飼満男 1976『郡津郡衙遺跡範囲確認・調査概要』交野市文化財調査概要 1975 - 2、交野市教育委員会
奥野平次・鵜飼満男 1977『郡津郡衙遺跡範囲確認・調査概要』交野市文化財調査概要 1977 - 3、交野市教育委員会
奥野平次 1981「第５章　伝説」『交野市史民俗編』、交野市史民俗編
尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
景守紀子・中光司・米田昭一 1986『交野市史自然編Ⅰ』、交野市
交野考古学研究会 1955『石鏃第１号』
交野考古学会 1956『石鏃第５号　開元寺跡発掘報告』
交野古文化同好会 1982『石族 50 号』
交野町教育委員会 1970『私部「城」弥生遺跡調査書』
交野市教育委員会 1991『平成２年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』交野市文化財調査概要 1991 - 3

交野市教育委員会 1993『平成４年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 1995『私部城跡 - 発掘調査概要報告書１ - 』
交野市教育委員会 1998『平成９年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 2000『平成 11 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 2006『平成 17 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 2010『平成 21 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 2014『平成 25 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市文化財事業団 2004「交野市内の刻印瓦について」『交野市文化財だより』第 13 号
交野市文化財事業団 2012『交野市の瓦』
片山長三編 1970『交野町史増補改訂一・二』、交野町
片山長三 1981『交野市史　交野町略史　復刻編』、交野市（1963 初版、1970 増補改訂）
元興寺文化財研究所 1982『中・近世瓦の研究 - 元興寺篇 - 』
木下密運・上田修 2008『廃小松寺』交野市史研究紀要第 21 輯、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩 1992『法隆寺の至寶　瓦』、小学館
小島博子 1998「山根街道」『地域文化誌まんだ』第 63 号、まんだ編集部
小島道裕 1993「歴史地理的な方法による調査」『城館調査ハンドブック』、新人物往来社
小谷利明 2013「天下再興の戦いと私部城　発表レジュメ」、交野市文化財事業団
小林章男 1991『続鬼瓦』、共同精版印刷
才原金弘編 1988『若江遺跡第 27 次発掘調査』、（財）東大阪市文化財協会
佐川正敏 1989「中世・近世の丸瓦」『伊珂留我』法隆寺資材帳調査概報 10、法隆寺昭和資材帳編纂所
佐竹昭広編 1980『室町殿日記 下 京都大学蔵』、京都大学国語国文資料叢書一七
佐藤亜聖 1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究XI』、日本中世土器研究会
佐藤良二・絹川一徳 2010「近畿地方」『講座日本の考古学Ⅰ　旧石器時代（上）』、青木書店
篠原豊一 1984「多聞城跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和 58 年度、奈良市教育委員会
清水亜弥 2014『戦国　大阪の城―動乱の時代と天下統一―　図録　大阪のお城がわかる本』、高槻市立しろあと歴史館
鋤柄俊夫 1995 「各地の瓦質土器」『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
菅原正明 1983「畿内における中世土器の生産と流通」『古文化論叢』、古代を考える会・藤澤一夫先生古希記念論集刊行会
千田嘉博 2006「奈良県高山城の構造」『文化財学報 23・24 集』、奈良大学文学部文化財学科
武内雅人 2001「丸瓦製作技術からみた近世瓦の生産と流通」『ヒストリア』第 173 号、大阪歴史学会
立石堅志 1995「瓦質土器（奈良火鉢）」『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
田中幸夫 1995「播磨を通過した四天王寺系瓦工人」『織豊城郭』第２号、織豊期城郭研究会
田中幸夫 2004『播磨の中世瓦』
棚橋利光 1989「二、河内中北部の街道（東西道）　三、街道の現状」『歴史の道調査報告書第４集　奈良街道』、大阪府教育委員会
千喜良淳 2002「中・南河内における土師器皿の変遷」『瓜生堂遺跡第 46、47 - 1・2 次発掘調査報告書』、東大阪市教育委員会
千葉徳爾 1973『はげ山の文化』、学生社
土山公仁 1990「信長系城郭における瓦の採用についての予察―同笵あるいは同型瓦を中心にして―」『研究紀要４』、岐阜市歴史博物館
中光司 1981「第六章　地名」『交野市史民俗編』、交野市
中井公 1979『多聞廃城趾発掘調査報告』、奈良市教育委員会
中井均 1981「交野城」「津田城」「田原城」『日本城郭大系 12 大阪・兵庫』、人物往来社
中井均 1982「交野城跡と北河内の城跡」『地域文化誌まんだ』第 16 号、まんだ編集部
中井均 2011「私部城の歴史と構造」『シンポジウム「私部城」資料集』、交野市文化財事業団
中井均 2013「付録解説　烏帽子形城跡の縄張り図」『大阪春秋』No. 149、新風書房

中西裕樹 2004「私部城」『図説近畿中世城郭事典』、城郭談話会
中西裕樹 2013「田原城とその周辺」『城からみた戦国時代の田原　資料』市民講座「桃源郷田原」、田原の明日を拓く会・摂河泉地域文化研究所
難波洋三 1992「第６節　徳川大坂城期の炮烙」『難波宮趾の研究第九』、財団法人大阪市文化財協会
西田敏秀 1998「河内国交野郡素描 - 奈良時代～平安時代前期の遺跡群を中心として - 」『網干善教先生古希記念考古学論集』
西田敏秀・荒木幸治 2000「淀川左岸地域における弥生集落の動向」『みずほ』第 32 号、大和弥生文化の会
乗岡実 2001「備前焼大甕編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究Ⅸ』、関西近世考古学研究会
馬部隆弘 2004a「城郭由緒の形成と山論―「津田城主津田氏」の虚像と北河内戦国史の実態―」『城館史料学』、城館史料学会
馬部隆弘 2004b「津田城―付、本丸山城」「犬田城」『図説近畿中世城郭事典』、城郭談話会
馬部隆弘 2005「偽文書からみる畿内国境地域史 -「偽文書」の分析を通して - 」『史敏』２号、史敏刊行会
馬部隆弘 2009「牧・交野一揆の解体と織田政権」『史敏』二〇〇九春号（通巻六号）、史敏刊行会
濱田延充 2001「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」『市史紀要第８号』、寝屋川市教育委員会
平尾兵吾 1972『北河内史蹟史話』（1931 年初版）
㈶枚方市文化財研究調査会 1988『図録・枚方の遺跡』
福岡憲編 1988『重要文化財北田家住宅　主屋・表門・乾蔵・北蔵・土塀（含裏門）・撥木納屋　修理工事報告書』、（財）文化財建造物保存技術協会
福永信雄編 1993『若江遺跡第 38 次発掘調査報告』、財団法人東大阪市文化財協会
藤原学 2002『達磨窯の研究』、学生社
舩築紀子・熊谷博志・吉田綾子・三好孝一 2011『私部南遺跡Ⅱ』、（財）大阪府文化財センター
振角卓哉 2006「仁正寺藩誕生　レジュメ」、日野町教育委員会
（財）文化財建造物保存技術協会編 1988『重要文化財北田家住宅修理工事報告書』、明新印刷株式会社

真鍋成史編 1993『新宮山遺跡』交野市埋蔵文化財調査報告 1992 - Ⅱ、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
真鍋成史 1997a『平成８年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
真鍋成史 1997b「河内国・守部氏に関する基礎的考察 - 古墳時代鍛冶遺跡の実態解明に向けて - 」『河内古文化研究論集』
真鍋成史 2003「交野市内の刻印瓦について」『関西近世考古学研究Ⅺ』、関西考古学研究
真鍋成史編 2004『須弥寺遺跡』交野市埋蔵文化財調査報告 2003 - Ⅱ、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
水野正好 1992『交野市史　考古編』、交野市教育委員会
水野正好 2009「北河内に息づいた人々」『―北河内の古墳―前・中期古墳を中心に』、（財）交野市文化財事業団
三宅俊隆 1986「第六節五　津田城遺跡」『枚方市史第 12 巻』、枚方市史編纂委員会
三好孝一ほか 2011『私部南遺跡Ⅲ・有池遺跡・上私部遺跡・上の山遺跡』、（財）大阪府文化財センター
村田修三 1980「北田原城」「高山城」『日本城郭大系 10 三重・奈良・和歌山』、新人物往来社
森田克行 1984『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書第 14 冊、高槻市教育委員会
矢倉嘉人編 2005『上の山遺跡Ⅰ』、（財）大阪府文化財センター
山川均　1996「城郭瓦の創製とその展開に関する覚書」『織豊城郭』第３号、織豊期城郭研究会
山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第 59 冊
山崎信二 2003「近世瓦の技法と編年」『関西近世考古学研究Ⅺ』、関西考古学研究
山崎信二 2008『近世瓦の研究』、同成社
若林幸子編 2007『有池遺跡Ⅰ』センター調査報告第 152 集、財団法人大阪府文化財センター
若林幸子・黒須亜希子 2009『上私部遺跡Ⅲ』、（財）大阪府文化財センター
若林幸子 2010「開発拠点としての集落―上私部遺跡の発掘調査成果を中心に―」『発掘！発見！緑立つ道　ヤマト政権の生産基盤を掘る！　講演記録集』交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団

第６表　遺物観察表１

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
1994-2	1	第２調査区 土坑１	－	瓦	軒平瓦	やや密 2.5～３㎜大の礫少量含む	堅緻	凹面:7.5Y5/1灰色 凸面:7.5Y5/1灰色 瓦当面:7.5Y5/1灰色 器肉:5Y7/1灰白色	－	2.0	－	瓦当面と平瓦部1/2	唐草文 平瓦部は凹凸面横方向のナデ、瓦当外縁上端面面取り 瓦当面と平瓦の接着は接合法C
	2	第２調査区 土坑１	２層	瓦	軒平瓦	やや密 微細な砂礫多く含む ２～３㎜大の礫含む	堅緻	瓦当面:N4/灰色 瓦当裏面:N4/灰色 器肉:N7/灰白色	－	－	－	瓦当面の一部	唐草文の一部が残る
	3	第２調査区 土坑１	－	瓦	軒平瓦	やや粗 １㎜以下の砂粒(雲母・長石など)多く含む ３㎜大の礫(長石)少量含む	やや軟	凹面:N6/灰色 凸面:N4/灰色 瓦当面:7.5Y5/1灰色 器肉:2.5Y8/2灰白色	－	3.0	－	瓦当面と平瓦部の一部	唐草文 瓦当裏面はナデ、くびれ部分は工具による強いナデ 瓦当外縁上端面面取り
	4	欠番											
	5	第２調査区 土坑１	－	瓦	軒丸瓦	やや粗 ３㎜大の礫(長石か)含む １㎜以下の砂粒(雲母など)含む	堅緻	瓦当面:N4/灰色 瓦当裏:N5/灰色 器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	－	外区幅1.9	－	瓦当面2/3	巴文(尾が連結) 外区内縁に連珠 ナデ調整 瓦当面と丸瓦部の接着は瓦当側にキザミ目を確認
	6	第２調査区 土坑１	－	瓦	軒丸瓦	密 １㎜以下の砂粒(雲母他)多く含む	堅緻	凸面:2.5Y8/3浅黄色 凹面:5Y7/3浅黄色 器肉:10Y8/1灰白色	－	丸瓦部2.2	－	丸瓦部の一部	接合法Dの可能性あり 丸瓦部凹面は横方向のナデ、糸切り痕
	7	第２調査区 土坑１	－	瓦	軒丸瓦	密 １㎜以下の砂粒含む	堅緻	瓦当面:5Y5/1灰色 瓦当裏:5Y5/1灰色 器肉:2.5Y7/3浅黄色	－	外区幅2.3	－	瓦当の一部	巴文 外区内縁に連珠
	8	第２調査区 土坑１	２層	瓦	平瓦	密	堅緻	凹面: 10Y3/1オリーブ黒色 凸面:10Y4/1灰色 器肉:10Y6/1灰色	23.8	2.1	30.0	3/4	凹面横方向のナデ 凸面縦方向のナデ
	9	第２調査区 土坑１	－	瓦	平瓦	密	やや軟	凹凸面・器肉: 10Y6/1灰色	23.5	2.0	30.1	2/3	凹面横方向のナデ 凸面縦方向のナデ
	10	第２調査区 土坑１	－	瓦	平瓦	やや密 2.5㎜大の砂粒(花崗岩?)含む １㎜以下の砂粒(雲母他)多く含む	堅緻	凹凸面・器肉: 2.5Y7/2浅黄色	25.0	2.2	－	広端部2/3	凹面横方向のナデ、バリ跡 凸面縦方向のナデ、ハナレ砂
	11	第２調査区 土坑１	－	瓦	丸瓦	やや密 １㎜以下の砂粒(花崗岩など)含む	堅緻	凸面:5Y6/1灰色 一部5Y7/1灰白色 凹面:N6/～5/灰色 器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	－	2.3	－	玉縁側の一部	凹面吊り紐 玉縁部との境に工具痕
	12	第２調査区 土坑１	－	瓦	丸瓦	やや密 砂礫含む	堅緻	凸面:N4/灰色 凹面:N4/灰色 器肉:10Y5/1灰色	12.6	2.1	－	玉縁側の一部	凸面縦方向のナデ 凹面縦方向のナデ、粗い布目痕
	13	第２調査区 土坑１	２層	瓦	丸瓦	やや粗 ２㎜以下の砂粒少量含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色	－	2.6	－	玉縁側の一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、コビキ痕
	14	第２調査区 土坑１	－	瓦	丸瓦	密 １㎜以下の砂粒(雲母他)少量含む	堅緻	凸面:N7/1灰白色 凹面:N5/1灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色	－	2.1	－	玉縁側の一部	凸面縦方向のナデ 凹面吊り紐、布目痕
	15	第２調査区 土坑１	灰色土	瓦	丸瓦	やや密 全体に細粒(雲母か)含む	堅緻	凸面:7.5Y5/1灰色 7.5YR5/8明褐色 凹面:5B4/1暗青灰色 2.5YR4/8赤褐色 器肉:7.5Y5/1灰色 7.5YR5/8明褐色	－	2.2	－	体部の一部	凹面吊り紐、布目痕、糸切り痕
	16	第２調査区 土坑１	３層	瓦	丸瓦	精緻 ２㎜以下の砂粒少量含む	堅緻	凹凸面・器肉:N5/灰色	(10.8)	2.0	－	広端側の一部	凸面縦方向のナデ、圧痕 凹面布目、後糸切り後紐痕
	17	第２調査区 土坑１	－	瓦	丸瓦	密 １㎜以下の砂粒含む	堅緻	凹凸面: 5Y8/2灰白色 器肉:灰白色	－	1.7	－	体部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目、コビキ痕
	18	第２調査区 土坑１	－	瓦	丸瓦	やや粗 ３㎜以下の礫、１㎜以下の黒雲母多く含む	堅緻	凸面:10Y5/1灰色 凹面:N5/灰色 器肉:7.5Y6/1灰色	－	2.7	－	体部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、微かに紐痕
	19	第２調査区 土坑１	－	瓦	面戸瓦	やや粗 １㎜以下の多く含む	堅緻	凹面:N5/灰～N4/灰色 凸面:N5/灰色 器肉: 7.5YR7/4にぶい橙色	－	1.9	－	体部の一部	凹面吊り紐らしき痕、工具痕 凸面剥落著しく調整不明瞭
	20	第２調査区 土坑１	－	瓦	丸瓦	やや密 １㎜以下の砂粒含む 微細な雲母を含む	堅緻	凸面:5YR6/6橙色 7.5YR5/1灰色 2.5Y7/2灰黄色 凹面: 10Y3/1オリーブ黒色 器肉:5Y8/1灰白色	16.5	1.9	－	玉縁側	凸面横ナデ及び斜方向のナデ 凹面全面に明確な布目痕、粗いコビキ痕、指圧痕の確認

第７表　遺物観察表２

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
1994－2	21	第２調査区 土坑１	２層	瓦	不明	密 0.5～２㎜大の砂粒含む 微細な雲母含む	堅緻	凹面:2.5Y8/1灰白色 凸面:2.5Y8/1灰白色 器肉:2.5Y8/1灰色	－	3.0	－	体部の 一部	凹面布目痕 凸面格子目叩き痕
	22	第２調査区 土坑１	３層	瓦	平瓦	やや密 部分的に1.5㎜大の礫を含む	堅緻	凹面:2.5Y7/2灰黄色 凸面:10YR5/1灰色 器肉:10YR5/1灰色	－	2.0		体部の 一部	凹面コビキ痕 凸面格子目叩き痕
	23	第２調査区 土坑１	３層	瓦	道具瓦	やや粗 ２～４㎜大の白色、黒色礫含む ４㎜大の礫含む 黒色、白色砂粒多く含む	やや 不良	凹面:5Y6/1灰色 凸面: 5Y6/2灰オリーブ色 器肉:5Y7/1灰白色 (中心部5YR6/6橙色)	－	2.3	－	体部の 一部	凹面ケズリ 凸面縄目タタキ
	24	第２調査区 土坑１	－	瓦	平瓦	やや粗 ２㎜以下の砂粒含む ３～５㎜大の礫(長石か)含む	堅緻	凹面:5Y7/1灰白色 凸面:10Y5/1灰色 器肉:5Y7/1灰白色	－	2.3	－	側面部～ 体部の 一部	凹面ケズリ 凸面格子目叩き
	25	第２調査区 土坑１	４層	瓦	平瓦	密 １㎜以下の砂粒含む	堅緻	凹面:10Y5/1灰色 凸面: 5GY4/1暗オリーブ灰色 器肉:5Y7/1灰白色	－	1.9	－	体部の 一部	凹面ケズリ 凸面縄目タタキ
	26	第２調査区 土坑１	－	瓦	平瓦	密 0.5㎜以下の砂粒、微細な雲母含む	堅緻	凹面:10Y5/1灰色 凸面:10Y4/1灰色 器肉:5Y7/1灰白色	－	2.1	－	狭端部の 一部	凹面ケズリ 凸面縄目タタキ
	27	第２調査区 土坑１	－	土師器	皿	密 １～２㎜大の黒色砂粒を含む 雲母含む	良好	内面: 10YR7/4にぶい橙黄色 10YR8/3浅黄橙色 外面: 7.5YR7/3にぶい橙色 器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	口径 (8.0) 底径 (2.4)	0.4	2.1	1/6	内外面横ナデ 摩耗顕著
	28	第２調査区 土坑１	－	土師器	皿	密 １～２㎜大の黒色砂粒含む ３㎜大の赤褐色礫含む 雲母多く含む	良好	内面:7.5YR6/6橙色 5YR4/6赤褐色 外面: 7.5YR7/4にぶい橙色 器肉: 7.5RY7/4にぶい橙色	(10.6)	0.5	1.3	1/5	内外面横ナデ 摩耗顕著
	29	第２調査区 土坑１	－	土師器	皿	やや密 １～２㎜大の黒色・白色砂粒含む 雲母含む	良好	内面: 7.5YR7/4にぶい橙色 5YR6/6橙色 外面:5YR6/6橙色 器肉: 7.5YR7/4にぶい橙色	口径 (8.4) 底径 (3.6)	0.3	1.5	1/4	内外面横ナデ 摩耗顕著
	30	第２調査区 土坑１	－	土師器	皿	密 １㎜大の赤褐色砂粒含む 雲母多く含む	良好	内・外面・器肉: 7.5YR7/4にぶい橙色	口径 (9.6) 底径 (6.0)	0.4	1.5	1/5	内外面横ナデ 摩耗顕著
	31	第２調査区 土坑１	－	銅製品	銭貨	－	－	－	外径 2.5	0.11	－	完形	天聖元宝
	32	第２調査区 土坑１	－	土師器	皿	密 黒雲母含む	良好	内・外面・器肉: 7.5Y7/4にぶい橙色	(12.6)	0.4	－	口縁部 1/10	口縁部内面強い横ナデ 内外面横ナデ 摩耗顕著
	33	第２調査区 土坑１	２層	ガラス 製品	ガラス玉	－	－	－	径2.0	－	－	－	球体 柄の様なものが付く可能性あり 用途不明
	34	第２調査区 土坑１	２層	瓦器	盤	密 黒色砂粒・雲母多く含む ２～３㎜大の黒色礫(角閃石か)含む	堅緻	内面: 5GY3/1暗オリーブ灰色 外面: 5GY5/1オリーブ灰色 器肉:2.5Y7/2灰黄色	(40.0)	1.1	(9.0)	口縁部・ 底部1/10	全体的に回転ナデ 外面口縁部に突帯(指圧痕) 下半櫛描き波状文
	35	第２調査区 ピット６	－	瓦	道具瓦か	密 0.5㎜以下の砂粒含む ２～３㎜大の礫含む	堅緻	凹面:N5/灰色 凸面:N4/灰色 器肉:N6/灰色	－	1.9	－	体部の 一部	凹凸面ナデ
	36	第２調査区 ピット６	－	瓦器	擂鉢	やや密	やや 軟	内面:5Y7/1灰白色 外面:7.5Y5/1灰色 器肉:10YR8/4浅黄橙色	－	－	－	底部 1/9	内外面ナデ 内面の摺り目2.5cmに9本を確認
	37	第１調査区	２層	瓦器	三足花瓶	密 黒色砂粒、雲母含む	堅緻	内面: 10YR7/3にぶい黄橙色 外面: 10YR7/3にぶい黄橙色 N4/灰色 器肉:N2/黒色～ 10YR7/3にぶい黄橙色	底径 (5.6)	0.6	残存高 3.5	底部の 一部	内面回転横ナデ 外面縦方向のケズリ後ナデ 脚貼り付け後周りをナデ

第８表　遺物観察表３

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2011-7	38	調査区北端	整地土層	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:N3/暗灰色 器肉:10Y7/1灰白色	-	0.4	-	口縁部小片	外面横ナデ 内面回転ナデ 口縁部が内湾する
	39	調査区北端	整地土層	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:N4/灰色 器肉:10Y7/1灰白色	-	0.4	-	口縁部小片	内外面ともに回転ナデ 口縁端部がわずかに外反する
	40	調査区北端	整地土層	瓦器	椀	密	やや軟	内・外面:N5/灰色 器肉:10Y7/1灰白色	-	0.4	-	口縁部小片	内面・口縁端部回転ナデ 外面横ナデ
	41	調査区北端	整地土層	瓦器	椀	やや密 1㎜以下の砂粒多く含む	やや軟	内・外面:10Y6/1灰色 器肉:7.5Y8/1灰白色	-	0.4	-	口縁部小片	内外面共に磨滅著しい 口縁端部内側に一条沈線 楠葉型
	42	調査区北端	整地土層	瓦器	椀	粗 1㎜以下の砂粒含む	やや軟	内・外面:10Y5/1灰色 器肉: 10YR6/4にぶい黄橙色	-	0.4	-	口縁部小片	内面・口縁端部回転ナデ 外面横ナデ 口縁端部内側に一条沈線 楠葉型
	43	調査区北端	整地土層下部	瓦器	椀	やや密 1㎜以下の（黒雲母）少量含む	堅緻	内・外面:N6/灰色 器肉: 10YR6/4にぶい黄橙色	-	0.4	-	口縁部小片	内面上位にミガキ密集 外面回転ナデ 口縁端部内側に一条沈線
	44	調査区内	整地土層	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:5Y8/1灰白色 器肉:10Y8/1灰白色	-	0.3	-	口縁部のみ	内外面共に磨滅著しい
	45	調査区北半	整地土層	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:10Y7/1灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	内面回転ナデ 外面口縁部横ナデ 外面胴部回転ナデ 口縁部内側に一条沈線 大和型（12c?）
	46	南北サブトレンチ	整地土層	瓦器	椀	やや粗 1㎜以下の砂粒含む	堅緻	内・外面:N6/灰色 器肉:7.5Y7/2灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	内面・外面口縁部横ナデ 楠葉型　衰退期？
	47	調査区北半	整地土層	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面: 7.5YR8/1灰白色 器肉:2.5Y6/1黄灰色	-	0.3	-	底部高台付近	貼り付け高台 内面ナデのちミガキ 楠葉型
	48	南北サブトレンチ	整地土層	瓦器	皿	密	-	内・外面: 7.5YR8/1灰白色 器肉:5Y7/1灰白色	-	0.4	1.0	口縁部～底部小片	内面ミガキ痕跡あり 外面ナデ
	49	東西サブトレンチ	整地土層	陶磁器	椀	密	堅緻	内・外面: 2.5GY5/1オリーブ灰色 器肉: 10YR7/2にぶい黄橙色	(15.0)	0.4	-	口縁部1/8	内外面施釉薬
	50	調査区中央部	整地土層	弥生土器	壺	粗 4.5㎜大の礫含む 2㎜以下の砂粒含む	軟	内・外面: 10YR7/6明黄褐色 器肉:5Y6/1灰色	底径(7.7)	0.9	-	底部3/4	内外面共に磨滅著しい
	51	竪穴建物１	上部掘削時	弥生土器	甕	やや密 3㎜大の砂礫含む	軟	内・外面:7.5Y6/6橙色 器肉:5Y5/1灰色	-	0.7	-	口縁部小片	内外面共に磨滅著しい 口縁平坦面に４条の刻み 弥生河内ⅡorⅢ
	52	竪穴建物１	上部掘削時	弥生土器	甕	やや粗	軟	内・外面・器肉: 10YR8/4浅黄橙色	-	0.5	-	口縁部小片	内外面共に磨滅著しい 口縁端部が内側に肥厚する 口縁端部断面は方形を呈す
	53	竪穴建物１	上部掘削時	弥生土器	壺	粗 1㎜大の砂粒含む	軟	内面: 10YR7/4にぶい黄橙色 外面: 10YR7/3にぶい黄橙色 器肉: 10Y3/1オリーブ黒色	-	0.4	-	口縁部小片（先端部欠損）	内面幅２㎜～３㎜の丁寧な横ミガキ 頸部外面に斜めナデ 口縁端部は欠損及び剥落
	54	竪穴建物１	-	弥生土器	甕	密 5㎜大の礫含む	やや軟	内面・器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色 外面: 10YR6/4にぶい黄橙色	(15.6)	0.6	-	口縁部1/8	内面ナデ 頸部下方のみケズリ 外面横ナデ
	55	竪穴建物１	上部掘削時	弥生土器	壺	密 2.5㎜の白色小礫含む 雲母を多く含む	軟	内面:10YR5/1褐灰色 10YR7/4にぶい黄橙色 外面: 10YR7/4にぶい黄橙色 器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色 10YR8/3浅黄橙色	-	0.5	-	頸部か小片	外面断面三角形の突帯が２条巡る 河内Ⅱ-1様式？
	56	竪穴建物１	上部掘削時	弥生土器	脚	やや粗 2㎜以下の砂粒多く含む	やや軟	内面: 10Y3/1オリーブ黒色 外面・器肉: 7.5YR7/6橙色	-	0.7	-	1/2	内外面共に磨滅著しい 鉢（椀型）？

第９表　遺物観察表４

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2011-7	57	竪穴建物１	－	弥生土器	不明	粗 3.5mm大の礫含む ２mm以下の砂粒多く含む	軟	内面: 10YR7/4にぶい黄橙色 外面: 10YR6/4にぶい黄橙色 器肉: 10YR7/2にぶい黄橙色	底径 (3.0)	1.0	－	底部完存	内外面共に磨滅著しい 手捏ね
	58	竪穴建物１	炉付近	弥生土器	不明	粗 0.5～１mm大の礫含む ３mmの石粒含む	やや軟	内面:7.5YR7/6橙色 外面: 10YR5/3にぶい黄褐色 器肉:5YR7/8橙色	底径 (4.0)	0.6	－	底部1/7	内面磨滅著しい 外面ナデ
	59	竪穴建物１	－	弥生土器	甕	密 6.5mm大の石含む １mm以下の砂粒多く含む	軟	内面:7.5YR6/6橙色 外面: 10Y3/1オリーブ黒色 器肉:10YR5/6黄褐色	底径 (4.0)	0.5	－	底部1/2	内面磨滅著しい 外面ヘラケズリ、ナデ、指押え 外面底部ヘラケズリ 外面煤付着
	60	竪穴建物１	炉付近	弥生土器	不明	粗 ２mm以下の砂粒多く含む	軟	内・器肉: 10YR7/6明黄褐色 外面:2.5Y4/2暗灰黄色	－	0.5	－	1/3	内面わずかにハケ目痕跡あり 外面磨滅著しい
	61	竪穴建物１	溝1	弥生土器	甕	やや粗 3.5mm大の石粒多く含む １mm以下の砂粒を多く含む	やや軟	内面:10YR4/1褐灰色 外面・器肉: 10YR6/4にぶい黄橙色	底径 (8.7)	0.6	－	1/4	内面ハケ目痕跡あり 内面底部に指頭圧痕 外面わずかにハケ目痕跡あり
	62	竪穴建物２	－	弥生土器	甕	密 ３mm以下の砂粒少量含む	やや軟	内面:10YR7/6明黄褐色 外面・器肉: 10YR5/3にぶい黄褐色	底径 (7.6)	0.7	－	底部1/6	内面磨滅著しい 籾殻痕跡残るか 外面縦方向ケズリ後ナデ
	63	竪穴建物２	床面直上	弥生土器	水差し型土器 把手か	粗 ２mm白色砂粒まばらに含む 0.5mm雲母少量含む	軟	内面:7.5Y8/6浅黄橙色 外面:7.5Y8/6浅黄橙色 器肉:10YR8/3浅黄橙色	－	1.2	－	1/2	外面ナデ調整
	64	竪穴建物２	－	弥生土器	甕	やや密 6.5mm大の石含む 5.5mm以下の礫多く含む	良好	内面:5Y4/1灰色 器肉:10YR6/2灰黄褐色 外面: 10YR6/3にぶい黄橙色	－	1.3	－	底部1/2	内外面共に磨滅著しい 内面に指頭圧痕 手捏ね 全体的に比熱痕跡あり
	65	竪穴建物２	－	弥生土器	不明	粗 3.5mm大の礫含む １mm以下の砂粒多く含む	軟	内面:2.5Y4/1黄灰色 外面: 2.5YR5/4にぶい赤褐色 器肉: 2.5YR5/6明赤褐色	底径 (6.0)	0.5	－	底部1/6	内外面共に磨滅著しい 外面に煤付着
	66	竪穴建物２	－	弥生土器	底部	粗 １～２mm大の礫多く含む ５mm大の石粒あり	やや軟	内面:2.5Y5/2暗灰黄色 外面: 10YR7/3にぶい黄橙色 器肉:7.5Y2/1黒色	底径 (6.4)	0.4	－	底部1/3	内外面共に磨滅著しい 内面底部付近に指頭圧痕 外面わずかにミガキ痕跡
	67	竪穴建物１	覆土～直上	石器	剥片	－	－	－	2.5	0.7	2.0	－	サヌカイト
	68	竪穴建物１	覆土～直上	石器	剥片	－	－	－	2.7	0.5	1.8	－	サヌカイト
	69	竪穴建物１	覆土～直上	石器	剥片	－	－	－	3.0	1.0	2.0	－	チャート
	70	竪穴建物１	覆土～直上	石器	剥片	－	－	－	2.4	0.4	2.8	－	サヌカイト
	71	竪穴建物２	床面直上	石器	剥片	－	－	－	2.9	0.4	2.1	－	頁岩
	72	竪穴建物２	覆土～直上	石器	剥片	－	－	－	3.0	1.0	3.0	－	サヌカイト
	73	竪穴建物１	－	石器	石錐か 未製品	－	－	－	2.8	0.7	1.5	－	サヌカイト
	74	竪穴建物２	覆土～直上	石器	剥片	－	－	－	2.6	0.9	2.1	－	サヌカイト
	75	竪穴建物１ 炉跡南東	貼り床直上	石器	石斧	－	－	－	4.4	2.8	7.5	－	閃緑岩
	76	竪穴建物１ 炉跡南東	貼り床直上	石器	砥石	－	－	－	(長) 4.7 (短) 3.3	4.4	16.7	－	頁岩
	77	竪穴建物１ 炉跡南東	貼り床直上	石器	敲石	－	－	－	5.1	4.7	18.6	－	流紋岩

第10表　遺物観察表5

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
1980	78	本郭南東部	表採	銅製品	盃	-	-	N3/暗灰色	口径(11.1) 底径4.1	0.1	2.2	ほぼ完形	歪み顕著 高台内面に『長光土器』の文字
	79	本郭南東部	表採	瓦	丸瓦	密 1mm以下の砂粒含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色 器肉:2.5Y6/1黄灰色	15.6	2.4	34.2	広端部の一部を欠く	凸面縦方向のナデ 凹面玉縁部分に内叩き 吊り紐D型、糸切り痕
	80	本郭南東部	表採	瓦	平瓦	やや密 1～5mm大の白色礫多く含む 全体に雲母多く含む	堅緻	凹面: 5Y6/2灰オリーブ色 凸面:5Y5/1灰色 器肉:7.5Y6/1灰色	26.0	2.4	-	狭端部を欠く	凹凸面ともに横・縦ナデ 凸面にハナレ砂
1994-2	81	第3調査区付近	表採	瓦	平瓦	密 4mm大の礫含む 1～3mmの砂粒(長石、雲母など)多く含む	堅緻	凹面:2.5Y4/2暗灰黄色 凸面:10YR4/2灰黄褐色 器肉:10YR6/2灰黄褐色	-	2.1	-	体部の一部	凹凸面ともに摩耗著しく調整不明瞭 表面にハナレ砂か
2013-4	82	第3調査区	堀部下層	土師器	炮烙	やや密 1mm以下の微細な砂粒(黒雲母か)含む	堅緻	内・外面・器肉: 10YR6/3にぶい黄橙色	-	最大1.2	-	口縁部の一部	風化著しく調整不明瞭
	83	第3調査区	堀部下層	瓦	平瓦	やや粗 3mm以下の砂粒、礫多く含む	堅緻	凹面:5G3/1暗緑灰色 凸面:5B4/1暗青灰色 器肉:7.5Y6/1灰色	-	1.9	-	広端部	凹凸面ともにナデ
	84	第1調査区付近	表採	瓦	丸瓦	やや密 2mm以下の砂粒、微細な雲母少量含む	堅緻	凸面:N3/灰色 凹面:2.5Y5/3黄褐色 器肉:5Y6/1灰色	-	2.0	-	体部の一部	凸面全面に布目痕、粗いコビキ痕 凹面縦ナデ 浅い紐跡が横に三段、斜方向にみられる
	85	第1調査区西壁	-	瓦	平瓦	密 1mm以下の砂粒(白・黒雲母など)含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:10Y8/1灰白色	-	2.2	-	広端部	凹面縦ナデ 凸面横ナデ
	86	第1調査区	表土～1層	瓦	雁振り瓦	やや密 0.5mm以下の砂礫含む ところどころに1mm大の礫(石英か)含む	堅緻	凹面:2.5Y6/2灰黄色 凸面:5Y5/1灰色 器肉:2.5Y6/2灰黄色	-	2.5	-	側面～体部の一部	凸凹面ナデ 側面部ケズリ 凹面粗いコビキ痕
	87	第1調査区	掘削中	瓦	平瓦	密 6mm大の石(石英他)、4mm以下の礫(花崗岩・石英)多く含む	堅緻	凹面:2.5Y7/3浅黄色 凸面・器肉: 2.5Y6/2灰黄色	-	2.2	-	体部の一部	凸面に格子状タタキ
	88	第1調査区	-	瓦	鬼瓦	やや密 7.5mm大の小石 3mm大の礫少量含む	堅緻	外面: 5Y6/2灰オリーブ色 器肉:2.5Y6/1黄灰色	-	2.3		体部の一部	ケズリ、ナデあげ 部位不明
	89	第1調査区	-	瓦	平瓦	やや粗 1～5mm白色礫(長石か)多く含む 1～2mmの黒雲母?多く含む	やや不良	凹面: 5GY3/1暗オリーブ灰色 凸面・器肉: 5GY2/1オリーブ黒色	-	2.1	-	体部の一部	凹凸面ともにナデ 凹凸両面に煤付着
	90	第1調査区	-	瓦	雁振り瓦	やや密 3～5mm大の礫 1mm大の砂粒含む	堅緻	凹面:7.5Y4/1灰色 凸面: 7.5Y3/1オリーブ黒色 器肉:10R4/2灰赤色	-	2.7	-	体部の一部	凸面微かに布目痕 凹面粗い糸切り痕
	91	第4調査区	南壁第26層	陶器	椀	密 1mm以下の雲母含む	堅緻	内面:7.5Y8/2灰白色 外面:7.5Y8/1灰白色 器肉: 5YR6/4にぶい橙色	底径3.6	-	-	底部1/2	見込み、高台外面に絵付け
2013-6	92	第2調査区37堀	-	瓦	丸瓦	密 5mm大までの礫含む(石英か) 1mm大までの白っぽい礫含む 金色がかる砂(雲母か)が見られる	堅緻	凸面:N5/灰色 凹面:N4/灰白色 器肉:5Y6/1灰色 ともに10YR4/6褐が混じる	-	2.4	-	丸瓦の一部	凸面横ナデ、一部縦ナデあり 凹面布目痕
	93	第2調査区37堀	地山直上盛土	瓦	丸瓦	やや密 0.5mm以下の白色礫含む 5mm大の黒色礫含む	堅緻	凸面:10Y6/1灰色 凹面:N5/灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色	-	-	-	丸瓦の一部	凸面横ナデ 凹面に粗いコビキ痕、布目痕 横方向に浅い紐痕か
	94	第2調査区37堀	-	-	丸瓦	やや密 1～2mm大の砂礫含む	堅緻良好	凸面:5Y6/1灰色 凹面:5Y6/1灰色 器肉:2.5Y6/1灰黄色	-	2.2	-	体部の一部	凹面粗いコビキ痕
	95	第2調査区37堀	-	瓦	丸瓦	やや粗 2.5mm以下の砂粒(雲母・長石他)多く含む	堅緻	凸面:5Y6/1灰色 凹面:N4/灰色 器肉:5Y7/1灰白色	-	2.5	-	丸瓦の一部	凸面縦ナデ 凹面全体的に布目、部分的に紐痕

第 11 表　遺物観察表６

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2013-6	96	第２調査区 37堀	北壁断面 第１層 相当層	瓦	平瓦	密 １mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面:N6/灰色 器肉:5Y8/2灰白色	-	2.3	-	体部の一部	凹凸面縦・横ナデ
	97	第２調査区 37堀肩部	北壁断面 第４層 相当層	磁器	椀	精緻 黒色砂粒含む	堅緻	内・外面:5GY8/1灰白色 器肉:2.5GY8/1	-	0.4	-	口縁部小片	回転ナデ 0.5mm以下の施釉
	98	第２調査区 37堀肩部	北壁断面 第４層 相当層	磁器	皿	精緻 黒色砂粒含む	堅緻	内面:N8/灰白色 外面:2.5GY8/1灰白色 器肉:2.5GY8/1灰白色	(17.0)	0.5	-	口縁部1/10	内外面に絵付、施釉 外面に１条の圏線
	99	第２調査区 37堀肩部	北壁断面 第４層 相当層	磁器	椀	精緻 黒色砂粒含む	堅緻	内面:5GY8/1灰白色 外面:5Y8/2灰白色 器肉:5Y8/2灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	外面に絵付 全体に0.5mm以下の施釉
	100	第２調査区 37堀肩部	北壁断面 第４層 相当層	磁器	椀	精緻 黒色砂粒含む	堅緻	内・外面: 7.5GY8/1明緑灰色 器肉:5GY8/1灰白色	-	0.5	-	口縁部小片	内外面に絵付、後施釉
	101	第２調査区 37堀肩部	北壁断面 第４層 相当層	陶器	椀 または 鉢	精緻 黒色砂粒含む	堅緻	内・外面: 5GY8/1灰白色 器肉:10Y8/1灰白色	-	0.7	-	底部の一部	色絵付け 高台外面に3条の圏線後施釉、畳付は無釉 見込み部分は施釉後絵付け
	102	第２調査区 37堀肩部	北壁断面 第４層 相当層	磁器	皿	精緻 黒色砂粒含む	堅緻	内・外面: 7.5GY8/1明緑灰色 器肉:N7/灰白色	底径 10	底面 0.7	-	底部	内外面及び高台内面に染付又は絵付け 0.5mm以下の施釉 畳付無釉
	103	第２調査区 10溝	第21～25層	磁器	椀	精緻	堅緻	内・外面: 2.5GY8/1灰白色 器肉:5Y8/2灰白色	底径 (4.0)	0.4	-	底部小片	内外面に絵付け
	104	第２調査区 10溝	第21～26層	土師器	羽釜	やや粗 微細な砂粒含む	やや軟	内・外面: 10YR8/3浅黄橙色 器肉:2.5Y6/1黄灰色	-	1.4	-	鍔部分の一部	摩耗著しく調整不明瞭
	105	第２調査区 10溝	第21～27層	土師器	脚か	粗	やや軟	内・外面: 2.5Y8/2灰白色	底径 (11.4)	0.7	-	底部1/6	内面横ナデ 外面ナデ、指頭圧痕 摩耗顕著
	106	第２調査区 10溝	第21～28層	瓦	軒丸瓦	やや密 １mm以下の砂粒(雲母)含む	やや軟	凹凸面:N6/灰色 器肉:2.5Y8/3淡黄色	-	内区 0.9	-	瓦当部小片	巴文 摩耗顕著
	107	第２調査区 10溝	第21～29層	瓦	平瓦	やや密 １mm以下の砂粒多く含む(黒雲母、石英など)	堅緻	凹凸面:N6/灰色 器肉:5Y8/1灰白色	-	2.0	-	狭端部の一部	凹面横ナデ、凸面縦ナデ 凸面にハナレ砂
	108	第２調査区 10溝	第21～30層	瓦	面戸瓦	やや粗 ３mm以下の礫(石英、長石など)多く含む １mm以下の砂粒(雲母)多く含む	堅緻	凹面:N5/灰色 凸面:N4/灰色 器肉:10Y8/1灰白色	-	2.0	-	体部の一部	凹凸面横ナデ
	109	第２調査区 10溝	第21～31層	瓦	平瓦	やや密 ２～５mmの礫(雲母か)多く含む	堅緻	凹面:10BG3/1暗青灰色 凸面:5BG4/1暗青灰色 器肉:5GY8/1灰白色～5GY7/1明オリーブ灰色	-	2.1	-	体部の一部	凹凸面ナデ
	110	第２調査区 10溝	第21～32層	瓦	平瓦	やや粗 １～４mmの礫、表面に雲母多く含む	堅緻	凹面:7.5Y7/1灰白色～N4/灰色 凸面:2.5Y7/2灰黄色 器肉:2.5Y7/2灰黄色	-	1.9	-	体部の一部	凹面ナデ 凸凹面にハナレ砂か
	111	第２調査区 11溝	-	瓦器	椀	やや密	堅緻	内・外面:N4/灰白色 器肉:7.5Y8/1灰白色	-	0.4	-	口縁部のみ	内面に1条の沈線、ナデ 外面横ナデ
	112	第２調査区 11溝	-	陶器	不明	密 0.5mm大の黒色砂礫含む １mm以下の白色礫含む	堅緻	内面:2.5Y6/2灰黄色 外面:7.5YR3/1黒褐色 器肉:2.5Y6/1黄灰色	底径 (7.4)	0.4	-	底部1/10	内外面回転ナデ 外面に施釉
	113	第７調査区 １堀	-	瓦	軒丸瓦	やや密 ４mm大の礫(花崗岩) ２mm以下の砂粒(石英他)多く含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色 器肉:5Y7/1灰白色 5Y7/2灰白色	-	2.0	-	瓦当面小片	巴文 外区内縁に珠文の痕跡あり(径6.0mm) 瓦当面と丸瓦部の接着は双方に刻み目あり
	114	第８調査区 １堀	地山直上	瓦	軒平瓦	やや密 0.5mm以下の白色砂粒含む ２～３mm大の礫僅かに含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:5Y7/2灰白色	-	1.7	-	瓦当面の一部	均整唐草文
	115	第７調査区 １堀	３層	瓦	平瓦	やや粗 0.5mm以下の砂粒(石英か)含む 微細な雲母含む	やや軟	凹面:2.5Y7/3浅黄色 凸面:10Y5/1灰色 器肉:2.5Y7/3浅黄色	-	1.9	-	体部の一部	摩耗著しく調整不明瞭

第12表　遺物観察表7

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2013-6	116	第6調査区 1堀	上層	瓦	平瓦	やや密 1～3㎜の白色透明礫含む 3㎜以下の黒色礫含む	やや堅緻	凹面:N5/灰色 凸面:N4/灰色～ N5/灰色 2.5GY7/1 明オリーブ灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色	-	2.0	-	体部の 一部	凹凸面ナデ
	117	第7調査区 1堀	中～下層	弥生土器	蓋 または 鉢	やや密 2.5㎜以下の砂粒(花崗岩、黒雲母、石英など)多く含む	やや軟	内・外面: 7.5YR6/6橙色	幅3.1	-	-	-	手捏ね成形 蓋のつまみまたは鉢の底部
	118	第1調査区 1堀		瓦器	擂鉢	やや密 2㎜以下の砂粒少量含む 4㎜大の礫含む	やや軟	内・外面: 2.5Y7/1灰白色 器肉:5Y8/1灰白色	-	0.9	-	口縁部 小片	外面横ナデ 佐藤編年D期 近江編年4期 15c末～16c前半
	119	第7調査区 1堀	上層	磁器	椀	精緻	堅緻	内面:5GY8/3灰白色 外面:5GY8/3灰白色 器肉:2.5GY7/2 明オリーブ灰色	(10.0)	0.3	-	口縁部 1/20	口縁部内外面に施釉 内面に染付あり
	120	第7調査区 1堀	上層	磁器	不明 (椀か)	精緻 1㎜以下の黒色砂粒含む	堅緻	内面:10Y6/1灰色 外面:7.5Y6/1灰色 器肉:2.5GY7/1 明オリーブ灰色	(11.2)	0.3	-	口縁部 1/20	0.5㎜厚の施釉
	121	第6調査区 1堀	下層	瓦器	鉢か	やや密	堅緻	内面:7.5Y6/1灰色 外面:2.5Y7/1灰白色 器肉:10Y4/1灰色	-	0.7	-	底部の 一部	摩耗著しく調整不明瞭
	122	第7調査区 1堀	中～下層	瓦器	深鉢	やや粗 2㎜以下の砂粒(黒雲母、石英他)多く含む	やや軟	内・外面: 2.5Y7/4浅黄色 器肉:5Y7/2灰白色	-	口端部 1.0	-	口縁部～ 体部の 一部	摩耗著しく調整不明瞭 口端面に薄く煤付着
	123	第7調査区 1堀	中～下層	瓦器	鉢か	密 1㎜以下の砂粒多く含む(黒雲母、石英か)	やや軟	内・外面:N4/灰色、 7.5YR7/4にぶい橙色 器肉: 7.5YR7/3にぶい橙色	-	1.1	-	体部～ 底面の 小片	内外面ナデ、横ナデ
	124	第1調査区 2土坑	-	瓦質土器	不明	やや密 少量の砂礫含む(雲母か)	堅緻	内面:10YR6/2灰黄褐色 外面:2.5Y4/1黄灰色 器肉: 10YR7/3にぶい黄橙色	-	-	-	小片	表面に薄く煤付着
	125	第1調査区 2土坑	-	瓦	平瓦	やや粗 1～3㎜の礫含む(雲母が多く見られる)	やや軟	凹面:2.5Y6/2灰黄色 凸面: 2.5Y6/3にぶい黄色 器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	-	2.6	-	側面～ 体部の 一部	凹凸面ともに風化著しく調整不明瞭
	126	第1調査区 2土坑	-	瓦	平瓦	やや密 3～4㎜大の礫(花崗か)、 1.1cm大の石含む 2㎜以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色 器肉:N6/灰色	-	2.0	-	側面～ 体部の 一部	凹凸面横ナデ 端部に明確な面取り
2013-9	127	第1調査区	第7・ 8・10層	磁器	椀	精緻 黒色砂粒含む	堅緻	内・外面: 7.5Y6/2灰オリーブ色 器肉:5Y7/2灰白色	-	0.4	-	口縁部 小片	青磁 内外面に回転横ナデ 全体に細かい貫入がみられる 0.5㎜以下の施釉
	128	第1調査区	第7・ 8・10層	磁器	椀	精緻 黒色砂粒含む	堅緻	内・外面:5GY8/1灰白色 器肉:N8/灰白色	-	0.2	-	口縁部 小片	白磁 内外面に回転横ナデ 0.5㎜以下の施釉
	129	第1調査区	第7・ 8・10層	陶器	椀	精緻 黒色砂粒	堅緻	内面: 7.5YR7/3にぶい橙色 外面:5Y8/1灰白色 器肉:2.5YR6/6橙色	底径 (4.0)	-	-	底部 1/4	内外面に回転横ナデ 0.5㎜以下の施釉
	130	第1調査区 南東隅	-	陶器	椀	精緻	堅緻	内面:2.5GY灰白色 外面:5GY灰白色 器肉:2.5GY灰白色	底径 4.8	0.5	-	底部 完形	内外面に回転横ナデ 0.5㎜以下の施釉 高台のくびれ部分に絵付け
	131	第1調査区	7層	陶器	椀	精緻 黒色砂粒(雲母)含む	堅緻	内・外面:2.5Y7/3浅黄色 器肉:2.5Y8/2灰白色	-	0.3	-	口縁部 小片	内外面に回転横ナデ 0.5㎜以下の施釉 全体に細かい貫入がみられる
	132	第2調査区	第28層	土師器	炮烙	やや密 1㎜以下の雲母多く含む	良好	内面:5YR6/6橙色～ 7.5YR5/4にぶい褐色 外面:5YR6/6橙色 器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	-	口縁部 0.6	-	口縁部～ 体部小片 (鍔あり)	内外面横ナデ 外面鍔より下方に煤付着
	133	第2調査区 東端部	表土	瓦	平瓦	密 1～5㎜大の白色礫含む 1㎜以下の雲母多く含む	堅緻	凹面:N3/1暗灰色～ 7.5GY4/1暗緑灰色 凸面:5G3/1暗緑灰色～ 7.5GY4/1暗緑灰色 器肉:10Y5/1灰色	-	1.7	-	側面～ 体部の 一部	凹凸面横ナデ 凸面にバリ跡

第 13 表　遺物観察表８

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2013-9	134	第２調査区	第12層	瓦	道具瓦(雁振瓦か)	やや密 砂礫を含む	堅緻	凹面:5Y6/1灰色 凸面・器肉: 2.5Y7/1灰白色	-	2.1	-	小片	凹凸面ナデ
	135	第１調査区	第２層	瓦	平瓦	やや密 1～2㎜大の砂粒 0.5㎜以下の砂粒含む	堅緻	凹面:7.5Y7/1灰白色 凸面・器肉: 2.5Y7/1灰白色	-	2.4	-	広端部の一部	凹凸面横ナデ
	136	第２調査区	第２層	瓦	平瓦	やや密 1～3㎜大の白色礫多く含む 1～4㎜大の黒色礫含む	堅緻	凹面:2.5Y7/2灰黄色～N4/灰色 凸面:N5/灰色 器肉:2.5GY8/1灰白色	-	2.2	-	体部の一部	焼きムラあり 凹凸面ナデ 凸面にハナレ砂 摩耗顕著
	137	第２調査区	第31層	弥生土器	甕または壺	粗 1～4㎜白色礫(長石他)、1㎜以下の雲母含む	やや不良	内面:2.5Y6/2灰黄色 外面: 10YR7/3にぶい黄橙色 器肉:2.5Y6/2灰黄色 10YR7/3にぶい黄橙色	底径(9.0)	-	-	底部小片	内面に指頭圧痕、微かに煤跡 摩耗激しく調整不明瞭
	138	第１調査区	第25層	土師器	皿	やや粗 1～5㎜大の赤褐色礫含む 1～3㎜大の白色礫含む 1㎜大の黒色砂粒含む	良好	内面: 7.5YR6/3にぶい褐色～2.5Y8/1灰白色 外面: 5YR6/4にぶい橙色～2.5Y8/2灰白色 器肉: 7.5YR7/2明褐灰白色	-	0.3	1.5	体部小片	へそ皿か
2013-3	139	第１調査区 １撹乱	-	土師器	不明	やや粗	やや軟	内・外面・器肉: 10YR6/3にぶい黄橙色	-	0.8	-	口縁部小片	摩耗著しく調整不明瞭
	140	第１調査区	-	瓦	平瓦	密 1～4㎜の白色礫(長石か)含む 2㎜大の黒色礫(角閃石)含む 1㎜以下の黒雲母多く含む	堅緻	凹面: 5Y6/2灰オリーブ色 5YR5/6明赤褐色 凸面: 5Y6/3オリーブ黄色～7.5Y4/1灰色 器肉: 5Y5/2灰オリーブ色 5YR5/6明赤褐色混入	-	2.1	-	側部～体部	凸凹面ナデ 摩耗顕著
	141	第１調査区	-	鉄製品		-	-	-	2.6	(1.1～1.4)	-	刀身の一部	残存長:8.7cm
	142	第１調査区 北サブトレンチ	-	土師器	皿	やや粗	やや軟	内外面・器肉: 7.5YR5/6明褐色	-	0.8	-	小片	内外面ナデ
	143	第１調査区 北サブトレンチ	-	瓦	平瓦	密 3㎜以下の砂粒を少量含む	堅緻	凹面:2.5Y7/3浅黄色 凸面:2.5Y7/3浅黄色 器肉:2.5Y6/1黄灰色	-	2.0	-	側面～体部の一部	凹面全面に布目痕、一部ナデ消し 凸面縦方向ナデ或いはケズリ 全面にハナレ砂
	144	第１調査区 中サブトレンチ	-	土師器	皿	やや密	やや軟	内・外面・器肉: 7.5YR7/3にぶい橙色	口径(7.6) 底径(2.7)	1.0	-	口縁部1/7	内外面回転横ナデ 底部外面ナデ
	145	第１調査区 中サブトレンチ	地山直上	土師器	炮烙	やや粗 0.5㎜以下の砂礫含む	やや硬	内・外面: 5YR5/6明赤褐色 器肉: 10YR5/4にぶい黄褐色	口径(17.2)	口縁部0.8 体部0.5	-	口縁部1/11	内面指おさえ、風化・摩耗顕著 外面横ナデ
	146	第１調査区 中サブトレンチ	-	弥生土器	不明	やや密 2.5～4.5㎜大の礫(石英?)少量含む 1㎜以下の砂粒多く含む	良好	内・外面・器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	-	0.8	-	底部小片	内外面ナデ
	147	第１調査区 中サブトレンチ	上層	瓦質土器	深鉢	やや密 2～3㎜大の砂粒 1㎜以下の砂粒多く含む	良好	内・外面:N5/灰色 器肉:2.5Y7/4浅黄色	口径(45.0) 底径(28.0)	口縁部1.0 体部0.7	-	口縁部・底部1/4	胴部欠損 内外面横ナデ 内面弱い指頭圧痕 内外面ともに風化・摩耗顕著
	148	第１調査区 中サブトレンチ	-	瓦	軒平瓦	やや密 1～3㎜大の砂礫多く含む 5㎜大の礫あり	やや軟	瓦当面:2.5Y7/2灰黄色 器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	外縁上面(1.2)	-	-	瓦当面1/3	唐草文 四方に界線あり 顎貼り付け 風化著しい
	149	第１調査区 中サブトレンチ	-	瓦	平瓦	密 4㎜大の礫 2～3㎜大の砂粒(石英、花崗岩)を含む	堅緻	凹凸面: 2.5Y7/3浅黄色 器肉:2.5Y7/2灰黄色	-	2.3	-	広端側	凹面に粗い布目痕
	150	第１調査区 中サブトレンチ	-	瓦	平瓦	やや密 2㎜以下の砂粒(石英など)少量含む	堅緻	凹凸面: 2.5Y5/2暗灰黄色 器肉: 10YR6/3にぶい黄橙色	-	2.1	-	体部の一部	凹面縦ナデ 凸面明瞭なコビキ痕(縦後斜め)

第14表　遺物観察表9

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2013-3	151	第1調査区 中サブトレンチ	-	瓦	雁振り瓦か	やや密 1～4mm大の黒色礫含む 1～3mm大の白色砂粒含む 雲母多く含む	堅緻	凹面: 2.5Y4/2暗灰黄色 5YR5/3にぶい赤褐色 凸面:2.5Y4/2暗灰黄色 器肉: 2.5Y6/3にぶい黄色	-	2.6	-	側面～体部の一部	凹凸面に糸切り痕 凸面に煤付着
	152	第1調査区 南サブトレンチ	-	瓦	軒丸瓦	やや粗 2～3mm大の砂粒(花崗岩、石英など)多く含む	やや軟	瓦当面: 2.5YR6/3にぶい黄色 器肉: 10YR6/4にぶい黄橙色	外区径(16.0)	-	-	瓦当面の一部	巴文(左巻き)の尾の部分が残存
	153	第1調査区 南サブトレンチ	溝掘削時	瓦	丸瓦	やや密 微細な砂礫含む	堅緻	凹凸面: 2.5Y5/2暗灰黄色 器肉:5B6/1青灰色	-	3.0	-	玉縁部の一部	凹面布目痕 側面部分縦ナデ
	154	第1調査区 南サブトレンチ 東端	-	瓦	平瓦	やや密 4mm大の礫含む 1mm以下の砂粒（石英、黒雲母ほか）多く含む	堅緻	凹面: 5Y6/2灰オリーブ色 凸面:2.5Y6/2灰黄色 器肉:2.5Y7/1灰白色	-	2.0	-	小片	刻印あり
	155	第1調査区 南サブトレンチ	溝掘削時	瓦	平瓦	やや粗 1～2mm大の礫多く含む 4mm大の礫含む 微細な雲母含む	堅緻	凹凸面: 2.5Y5/3黄褐色 器肉: 10YR7/2にぶい黄橙色	-	2.1	-	狭端部の一部	凹面ナデ 凸面摩耗著しく調整不明瞭
	156	第1調査区 南サブトレンチ	溝掘削時	瓦	平瓦	やや粗 2mm以下の砂粒(雲母)含む 6mm大の礫含む	堅緻	凹凸面: 2.5Y5/3黄褐色 器肉: 10YR6/3にぶい黄橙色	-	2.2	-	広端部の一部	凹面ナデ 凸面糸切り痕
	157	第1調査区 南サブトレンチ	溝掘削時	瓦	平瓦	密 1～2mm大の白色礫含む 1mm以下の黒色砂粒含む	やや軟	凹面: 2.5Y6/3にぶい黄色～ 2.5Y5/1黄灰色 凸面: 10YR6/3にぶい黄橙色 器肉: 10YR6/3にぶい黄橙色	-	2.1	-	体部の一部	凹面工具痕、ナデ 凸面横ナデ、糸切り痕 凹凸面摩耗顕著
	158	第1調査区 南サブトレンチ	溝掘削時	瓦	平瓦	密 3mm以下の白色・黒色礫(雲母)含む	堅緻	凹面: 5GY4/1暗オリーブ灰色 凸面:10Y5/1灰色 器肉:5Y8/1灰白色	-	2.5	-	広端部の一部	凹面横ナデ 凸面縦ナデ、調整不明瞭な部分あり
	159	調査区周辺	水田耕作土中	瓦	鬼瓦(棟鬼)	やや密 2～4mm大の礫(花崗岩?)多く含む	堅緻	N4/灰色	-	-	-	棟鬼の一部	裏面には側張を確認 工具でのケズリ、ナデ
	160	調査区周辺	水田耕作土中	瓦	鬼瓦	やや密 5～7mm大の礫多く含む 1mm以下の砂粒多く含む	堅緻	表面:2.5Y4/1黄灰色 裏面:2.5Y4/1黄灰色 器肉: 10YR5/3にぶい黄褐色	-	2.9	-	鬼瓦の一部	竹管状工具による連珠あり
1982	161	調査区南壁	-	瓦	平瓦	やや粗 3mm以下の砂粒(長石、雲母など)含む 1mmの砂粒多く含む	堅緻	凹面:N5/灰色 凸面:7.5Y7/1灰白色 N5/灰色 器肉:N8/灰白色	-	2.3	30.2	体部の一部	凹面縦ナデ 凸面縦ナデ、工具痕、ハナレ砂、バリ跡
	162	調査区南壁	-	瓦	平瓦	やや密 5mm大の礫(石英・長石?)含む 2～3mm大の砂粒(長石)多く含む	堅緻	凹面:7.5Y6/1灰色 凸面:N6/灰色 器肉: 2.5GY6/1オリーブ灰色	-	1.9	-	体部の一部	凸面全面にハナレ砂多い(雲母など) 凸面縦・横ナデ 側面ナデ
	163	調査区南壁	-	瓦	雁振り瓦	やや密 4mm大の礫 1mm以下の砂粒(雲母・長石等)多く含む	堅緻	凹凸面:N6/灰色 器肉:7.5Y4/1灰色	-	2.1	-	体部の一部	凹面縦ナデ 凸面全面にハナレ砂多い(雲母など) 凸面バリ跡
	164	調査区南壁	-	瓦	雁振り瓦	やや密 1～3.5mm大の砂粒・礫多く含む(雲母・長石) 5mm大の礫(石英)含む	堅緻	凹凸面:N6/灰色 器肉:N7/灰白色	-	2.5	29.5	体部の一部	凹面明確な糸切り痕、布目痕 凸面縦ナデ
	165	調査地周辺	-	銅製品	銭貨	-	-	-	外径2.5	0.1	-	完形	永楽通宝
2012-3	166	第1調査区 井戸13	-	瓦	平瓦	密 2.5mm以下の砂粒を少量含む	堅緻	凹凸面:N3/暗灰色 器肉:5Y6/1灰色	-	2.1	-	側面～体部の一部	凹面縦ナデ、全面に煤付着 凸面ナデ
	167	第1調査区 井戸14	-	瓦	平瓦	密 2mm以下の砂粒を含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色	30.2	3.4	29.8	完形	凹面工具による文様を千鳥に施す
2013-5	168	第3調査区	盛土掘削中	瓦器	椀	やや密 0.5mm以下の黒色砂粒含む	やや軟	内・外面・器肉: 2.5Y8/1灰白色	(13.8)	0.6	-	口縁部1/17	口縁部内面に沈線 内外面横ナデ 楠葉型

第 15 表　遺物観察表 10

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2011-1	169	第４調査区	-	磁器	椀	密　精緻	堅緻	内面:2.5GY7/1 明オリーブ灰色 外面:2.5GY7/1 明オリーブ灰色 器肉:2.5Y8/2灰白色	-	0.4	-	体部小片	貫入あり 内面に植物枝状の文様あり
	170	第６調査区 ピット23	-	鉄製品	刀子か	-	-	-	1.4	(0.5)	-	-	残存長8.7cm
	171	第４調査区 溝	-	瓦	丸瓦	やや粗い ３mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凸面:10YR4/1褐灰色 凹面:N3/暗灰色 器肉:10YR7/6明黄褐色	-	2.3	-	体部の 一部	凸面ケズリ、縦方向ナデ 凹面吊り紐痕、糸切り痕
2005-1	172	第１調査区 溝(南側)	４層	瓦器	甕 または 壺	密 １mm以下の砂粒(花崗岩?)少量含む	やや軟	内・外面・器肉: 5Y8/1灰色	-	0.5	-	頸部 1/10	内面ナデ、横ナデ 外面工具痕、横ナデ
	173	第１調査区 溝(北側)	３層	瓦器	椀	やや密 １mm以下の砂粒(黒雲母)含む	堅緻	内・外面:N7/灰白色 器肉:N8/灰白色	-	0.4	-	口縁部 小片	口縁端部内面に2条の沈線 内面ミガキ 楠葉型Ⅲ-１～２期
	174	第１調査区 溝(北側)	６層	瓦器	椀	やや密 １mm以下の砂粒(黒雲母)含む	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:2.5Y7/3浅黄色	-	0.3	-	口縁部～ 体部小片	内面に微かにミガキ確認 楠葉型Ⅳ-１期か
	175	第１調査区 溝(北側)	３層	瓦器	椀	密 １mm以下の砂粒(黒雲母)多く含む	堅緻	内面:N6/灰色 外面:N7/灰白色 器肉:N8/灰白色	(9.4)	3.1	-	口縁部～ 体部 1/8	内外面横ナデ 内面にミガキ 楠葉型Ⅳ期
	176	第１調査区 溝(北側)	３層	瓦器	椀	やや密 １mm以下の砂粒(黒雲母)多く含む	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:N7/灰白色	(10.0)	0.3	-	口縁部 1/12	内外面横ナデ 内面にミガキ 楠葉型
	177	第１調査区 溝(北側)	-	土師器	炮烙	やや密 １mm以下の砂粒(石英・黒雲母)少量含む	やや軟	内・外面: 7.5YR6/4にぶい橙色 器肉: 7.5YR7/3にぶい橙色	-	口縁部 0.4	-	口縁部 小片	横ナデ 外面薄く煤付着
	178	第１調査区 溝(北側)	３層	瓦器	擂鉢	密	堅緻	内面:N8/灰白色 2.5GY8/1灰白色 外面:N6/灰色	底径 (9.6)	-	-	底部 小片	内面に7本単位の摺り目(残存部に2ヶ所確認) 外面微かにミガキ?
	179	第１調査区 溝(北側)	６層	陶器	皿	精緻	堅緻	内面:7.5YR4/4褐色 外面:2.5Y4/1黄灰色 器肉: 10YR7/3にぶい黄橙色	底径 (6.0)	0.4	-	底部 1/6	内面に茶釉 (7.5YR4/4褐色) 外面赤茶色と黒色の釉 底部外面に糸切り痕 外面胎土目積み付着
	180	第１調査区 溝(北側)	６層	瓦	平瓦	やや粗 ５mm大の礫(花崗岩) ３mm以下の礫(花崗岩・黒雲など)含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色 器肉:5Y7/1灰白色	-	2.4	-	体部の 一部	凹面横ナデ
2013-1	181	第１調査区	北壁 第５層	瓦	平瓦	やや粗い 3.5mm大の砂礫含む	やや不良	凹凸面:7.5Y8/1灰白色 器肉:N3/暗灰色～ N2/黒色	-	2.2	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ、ハナレ砂
2012-4	182	第４調査区	堀部埋土	瓦	雁振り瓦	密 １mm以下の砂粒含む	堅緻	凹面:7.5Y5/1灰色 凸面:5Y7/1灰白色 器肉:5Y7/1灰白色	-	-	-	体部の 一部	凹面糸切り痕 凸面ナデ 粘土の接着部分に工具痕
2013-9	183	第３調査区	南壁 第６層 下部	瓦	平瓦	密 ２～４mm白色礫(長石か)含む １mm以下の白色・黒色砂粒多く含む	堅緻	凹面: 10Y7/1灰白色～ N5/灰色 凸面:10Y7/1灰白色 器肉:10Y7/1灰白色	-	2.0	-	体部の 一部	凹面縦ナデ、工具痕 凸面調整不明瞭

第16表　遺物観察表11

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2012—4	184	第1調査区ピット5	-	土師器	皿	やや密 2mm以下の砂粒含む	やや軟	内・外面・器肉: 7.5YR7/6橙色	(7.1)	0.4	(1.3～1.5)	1/3	内外面横ナデ
	185	第1調査区ピット4	-	土師器	皿	やや密 1mm以下の白色・赤色砂粒多く含む 黒雲母多く含む	良好	内面・器肉: 2.5YR6/8橙色 外面:5YR6/6橙色	(10.4)	0.3	1.3	口縁部1/10	内外面ナデ 外面指押さえ
	186	第1調査区ピット3	-	瓦器	椀	密 1mm以下の砂粒を少量含む	堅緻	内面:7.5Y8/1灰白色 外面:N7/灰白色	(10.9)	0.3	4.1	1/2	外面体部上半強い横ナデ、以下指押さえ 内面に間隔5～7mmの圏線ミガキ 高台なし 楠葉型Ⅲ～Ⅳ期か
	187	第1調査区ピット4	-	瓦	平瓦	やや粗い 2mm以下の砂粒多く含む 3～4mm白色礫 2～3mmの黒色礫含む 黒雲母多く含む	堅緻	凹面:2.5Y6/2灰黄色～3/1灰褐色 凸面:2.5Y6/2灰黄色～N3/暗灰色 2.5YR5/8明赤褐色 器肉:2.5Y7/2灰黄色	-	2.2		体部の一部	凹面横ナデ 凸面工具痕、糸切り痕 凹凸面ともに広範囲に煤付着
	188	第2調査区盛土下面溝	下部～最下部	瓦質土器	深鉢	密 1mm以下の砂粒少量含む	堅緻	内・外面:N3/暗灰色 器肉:10Y7/1灰白色	(14.0)	1.0	-	口縁部小片	内外面剥離著しく調整不明瞭
	189	第2調査区盛土下面溝	下部～最下部	瓦器	不明	やや密 1mm以下の砂粒を多く含む	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:5Y7/1灰白色	(20.0)	0.8	-	口縁部小片	内面・外面口縁部横ナデ 外面下半横ハケ目
	190	第2調査区盛土下面溝	中世	土師器	羽釜	やや密 2mm以下の砂粒多く含む 4.5mm大の礫含む	良好	内・外面・器肉:10YR6/4にぶい黄橙色	-	0.7	-	鍔部分1/8	内面斜方向の細ハケ目 内外面煤付着
	191	第2調査区盛土下面溝	中世	瓦器	擂鉢	密 1mm以下の砂粒含む	堅緻	内面・器肉:N4/灰色 外面:N5/灰色	-	0.3	-	口縁部1/10	内面のミガキ簡略化 楠葉型Ⅳ-2期か
	192	第2調査区盛土下面溝	43層	瓦器	擂鉢	密 2mm大の黒色砂粒 1mm大の褐色砂粒含む 雲母多く含む	堅緻	内面: 10YR7/3にぶい黄橙色 10YR5/1褐灰色 外面: 10YR7/2にぶい黄橙色 10YR5/1褐灰色 器肉: 10YR7/2にぶい黄橙色	底径(10.8)	0.7	-	底部1/10	内面に擂り目 外面縦ナデ 摩耗顕著
	193	第2調査区土坑	中層	瓦器	椀	精緻	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:7.5Y8/1灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	内面横ナデ後、残存部分に5mm間隔でミガキ、口縁部に1条の沈線 外面ナデ 楠葉型
	194	第2調査区土坑	中層	瓦器	椀	精緻	堅緻	内・外面:5/灰色 器肉:7.5Y8/1灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	内面回転ナデ、極細ミガキ 外面ナデ 楠葉型
	195	第2調査区土坑	下部～最下部	瓦器	椀	精緻 1mm以下の砂粒少量含む	堅緻	内・外面: N3/暗灰色 器肉:5Y7/1灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	内面横ナデ後斜方向のハケ目、細い横ミガキ 楠葉型
	196	第2調査区土坑	中層	瓦器	椀	精緻	堅緻	内面:10Y8/1灰白色 外面:N4/灰色 器肉:7.5Y8/1灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	内外面横ナデ 楠葉型
	197	第2調査区土坑	最下層	瓦器	椀	密 1mm以下の砂粒少量含む	堅緻	内・外面:N3/暗灰色 器肉:N7/灰白色	(11.4)	0.3	(3.8)	口縁部1/8	内面横ナデ後上方に縦ハケ目、細いミガキ 外面口縁部横ナデ 体部ナデ 楠葉型Ⅳ-2期か
	198	第2調査区土坑	下部～最下部	瓦器	椀	精緻	堅緻	内・外面:N4/灰色 器肉:N7/灰白色	(10.4)	0.3	-	口縁部1/4	内外面横ナデ 楠葉型Ⅳ-3期か
	199	第2調査区土坑	-	土師器	皿	密 1mm以下の砂粒少量含む	良好	内・外面・器肉: 7.5YR7/4にぶい橙色	-	0.4	1.3	小片	摩耗著しく調整不明瞭
	200	第2調査区土坑	下層	土師器	皿	密 1mm以下の砂粒含む	やや軟	内・外面・器肉: 7.5YR7/4にぶい橙色	-	0.3	1.1	小片	摩耗著しく調整不明瞭
	201	第2調査区土坑	中層	土師器	皿	やや粗 1mm以下の砂粒(雲母など)多く含む	やや軟	内・外面・器肉: 7.5YR8/4浅黄橙色	-	0.4	0.9	小片	内面横ナデ 外面ナデ 摩耗顕著
	202	欠番											
	203	第2調査区土坑	-	土師器	皿	密 1mm以下の砂粒を少量含む	良好	内・外面・器肉: 10YR8/4浅黄橙色	-	0.4	-	口縁部のみ	内外面横ナデ
	204	第2調査区土坑	下層	土師器	皿	精緻	やや軟	内・外面・器肉: 7.5YR8/4浅黄橙色	(6.6)	0.4	1.3	1/4	内外面ナデ 内面に弱い指頭圧痕

第 17 表　遺物観察表 12

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2012-4	205	第２調査区土坑	-	土師器	皿	密 １mm以下の砂粒少量含む	やや軟	内・外面・器肉: 10YR8/3浅黄橙色	(6.4)	0.4	1.2	1/5	内面横ナデ 外面ナデか
	206	第２調査区土坑	下部～最下部	土師器	皿	密 雲母多く含む １mm大の白色砂粒含む	やや軟	内面: 10YR6/4にぶい黄橙色 外面:2.5Y7/3浅橙色 器肉: 10YR7/2にぶい黄橙色	(7.2)	0.4	1.3	口縁～底部1/10	内外面剥離顕著 内面底部に指押さえ 底部手捏ね成形か
	207	第２調査区土坑	下部	土師器	皿	やや密 ３mm大の砂粒含む １mm以下の砂粒少量含む	良好	内・外面・器肉: 7.5YR8/4浅黄橙色	(7.4)	0.4	1.3	1/3	内外面ナデ 外面摩滅顕著
	208	第２調査区土坑	最下層	土師器	皿	密 １mm以下の砂粒少量含む	良好	内・外面・器肉: 7.5YR8/4浅黄橙色	(9.0)	0.4	1.2	1/5	内外面横ナデ 外面底部指押さえ
	209	第２調査区土坑	下部～最下部	瓦器	鉢	やや粗い	堅緻	内・外面:N4/灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色	-	1.2	-	口縁部小片	横ナデ
	210	第２調査区土坑	下部～最下部	瓦器	不明	やや密 2.5mm以下の砂粒少量含む	やや軟	内・外面:N3/暗灰色 器肉:10YR8/3浅黄橙色	-	1.0	-	口縁部小片	内面摩滅顕著で調整不明瞭 外面横ナデ
	211	第２調査区土坑	下部～最下部	瓦器	羽釜か	やや粗 微細な砂礫を含む	やや堅緻	内・外面:5Y5/1灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色 10Y3/1オリーブ黒色	-	0.7	-	口縁部小片	内面横ハケ目 外面横ナデ、微かに煤付着 体部に鍔部分可能性あり
	212	第２調査区土坑	下部～最下部	瓦質土器	鉢	やや粗 １mm以下の砂粒(雲母ほか)多く含む	堅緻	内面:N7/灰白色 外面:N5/灰色 器肉:10Y8/1灰白色	-	0.6	-	底部小片	内外面ナデ 底部～体部の接着部は雑で粗い
	213	第２調査区土坑	下層	陶器	擂鉢	密 １mm以下の白色砂粒含む 体部に９mm大の黄褐色礫あり	堅緻	内・外面: 10YR4/1暗赤灰色 器肉:10R5/3赤褐色	(26.3)	0.9	-	口縁部～体部の一部	内外面回転ナデ ９本を１単位とした摺り目 備前焼Ⅳ期後半か
	214	第２調査区土坑	地山の一つ上の層	石製品	砥石	-	-	-	-	-	-	-	両面に砥ぎ痕あり
	215	第２調査区土坑	下部～最下部	瓦	平瓦	密 ３mm大の礫(長石?)含む １mm以下の砂粒(雲母)多く含む	堅緻	凹面:2.5Y6/1灰黄色 凸面:2.5Y6/2灰黄色 器肉:2.5Y7/1灰白色	-	2.3	-	狭端部～側面の一部	凹凸面斜方向ナデ 凹面煤付着 凸面バリ跡
	216	第２調査区土坑	最下部	瓦	平瓦	やや密 ３mm以下の礫(石英・長石等)少量含む １mm以下砂粒(雲母など)多く含む	堅緻	凹面:5Y7/2灰白色 凸面:N6/灰色 器肉:5Y8/1灰白色	-	2.0	-	体部の一部	凹面縦ナデ 凸面斜方向ナデ、粗い糸切り痕、工具痕
	217	第２調査区土坑	15層	瓦	丸瓦	やや密 微細な雲母を含む	堅緻	凸面:N1.5/黒色 凹面:N3/暗灰色 器肉:N6/灰色	-	2.2	-	体部の一部	凸面全面に煤 凹面横ナデ、布目痕、糸切り痕
	218	第２調査区土坑	下層	瓦	雁振り瓦	密 １～４mm大の白色礫(長石?)含む １mm以下の白色砂粒多く含む １mm以下の黒色砂粒含む	堅緻	凹面: 5Y6/2灰オリーブ色 凸面:5Y7/2灰白色 器肉:5Y7/1灰白色	-	1.8	-	側面～体部の一部	凹面全体的に細糸切り痕、型跡 凸面縦ナデ
	219	第３調査区盛土下面溝	-	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色	(12.0)	0.3	-	口縁部小片	ナデ 楠葉型Ⅳ－3期
	220	第３調査区盛土下面溝	-	土師器	皿	やや密 ２mm以下の砂粒多く含む	軟	内・外面・器肉: 7.5YR8/6浅黄橙色	-	0.5	-	底部小片	摩耗著しく調整不明瞭 手捏ねか?
	221	第３調査区盛土下面溝	-	瓦器	椀	密 １mm以下の砂粒少量含む	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:10Y7/1灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	内面横ナデ後１mm幅のミガキ 外面横ナデ後ナデ 和泉型Ⅳ-4又は3期か?
1986-1	222	Ｃ調査区	-	瓦	平瓦	やや密 ５mm大の石粒含む 2.5～４mm大の石粒多く含む	堅緻	凹面:2.5Y5/1黄灰色 凸面:2.5Y5/2暗灰黄色 器肉:5Y4/1灰色	-	2.2	-	体部の一部	径１cmの釘穴あり 凹面より穿つ
	223	Ｃ調査区	-	瓦	平瓦	やや密 0.5mm以下の砂粒 ２～2.5mm大の砂礫含む	堅緻	凹面:5B4/1暗青灰色 5YR6/6橙色 凸面:10BG4/1暗青灰色 器肉:7.5Y4/1灰色	-	2.2	-	体部の一部	凹面細布目痕、横方向のナデ、ハナレ砂 凸面縦方向のナデ コビキＡを確認
	224	Ｃ調査区	-	瓦	平瓦	やや密 ２mm以下の砂礫含む	堅緻	凹面:5Y5/1灰色 7.5YR5/8明褐色 凸面:5Y5/1灰色 7.5YR5/4にぶい褐色 器肉:10Y6/1灰色	-	2.2	-	狭端部～側面の一部	凹面横方向のナデ 凸面にハナレ砂

第18表　遺物観察表13

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
1986-1	225	C調査区	-	瓦	平瓦	やや密 0.5mmrの砂粒 2～3mm大の礫含む	堅緻	凹面:2.5Y7/3浅黄色 7.5Y4/1灰色 凸面:10Y6/1灰色 7.5Y4/1灰色 器肉:7.5Y6/1灰色	-	1.8	-	広端部～側面の一部	凹面横ナデ 凸面縦ナデ
	226	C調査区	-	瓦	平瓦	やや密 1mm以下の礫 ところどころに3～4mm大の礫（石英）含む	堅緻	凹面・器肉:N4/灰色 10YR6/4にぶい黄橙色 凸面: 10YR7/3にぶい黄橙色 N2/黒色	-	2.1	-	広端部～側面の一部	摩耗顕著
	227	C調査区	-	瓦	平瓦	やや密 0.3mm以下の黒色粒（雲母か）含む 0.5mm以下の白色礫含む ところどころに3～4mmの礫含む	堅緻	凹面: 7.5GY4/1暗緑灰色 凸面:5Y4/1灰色 5YR5/8明赤褐色 器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	-	2.3	-	広端部	凹面縦ナデか 凸面糸切り痕
	228	C調査区	-	瓦	平瓦	密 黒雲母含む 1～4mmの白色礫（長石）多く含む	堅緻	凹面:N3/暗灰色 凸面:N4/灰色 器肉:10Y6/1灰色	-	2.3	-	広端部～体部の一部	凹面糸切り痕 凸面摩耗著しい、縦ナデか
1965・69	229	-	弥生時代包含層	石器	石包丁	-	-	-	14.3	0.5	5.0	完形	粘板岩
	230	-	弥生時代包含層	石器	石包丁(未製品)	-	-	-	30.2	1.6	6.8	-	粘板岩
2013-7	231	第1調査区	-	陶器	皿	密 1～3mm大の白色礫多く含む	堅緻	内面: 5Y6/2灰オリーブ色 7.5Y3/1オリーブ黒色 外面:10R3/1暗赤灰色 器肉:10R4/2灰赤色	(47.6)	1.1	-	口縁部小片	内外面回転横ナデ 外面に施釉 備前焼
	232	第1調査区	-	磁器	皿	精緻 0.5mm以下の黒色砂粒含む	堅緻	内・外面:N8/灰白色 器肉:2.5GY8/1灰白色	-	0.2	-	口縁部小片	染付 内外面施釉 外面に絵付け
	233	第1調査区東端	-	弥生土器	不明	粗 4mm以下の白色礫(長石か)含む 2mm以下の雲母多く含む	やや不良	内面:10YR8/3浅黄色 外面:5YR6/6橙色～ 7.5YR7/4にぶい橙色 器肉:10R8/3浅黄色～ 10YR7/3にぶい黄橙色～ 5YR5/6明赤褐色	底径(13.6)	0.9	-	底部1/6	内面ナデ 外面横ナデ 摩滅顕著
	234	第1調査区東端	-	瓦	丸瓦	やや粗 6mm大の礫含む 2.5mm以下の砂粒(石英・雲母・長石など)多く含む	堅緻	凹凸面:N6/灰色 器肉:10YR7/1灰色	-	2.3	-	広端部の一部	凸面ナデ 凹面布目痕、糸切り痕
	235	第1調査区	東壁11層下～12層	瓦	丸瓦	密 1mm以下の砂粒(雲母)含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:N7/灰色	-	1.9	-	胴部の一部	凸面縦方向のナデ、工具痕 凹面布目痕
	236	第1調査区	-	瓦	丸瓦	やや密 1～4mm大の白色礫(長石か)多く含む 2mm大の黒色礫含む 雲母多く含む	堅緻	凸面:7.5Y7/1灰白色～ N4/灰色 凹面:N4/灰色 器肉:N6/灰色	-	2.6	-	狭端部～体部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、吊り紐痕
	237	第1調査区	北壁17層	瓦	丸瓦	やや粗 2mm以下の砂粒(石英・花崗岩など)多く含む 1cm大の石混入	堅緻	凹凸面・器肉:N6/灰色	15.7	2.7	-	1/2	凸面縦方向のナデ、側面付近に工具痕 凹面布目後コビキ、吊り紐D型、内叩き痕 凹凸面煤付着
1997-2	238	井戸内	5・6層	瓦	軒平瓦	やや密 3～4mm大の礫(花崗岩・長石・石英など)多く含む 2mm以下の砂粒(雲母・長石)多く含む	堅緻	凹凸面:10Y5/1灰色 器肉:2.5Y6/1黄灰色	25.0	2.4	-	平瓦部のみ	滑り止めあり 瓦当面は唐草文の可能性あり 瓦当外縁上端面面取り 平瓦部凹面横方向にナデ、ヒレとの接着部分は強いナデ消し 凸面横方向に幅広のナデ、側縁にバリ痕
	239	光通寺境内採集	表採	瓦	軒平瓦	やや密 1mm大の白色砂粒含む 1cm大の礫含む	-	凸面5Y7/2灰白色 顎部後縁:7.5Y4/1灰色 器肉:10Y8/1灰白色	-	-	-	瓦当面1/2	宝珠唐草文
	240	井戸1	-	瓦	軒平瓦	やや粗 4mm大の礫含む 2mm以下の砂粒(長石・雲母ほか)多く含む	堅緻	凹凸面:5Y6/1灰色 器肉:7.5Y6/1灰色	-	2.7	-	平瓦部の一部	瓦当面に界線残る 凹凸面ナデ

第 19 表　遺物観察表 14

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
1997-2	241	井戸１	-	瓦	軒丸瓦	密 １～３mm大の黒色礫含む ２～５mm大の白色礫含む 雲母含む	堅緻	瓦当両面:N4/灰色 器肉:N5/灰色	外縁幅 2.0	1.2	外縁高 0.9	瓦当面 2/3	三つ巴文 内縁に径1cm大の珠文を４個確認
	242	井戸１	-	瓦	軒丸瓦	密		瓦当両面・器肉: 5Y8/1灰白色	外区径 (14.2)	1.5	外縁高 1.0	瓦当面 1/3	巴文 内縁に珠文 圏線あり 鋳型の跡が残る
	243	井戸１	5･6層	瓦	軒丸瓦	やや密 ４mm大の礫(石英･花崗岩?長石?)含む ２～３mm大の礫(石英など)多く含む １mm以下の砂粒(雲母など)多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:10Y4/1灰色	外区径 (14.5)	2.8	外縁高 1.3	瓦当面 3/4	三つ巴文 内縁に珠文 丸瓦部凸面縦方向のナデ、凹面布目痕 瓦当面との接合部分は強いナデ、圧痕 丸瓦部器厚2.7cm
	244	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや粗 3.5mm大の礫含む ２mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:10Y6/1灰色	13.0	2.1	-	2/3	凸面縦方向のナデ、微かに工具痕 凹面布目痕後工具痕、微かにコビキ痕
	245	井戸１	-	瓦	丸瓦	粗 2.5mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉: 2.5GY6/1オリーブ灰色	13.9	2.3	-	体部の 1/2	凸面縦方向のナデ、微かに工具痕 凹面布目痕、吊り紐C型
	246	井戸１	-	瓦	丸瓦	密 １mm以下の砂粒若干含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色 器肉:N5/灰色	-	2.3	-	玉縁側の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕
	247	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや粗 ４mm大の礫(長石か)含む ２mm以下の砂粒(雲母･長石など)多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:10Y5/1灰色	-	2.6	-	滑り止め 部分	凹面布目痕、吊り紐痕、他ナデ
	248	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや粗 3.5mm以下の礫多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色	13.9	2.6	-	体部の 1/2	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、吊り紐C型(縄目明瞭)、微かにコビキ痕、板状工具での内叩き痕
	249	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや粗	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:N6/灰色	14.1	2.4	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面全体に細布目痕、吊り紐C型、糸切り痕
	250	井戸１	-	瓦	丸瓦	密 ３mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凸面:N5/灰色 凹面:N5/灰色 器肉: 2.5GY6/1オリーブ灰色	-	2.3	-	体部の 1/2	凸面縦方向のナデ、工具痕 凹面板状工具での内叩き痕、微かに布目痕、糸切り痕
	251	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや粗 ５mm大の石粒含む １mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:7.5Y5/1灰色	-	2.5	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、吊り紐C型、楕円形状の内叩き痕
	252	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや密 ４mm大の礫含む ２mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色 器肉:10Y6/1灰色	-	2.7	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ、工具痕 凹面細布目痕、内叩き、紐痕
	253	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや粗 ３mm大の礫含む １～２mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面・器肉:N5/灰色	-	2.6	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面細布目痕、吊り紐痕、コビキ痕
	254	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや密 ２mm以下の砂粒少量含む	堅緻	凹凸面・器肉:N5/灰色	(13.8)	2.3	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面細布目痕、圧痕(内叩き?)
	255	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや密 ５mm大の礫(花崗岩)少量含む ２mm以下の砂粒(雲母･石英など)多く含む	堅緻	凸面:N6/灰色 凹面: 2.5Y6/3にぶい黄色 器肉:N6/灰色	-	2.4	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面細布目痕、強い圧痕
	256	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや密	堅緻	凸面:7.5YR7/6橙色 凹面:2.5Y5/1黄灰色 器肉:7.5YR7/6橙色 にぶい黄橙色	-	2.1	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面細布目痕、吊り紐痕、内叩き、微かに糸切り痕
	257	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや密 １mmの砂礫を含む ４mm大の礫(花崗岩)を含む	堅緻	凸面:N3/暗灰色 凹面:N4/灰色 器肉:N5/灰色	-	2.2	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、吊り紐痕
	258	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや密 ４～５mm大の礫 ２mm以下の砂粒含む	堅緻	凸面:7.5Y5/1灰色 5YR6/6橙色 凹面:7.5Y5/1灰色 器肉7.5Y5/1灰色	-	2.6	-	体部の 一部	凸面縦方向のナデ 凹面細布目痕、吊り紐C型、コビキ痕
	259	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや密 ３～５mmの礫(石英･花崗岩)、黒雲母多く含む	堅緻	凸面:5Y6/1灰色 凹面・器肉:N4/灰色 器肉:10YR5/1褐灰色	-	2.1	-	体部の 一部	凸面工具痕 微かに煤付着 凹面細布目痕、コビキ痕

第20表　遺物観察表15

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
1997-2	260	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや密 4mm大の礫含む 2mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凸面:N4/1灰色 凹面: 7.5YR6/4にぶい橙色 器肉:5Y5/1青灰色	-	2.4	-	体部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、吊り紐は直線的
	261	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや密 3.5mm大の礫(石英・花崗岩)多く含む	堅緻	凹凸面・器肉:N5/灰色	-	2.4	-	体部の一部	凸面縦方向のナデ、工具痕 凹面布目痕、紐痕
	262	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや密 3mm以下の礫含む	堅緻	凸面:5PB6/1青灰色 凹面:5PB5/1青灰色 器肉:5PB6/1青灰色	-	2.4	-	体部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、紐痕
	263	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 0.5～1mm以下の砂粒多く含む 3～4mm大の礫含む	堅緻	凹面:N5/灰色 一部5YR7/6～6/6橙色 凸面:5B5/1明青灰色 器肉:N4/灰色	-	2.2	-	狭端側	凹凸面ナデ 凹面にハナレ砂
	264	井戸1	-	瓦	平瓦	やや粗 2mm以下の砂粒多く含む 3～4mm以下の礫 7mm大の石粒多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:7.5Y5/1灰色	-	2.1	-	狭端側	凹面ナデ 凹面に微かに糸切り痕
	265	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 3mm以下の砂粒含む 1mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面・器肉: N3/暗灰色	-	2.2	-	狭端側	凹面ナデ、煤付着 凸面ナデ、工具痕
	266	井戸1	-	瓦	平瓦	粗 3mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹面:N3/暗灰色 凸面:N5/灰色 器肉:N4/灰色	-	2.2	-	狭端側	凹凸面ナデ
	267	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 1mm以下の砂多く含む 3mm大の礫含む	堅緻	凹面:7.5Y5/1灰色 凸面:10Y5/1灰色 器肉:7.5Y5/1灰色	-	2.0	-	狭端側	凹凸面ナデ 凸面型跡残る
	268	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 2mm以下の砂粒含む	軟	凹面:5Y7/1灰白色 凸面・器肉: 5Y7/1灰白色	-	2.1	-	体部の一部	凹凸面ナデ 糸切り痕
	269	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 3mm以下の礫(花崗岩、石英など)含む	堅緻	凹凸面・器肉: 5Y5/1灰色	-	2.1	-	体部の一部	凹面ナデ 凸面縦方向のナデ、型跡、糸切り痕
	270	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 3mm大の礫 2mm以下の砂粒含む	堅緻	凹凸面:N4/灰色 器肉:N5/灰色	-	2.0	-	体部の一部	凹面ナデ、ハナレ砂 凸面ナデ、工具痕、糸切り痕
	271	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 0.5～1mmの砂粒 2～3mm大の礫含む 雲母含む	堅緻	凹面:5G2/1緑黒色 凸面:5B3/1暗青灰色 7.5YR7/6橙色 器肉:5B3/1暗青灰色	-	2.0	-	体部の一部	凹凸面ナデ 凸面全体に糸切り痕
	272	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 2mm以下の砂粒含む 3～4mm大の礫あり	堅緻	凹面:N4/灰色 凸面:N4/灰色 7.5YR5/6黄褐色 器肉:N5/灰色	-	2.0	-	体部の一部	凹凸面ナデ 凸面全体にハナレ砂、糸切り痕
	273	井戸1	-	瓦	平瓦	やや密 0.5mm大の砂粒 2mm大の礫含む	堅緻	凹面:5Y5/1灰色 凸面:10Y4/1灰色 10YR6/6明黄褐色 器肉:10Y4/1灰色	-	2.2	-	体部の一部	凸面ナデ、工具痕、糸切り痕
	274	井戸1	-	瓦	谷丸瓦	やや粗 5mm大の石粒含む 3mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹面:N4/灰色 凸面・器肉: 7.5Y6/1灰色	-	2.3	-	体部	凹面全体に粗い布目痕 凸面工具痕後ナデ
	275	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや密 4mm大の礫(花崗岩・石英など) 2～3mm大の砂粒多く含む	堅緻	凸面・器肉: 10YR5/2灰黄褐色 凹面:5Y4/1灰色	-	2.1	-	体部の一部	凸面縦方向のケズリ 凹面工具痕、布目痕
	276	井戸1	-	瓦	鳥衾	やや密 5mm大の礫含む 3mm大の礫多く含む(花崗岩、石英など)	堅緻	瓦当面:N5/灰色 瓦当面裏:N4/灰色 丸瓦部:N5/灰色 器肉:7.5Y5/1灰色	外区径(15.3)	3.0	外縁高1.2	瓦当部2/3	巴文 内縁に珠文 瓦当裏面円に沿ってナデ、指頭圧痕 丸瓦部凸面縦方向のナデ 丸瓦部器厚2.7cm
	277	井戸1	-	瓦	鳥衾か	やや密 5mm大の礫(長石・花崗岩・石英など)、2mm以下の礫(雲母・花崗岩か)多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色 器肉:5Y6/1灰色	-	2.8	-	丸瓦部の一部	凸面縦方向のナデ、煤付着 凹面吊り紐D型、布目痕、糸切り痕
	278	井戸1	-	瓦	鳥衾か	やや粗い 5.5mm大の礫(石英・花崗岩)含む 3mm以下の礫(雲母・花崗岩など)多く含む	堅緻	凸面・器肉:N5/灰色 凹面:7.5Y6/1灰色	-	2.5	-	丸瓦部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面ナデ、布目痕、コビキ痕

第 21 表　遺物観察表 16

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
1997-2	279	井戸１	-	瓦	丸瓦	やや粗 3.5mm大の礫含む ２mm以下の砂粒多く含む(長石・雲母他)	堅緻	凸面:5Y5/1灰色 凹面:7.5YR7/6橙色 器肉:2.5Y5/1黄灰色 10YR7/4にぶい黄橙色	-	3.0	-	丸瓦部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、紐痕
	280	井戸１	-	瓦	雁振り瓦か	やや密	堅緻	凹凸面・器肉: 5Y7/2 灰白色	-	3.7	-	体部の一部	凸面全体に糸切り痕 摩耗・剥落著しく調整不明
	281	井戸１	-	瓦	雁振り瓦か	密 ３mm大の礫(石英など)、 １mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹面:7.5Y5/1灰色 凸面:5Y7/1灰白色 器肉: 10YR7/3にぶい黄橙色	-	2.6	-	体部の一部	凹凸面ナデ
	282	井戸１	-	瓦	平瓦	やや密 ６mm大の石 ３mm大の礫(花崗岩?)含む	堅緻	凹面:7.5Y6/1灰色 10YR5/8黄褐色 凸面・器肉: 2.5Y5/2暗灰黄色 5YR6/8橙色	-	2.4	-	体部の一部	凹凸面ナデ 凸面全体に糸切り痕
	283	井戸１	-	瓦	鬼瓦	やや密 ４mm大の礫 ２mm以下の砂粒含む	堅緻	外面:N5/灰色 器肉:N5/灰色～ N6/灰色	29.8～37.6	2.2～2.5	長さ44.2 顔出11.5	1/2	隅鬼瓦 表面の鬼顔は欠失 目、鼻、耳、角は丁寧なケズリとナデで整えられ、両側に2.2～2.4cmの半球型連珠を配する 台部の裏面は周囲に側張を貼付け、内側は工具で削り取り、ナデ
	284	サブトレンチ内	-	瓦器	深鉢か	密 １mm大の黒色砂粒含む 雲母多く含む	堅緻	内面:N5/灰色 5Y7/1灰白色 外面:7.5Y5/1灰色 一部10YR6/1褐灰色 器肉:2.5Y7/2灰黄色	(23.0)	0.9	-	口縁部1/10	内面横ナデ後上部横ミガキ、指頭圧痕 外面縦ミガキ後横ナデ
	285	サブトレンチ内	-	瓦器	椀	密 １～２mm黒色砂粒含む	堅緻	内面:5B5/1青灰色 外面:5B5/1青灰色 器肉面:2.5GY8/1	-	0.3	-	口縁部小片	内外面横ナデ 内面微かにミガキ
	286	サブトレンチ内	-	弥生土器	甕または壺	やや粗 １～４mm大の白色礫(長石) １～２mm大の黒色礫(角閃石)多く含む 雲母多く含む	良好	内面: 10YR6/3にぶい黄橙色 外面:10YR6/2灰黄褐色 器肉:2.5Y7/1灰白色	-	1.3	-	底部のみ1/4	外面ナデ 摩耗著しく調整不明瞭
	287	サブトレンチ内	-	弥生土器	甕または壺	密 １mm～４mm大白色砂礫 ２mm大の黒色砂粒含む 雲母多く見られる	良好	内・外面・器肉: 7.5YR6/4にぶい橙色	-	0.7	-	頸部?小片	内外面横ナデ 内面斜方向にハケ目又はミガキ 摩耗顕著
	288	サブトレンチ内	-	須恵器	不明	密 １mm大の白色砂礫 １mm以下の黒色砂粒含む	堅緻	内面:10Y6/1灰色 外面:N5/灰色～ 5GY6/1オリーブ灰色 器肉:7.5Y5/1灰色	-	0.8	-	底部小片	横ナデ
1999-2	289	調査区内	第５層	瓦	平瓦	やや密 0.5mm以下の砂礫 微細な雲母を含む	堅緻	凹面:10Y4/1灰色 凸面:2.5Y7/2灰黄色 器肉:2.57/2灰黄色	-	1.7	-	広端部～体部の一部	凹凸面横ナデ
2013-8	290	調査区東半分	地盤層直上	土師器	椀または皿	やや粗 0.5mm以下の黒砂粒を含む	やや軟	内・外面・器肉: 5Y7/1灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	内外面横ナデ
	291	調査区西端堀	埋土下部	瓦	平瓦	密 １～７mm大の白色礫(長石か)含む 黒雲母多く含む	堅緻	凹面:N3/暗灰色 凸面:N4/灰色 器肉: 2.5GY6/1オリーブ灰色	-	1.6	-	体部の一部	凹凸面横方向のナデ
	292	調査区堀	埋土上部	瓦	丸瓦	やや密 微細な雲母含む 0.5mm以下の砂粒含む 内面に５mm大の石あり	堅緻	凸面:7.5Y6/1灰色 凹面:10Y5/1灰色 器肉:N7/灰白色		2.5	-	体部の一部	凸面横方向のナデ 凹面全体に布目痕、糸切り痕
	293	調査区南西部	第11層	陶器	擂鉢	やや密	堅緻	内面:10R4/4赤褐色 外面: 2.5YR3/2暗赤褐色 10R4/4赤褐色 器肉:10R4/3赤褐色	-	-	-	口縁部	備前焼
2012-2	294	擁壁部立会区	-	瓦	丸瓦	密 ２～３mmの礫(花崗岩)多く含む	堅緻	凹凸面:N5/灰色	15.0	35.0	34.9	ほぼ完形	凸面縦方向の細かなナデ 凹面布目痕、糸切り痕、吊り紐C型
	295	擁壁部立会区	-	瓦	丸瓦	密 3.5mm大の石を多く含む ２mm以下の砂粒を多く含む	堅緻	凹凸面・器肉:N5/灰色	(11.7)	6.4	-	体部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、糸切り痕、吊り紐C型

第22表　遺物観察表17

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2012-2	296	擁壁部立会区	-	瓦	丸瓦	粗い 8mm大の石 3mm大の小石多く含む	堅緻	凸面:5Y7/1灰白色 凹面:5Y7/1灰白色 器肉:10Y4/1灰色	15.5	2.6	-	体部	凸面縄たたき痕、工具痕 ヘラケズリ後ナデ 凹面布目痕、吊り紐痕
	297	擁壁部立会区	-	瓦	丸瓦	やや粗 5mm大の礫(石英?)多い 2～3mmの礫多く含む	堅緻	凸面:5Y7/2灰白色 凹面:10YR8/2灰白色 一部5YR6/6橙色 器肉:10Y7/1灰白色	13.7	6.8	-	体部	凸面縦方向のナデ、部分的に横方向のナデ 凹面糸切り痕、布目痕、工具痕
	298	第1調査区	近世	瓦	丸瓦	やや密 5mm大の礫(花崗岩か?) 含む 2mm以下の砂粒多く含む	堅緻	凹凸面: 5Y6/2灰オリーブ 器肉:7.5Y7/1灰白色	-	2.4	-	体部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面布目痕、吊り紐D型、糸切り痕、縦方向に板状の工具で内叩き
	299	第1調査区	-	瓦	丸瓦	やや密 3～4mm大の礫(長石)含む 2mm以下の砂粒(雲母・長石など)多く含む	堅緻	凸面・器肉: 5Y6/2灰オリーブ色～10Y6/1灰色 凹面:N5/灰色 側面: 5Y6/2灰オリーブ色	-	2.4	-	体部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面吊り紐D型、方形の内叩き
	300	第1調査区10溝	中世	瓦器	椀	密 3mm大の砂粒わずかに含む	堅緻	内面:N3/暗灰色 外面:7.5Y8/1灰白色 器肉:7.5Y8/1灰白色	-	0.4	-	口縁部小片	内外面横ナデ 口縁端部ミガキか
	301	第1調査区10溝	中世	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:5Y7/1灰白色	-	0.4	-	口縁部小片	内外面横方向のミガキ 外面回転ナデ 楠葉型13C中葉頃か?
	302	第1調査区10溝	中世	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:N6/灰色 器肉:5Y7/1灰白色	(11.5)	0.4	-	口縁部小片	内面横方向のミガキ 外面横ナデ 楠葉型?
	303	第1調査区10溝	中世	土師器	皿	密 4mm大の礫(石英か)含む	良好	内・外面・器肉: 10YR8/4浅黄橙色	(9.6)	0.5	-	口縁部1/8	内・外面回転ナデあり
	304	第1調査区10溝	-	土師器	皿	やや密	やや軟	内・外面・器肉: 7.5YR 7/4にぶい橙色	(7.2)	0.3	-	口縁部1/8	内外面横ナデ 風化顕著
	305	第1調査区10溝	-	瓦器	深鉢か	やや粗 1mm以下の砂粒を含む	堅緻	内・外面:N5/灰色 器肉:2.5Y7/3浅黄色	(23.4)	0.6	-	口縁部	内面横ナデ後横方向のミガキ 外面横ナデ後縦方向のミガキ 奈良火鉢編年深鉢Ⅲ15c頃か
	306	第1調査区10溝	-	陶磁器	椀	やや粗い 1mm以下の砂粒少量含む	堅緻	内面:5YR4/6赤褐色 10GY3/1暗緑灰色 外面:10GY3/1暗緑灰色 器肉:2.5Y8/4淡黄色	-	0.6	-	口縁部小片	内外面施釉
	307	第1調査区10溝	中世	陶器	椀か	密 黒色砂粒と2mm大の礫(にぶい赤褐色)含む	堅緻	内面: 5YR5/3にぶい赤褐色 N1.5/黒色 外面:10YR6/2灰黄褐色 7.5YR3/2黒褐色 7.5YR3/2黒褐色 N1.5/0黒色	-	0.5	-	底部小片	内外面回転横ナデ 内外面0.7mm以下の施釉(黒褐色に黒色の釉を重ねる)
	308	第1調査区10溝	中世	弥生土器	壺または甕	粗 2.5mm大の砂粒含む 1mm以下の砂粒多く含む	やや軟	内・外面・器肉: 7.5YR6/6橙色	底径(2.2)	0.9	-	底部小片	手捏ね 底部内面指押さえ
	309	第1調査区10溝	中世	須恵器	不明	密 1mm以下の砂粒を含む	堅緻	内・外面・器肉: 5Y5/1灰色	-	0.5	-	口縁部のみ	内外面横方向のミガキ
	310	第1調査区10溝	中世	須恵器	不明	密 1mm以下の砂粒を含む	堅緻	内・外面・器肉:N4/灰色	-	0.6	-	底部小片	内外面回転横ナデ
	311	第1調査区10溝	中世	磁器	椀か	密 1mm大の白色砂粒含む	堅緻	内面: 7.5Y6/2灰オリーブ色 外面: 7.5Y6/2灰オリーブ色 器肉:7.5Y6/1灰色	(13.6)	0.4	-	口縁部1/4	内外面回転横ナデ 0.5mm以下の施釉
	312	第1調査区10溝	中世	磁器	椀	精緻	堅緻	内・外面・器肉: 10Y6/1灰色	(16.0)	0.4	-	口縁部小片	内外面横ナデ 0.5mm以下の施釉
	313	第1調査区10溝	中世	陶器	擂鉢	密 5mm大の長石含む	堅緻	内面: 2.5YR3/2暗赤褐色 外面: 2.5YR4/4にぶい赤褐色 器肉:N3/暗灰色 2.5YR4/4にぶい赤褐色	(23.8)	0.9	-	全体の1/4	片口上部欠失 内面8条を1単位とする摺り目 外面ケズリ後ナデ 備前
	314	第1調査区10溝	-	瓦	丸瓦	やや密 3mm以下の礫・砂粒多く含む	堅緻	凸面：N4/～3/灰色 凹面：N4/～3/灰色 器肉：7.5Y5/1灰色	-	-	-	玉縁部の一部	凸面縦方向ヘラ削り 凹面にかすかに斜・横方向のナデ痕がみられる

第 23 表　遺物観察表 18

次数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径/横幅(cm)	器厚(cm)	器高/縦幅(cm)	残存率	備考
2012-2	315	第１調査区 10溝	中世	瓦	丸瓦	やや密 ６mm以下の礫(石英か)、 ２～３mm大の礫(長石か)含む。 0.5mm以下の砂粒多く含む。 微細な雲母少量含む	堅緻	凸面:N5/灰色 凹面:N4/灰色 器肉:N5/灰色	-	2.2	-	体部の一部	凸面縦方向のナデ 凹面全体に布目痕、粗いコビキ痕、工具痕
	316	第１調査区 10溝	中世	瓦	平瓦	粗 ４mm大の礫含む ３mm以下の砂粒多く含む	やや軟	凹凸面・器肉: 7.5YR7/6橙色	-	2.1	-	体部の一部	凹面微かに布目痕 摩耗著しく調整不明瞭
	317	第１調査区 10溝	中世	瓦	平瓦	やや粗	堅緻	凹凸面: 2.5Y6/2灰黄色 器肉:2.5Y8/2灰白色	-	1.9	-	狭端面～側面の一部	凹凸面ナデ 凸面ハナレ砂
	318	第１調査区 10溝	中世	瓦	平瓦	密	堅緻	凹面:7.5Y4/1灰色 凸面:5Y6/1灰色 器肉:N8/灰白色	-	1.7	-	体部の一部	凹凸面ナデ
	319	第１調査区 10溝	中世	瓦	平瓦	やや密 １～６mm大の白色礫 ２～３mm大の黒色礫含む １mm以下の黒色、白色砂粒多く含む	堅緻	凹面:7.5Y4/1灰色 5YR4/3にぶい赤褐色 凸面:7.5Y6/1灰色 器肉: 2.5GY6/2オリーブ灰色 N5/0灰色	-	1.9	-	側面～体部の一部	凹凸面ナデ 摩耗顕著
	320	第１調査区 10溝	北壁断面 ２～11層	瓦	平瓦	１～２mm大の石英含む ３mm大の長石あり 凹面と器肉に微細な雲母 0.5mm大の砂礫含む	堅緻	凹面:2.5Y8/3浅黄色 凸面:10Y5/1灰色 器肉:2.5Y8/2 灰白色	-	2.8	-	側面～体部の一部	凹面横ナデのち斜め方向のナデか 凸面板状工具による横ナデのち縦ナデか
	321	第１調査区	-	土師器	皿	密 １mm以下の砂粒をごく少量含む	良好	内・外面・器肉: 10YR7/4にぶい黄橙色	(10.2)	0.3	-	口縁部 1/4	口縁部横ナデ 内面ナデ 外面指ナデ
	322	第１調査区 溝６	-	瓦器	風炉釜か	密 １mm以下の砂粒(雲母)含む	堅緻	内・外面:1.5/黒色 器肉:5Y7/1灰白色	(13.2)	0.9	-	口縁部 1/5	口縁部横ナデ 内面ミガキ、肩部横ナデ 肩部に透かし孔 内外面煤付着
	323	第１調査区 溝17	-	土師器	窯道具か	密	良好	5YR5/6明赤褐色	3.8	0.9	1.2	完形	トチンか 用途不明
	324	第１調査区 ピット124	-	-	壁土	粗 ７～８mm大の礫（石英） ８mm大のチャート 5mm大の礫（多くは石英）多く含む	軟	表面:7.5YR6/6橙色 裏面:7.5YR6/6橙色 中央部:10YR8/3～ 10YR8/4浅黄橙色	-	最大 5.4cm	-	-	表面に筋状の植物痕跡あり 炭化物付着
	325	第１調査区 井戸１	-	瓦	軒平瓦	やや密 凹面:３mm大の砂粒含む 凸面:２mm大の砂粒含む	堅緻	凹面: 7.5YR7/3にぶい橙色 凸面:N5/灰色 器肉:7.5Y7/1灰白色 5YR7/4にぶい橙色 (中心)	-	瓦当:2.2 平瓦部:2.25	-	瓦当面 7/10	凹凸面共に横ナデ 顎部底面横ナデ 顎部裏面にも面取りを施す 半截菊花唐草文
	326	第１調査区 溝37	-	銅製品	銭貨	-	-	-	外径 3.5	0.1	-	完形	宝永通宝
2012-5	327	調査区内	第12～13層	須恵器	坏蓋か	密 0.3mm以下の砂粒含む	堅緻	内面:10YR6/2灰黄褐色 外面:2.5Y6/2灰黄色 器肉:2.5Y6/2灰黄色	-	-	-	小片	横ナデ
	328	調査区内	第12～13層	土師器	椀か	やや密 0.5mm以下の砂粒含む	良好	内面:2.5Y7/2灰黄色 外面:10YR6/1褐灰色 器肉:2.5Y6/2灰黄色	-	-	-	口縁部小片	横ナデ
	329	調査区内	第12～13層	土師器	不明	やや密 0.5mm以下の砂粒含む	良好	内・外面・器肉: 10YR7/2にぶい黄橙色	(10.4)	0.5	-	1/11	横ナデ
	330	調査区内	第27～28層	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:N4/灰色 器肉:5Y7/1灰白色	(11.4)	0.25	-	口縁部 1/12	内外面横方向のミガキ 大和型Ⅲ期か
	331	調査区内	第27～28層	土師器	不明	やや密 0.5mm以下の砂粒含む	やや軟	内・外面:5B2/1青黒色 器肉:2.5Y8/1灰白色	(10.4)	0.5	-	小片	内外面横ナデ後横ミガキ
	332	調査区内	第27～28層	瓦器	椀	密	堅緻	内・外面:5G2/1緑黒色 器肉:2.5Y7/2灰黄色	-	0.5	-	体部のみ	内外面横方向のミガキ
	333	調査区内	第27～28層	瓦器	椀	やや密	堅緻	内・外面・器肉: N4/灰色	底径 (5.8)	-	-	底部小片	内面見込みにミガキ 楠葉・和泉Ⅱ期又は大和Ⅲ期あたりか
	334	調査区内	第27～28層	土師器	皿	密 １mm以下の砂粒含む	良好	内・外面・器肉: 2.5Y8/2灰白色	-	0.3	-	口縁部小片	摩耗・剥落著しく調整不明
	335	調査区内	第27～28層	瓦器	脚部	やや密 ２mm以下の砂粒多く含む	堅緻	内・外面: 10YR6/3にぶい黄橙色 器肉:2.5Y6/2灰黄色	底径 (19.8)	0.6	-	脚部1/12	内外面横ナデ

第４章　私部城と近畿の戦国期城館

中井　均

Ⅰ　はじめに

私部城は大阪府交野市私部に所在する戦国時代の城跡である。史料上では交野城、片野城、私部城と記されているが、現在周知の遺跡としては「私部城跡」として登録されており、これまでの発掘調査も、私部城跡として報告されていることより拙稿も、その名称に従うこととする。

さて、大阪府下では平野部に築かれた戦国時代の城館跡が、その後の開発によってほとんどが地上に痕跡を残していない。そうしたなかにあって私部城跡は曲輪、空堀がよく残された城跡であった。ところが近年城跡付近では住宅開発が進み、これまで保存状況が良好であった城跡自体も危機的な状況となっている。

そこで中心部分を保存し史跡指定を目的として発掘調査が実施されたのである。その結果は報告書で述べられている通りであるが、拙稿ではその成果をもとに私部城跡が近畿の戦国期城館でどのような位置付けができるのかについて分析をおこないたい。

Ⅱ　構造的特徴

構造

私部城跡は、段丘の先端に選地する平城である。その構造は主郭、二郭、三郭が空堀を隔てて連立する、連郭式縄張りとなっており、主郭には「城」、二郭には「天守」と呼ぶ小字が残されている。この三つの曲輪が中心となり、南方には本丸池と呼ばれる堀跡が残されており、この堀が城の南限と考えられる。北方には百々川が流れ、これが自然の堀の役目を果たしていた。さらに北方には免除川が流れ、両河川間は深田（湿田）となっており、やはり自然の防御施設となっていた。また、三郭の西側、現在の交野郵便局付近も微高地となっており、曲輪の痕跡と考えられ、ここが城の西端と考えられる。一方、東側も二郭のさらに東側に空堀を隔てて曲輪の痕跡が残り、ここが城の東端と考えられる。

なお、城の南東部に突出して光通寺が位置している。この光通寺に残された寛文４年（1664）の棟札に、「破光通之寺壁仏閣堕地勝境咸」とあり、光通寺が私部城主安見氏によって破却されたと記している。破却した後には私部城の一画に取り込まれた可能性がある。

信長の攻城戦

さて、私部城で註目できるのは、『信長公記』に登場することであろう。元亀元年（1570）の条に「高屋に畠山殿、若江に三好左京大夫、片野に安見右近、伊丹・塩河・茨木・高槻、何れも城々堅固に相抱へ」（10月20日条）と記されており、高屋城に畠山昭高が、若江城に三好義継が、私部城に安見右近が、さらに伊丹城、塩河城、茨木城、高槻城が織田信長方として堅固に構えられていたと記している。そして元亀３年（1573）には「去程に、三好左京大夫殿非儀を思食立ち、松永弾正・息右衛門佐父子と仰談らはれ、畠山殿に対し、既に鉾楯に及ばれ侯。安見新七郎居城交野へ差向け、松永弾正取出を申付け侯。其時の大将として、山口六郎四郎・奥田三川両人、勢衆三百ばかり取出に在城なり。信長公より、討果すべきの旨にて遣はさるゝ御人数、

佐久間右衛門・柴田修理亮・森三左衛門・坂井右近・蜂屋兵庫・斎藤新五・稲葉伊豫・氏家左京亮・伊賀伊賀守・不破河内・丸毛兵庫・多賀新左衛門此外、五畿内公方衆を相加へ、後詰として御人数

出され、取出を取巻き、しゝ垣結まはし置かれ侯処に、風雨の粉れに切抜け侯なり。三好左京大夫殿は若江に楯籠り、松永弾正は大和の内信貴の城に在城なり。息右衛門佐は奈良の多門に居城なり。」とある。三好義継が信長に背き、松永久秀とその息子久通と謀って、河内守護畠山昭高を攻め寄った。その際に安見新七郎の居城である私部城に対して、攻城戦用の付城としての取出を構えて城攻めをおこなったのである。この私部城攻めに対して織田信長はすぐさま松永勢を討つべく、佐久間信盛、柴田勝家らの家臣をはじめ、五畿内の将軍の奉公衆も加え、取出を取り巻く「しし垣」（鹿垣）を廻らせたという合戦が繰り広げられた。

さて、このように力攻めではなく、取出（付城）を築いたり、包囲網の鹿垣を築く攻城戦は元亀年間頃からの織田軍の恒常的な戦法となる。

ほぼ同じ頃に信長によって攻められた佐和山城（滋賀県彦根市）では、『信長公記』元亀元年七月朔日条に「七月朔日、佐和山へ御馬を竒せられ、取詰め、鹿垣結はせられ、東百々屋敷御取出仰付けられ、丹羽五郎左衛門置かれ、北の山に市橋九郎右衛門、南の山に水野下野、西彦根山に河尻与兵衛、四方より取詰めさせ、諸口の通路をとめ、」と記されている。浅井長政軍の磯野丹波守員昌が立て籠もる佐和山城を織田信長軍が攻めたときの状況である。佐和山城を鹿垣で囲い込み、四方に取出を構えて攻めており、私部城攻めの取出を攻めた状況とまったく同じ戦法である。この佐和山城攻めについては、四方の取出のうち東の百々屋敷の取出と、北の山の取出の遺構が残されており、『信長公記』の記述が信頼できることを物語っている。ただ鹿垣に関してはその痕跡は残されておらず、土塁ではなく、柵列であった可能性が高い。

この合戦後に信長が木下藤吉郎と樋口直房に宛てた書状には、「佐和山おさへの諸執（取）出之道具共、両人かたへ可預置侯、小谷表之普請之用ニすへく侯、」とあり、佐和山城攻めに用いた取出の用材を両人に預けるので、今度はそれを小谷城攻めの取出の普請に用いよと命じている。攻城戦のための取出の構築はいかに早く造るかが最大のポイントとなる。そのため鹿垣や取出構築に必要な用材は事前に準備されており、築くときにはそれらを持参して組み立てたもののようである。つまり鹿垣や取出は現代のプレハブ工法によって築かれたわけである。そして攻城戦が終了するとそれらは解体され、次の戦場に運ばれたのである。

私部城攻めの取出を囲う鹿垣や佐和山城攻めに築かれた鹿垣は、現在その痕跡を残していない。これは破壊されて残っていないのではなく、残らないような構築物であったと考えられる。それは柵列であり、2つの攻城戦で構えられた鹿垣とは、柵列を廻らせるものであった。

ところがその後の鹿垣は土塁へと変化するようである。例えば元亀元年から4年までの小谷城攻めで、同3年に信長は姉川南岸の横山城から、姉川を越え小谷城に相対する虎後前山に本陣を築く。この虎後前山について『信長公記』には「虎後前山より宮部迄路次一段あしく候。武者の出入のため、道のひろさ三間々中に高々とつかせられ、其へり敵の方に高さ一丈に五十町の間築地をつかせ、水を関入れ、往還たやすき様に仰付けらる。」（元亀3年（1572）8月8日条）と記している。深田で足元の悪いところに、信長は幅3間（約6m）もの軍用道路を築いたのである。この道路は小谷側に対しては高さ1丈（約3m）もの土塁を築き、敵に軍勢の移動を見られないようにしていた。さらに敵側には道路に沿って水堀まで掘られた。

同様の土塁は天正5年（1577）から8年にかけておこなわれた播磨三木城攻めでさらに巨大化する。毛利方に与した別所長治の立て籠もる三木城を攻めるために信長方は三木の周辺に30ヶ所以上に取出を築いて包囲した。特に毛利方からの物資が運び込まれる三木～魚住間の道路を封鎖する目的で幾重にも土塁が築かれた。この土塁を三木の多重土塁と呼んでいる。『播州征伐之事』には「依之為塞三木魚住通路。始君峯廻之付城五六十。其

透々立番屋。堀。柵。乱杭。坂茂木。表引荊棘裡浚堀。」と記されていたが、実際に発掘された二位谷奥付城跡の土塁では土塁の基底部に２条の溝が掘られていた。おそらくその溝間に礫が詰められていたものと考えられる。

さらに天正９年の鳥取城攻めでは鳥取城を包囲する土塁線はほぼ完成し、包囲網は土塁と付城によって鳥取城を囲い込んでいる。『信長公記』には「とつとりの東に、七・八町程隔て、並ぶ程の高山あり。羽柴筑前守彼山へ取上り、是より見下墨、則、此山を大将軍の居城に拵へ即時にとつとりを取りまかせ、頓て又、二ヶ所のつなぎの出城の間をも取切り、是又、鹿垣結ひまはしとり籠め、五・六、七・八町宛に、諸陣近々と取詰めさせ、堀をほつては尺（柵）を付け、又、堀をほつては塀を付け、築地高々とつかせ、透間なく二重・三重の矢蔵を上させ、人数時の面々等の居陣に、矢蔵を丈夫に構へさせ、後巻の用心に、後陣の方にも堀をほり、塀・尺を付け、馬を乗りまはし侯ても、射越の矢にあたらぬごとくに、まはれば二里が間、前後に築地高々とつかせ、其内に陣屋を町屋作りに作らせ、夜るは手前々々に篝火たかせ、白中のごとくにして、廻番丈夫に申付け、海上には警固舟を置き、浦々焼払ひ、丹後・但馬より海上を自由に舟にて兵粮届けさせ、此表一着の間は、幾年も在陣すべき用意生便敷次第なり」と記される。

また、翌10年から始まった備中高松城攻めでも同様である。一般的に高松城攻めは水攻めと呼ばれているが、基本的には土塁を構築して高松城を囲い込む攻城戦であった。

このように鹿垣と呼ばれていた包囲網は土塁へと変化する。それは柵列から土塁への進化であった。文献史料に登場する鹿垣は現地に遺存しておらず、おそらく柵列であったと思われるが、土塁の上にも柵が廻らされていたものと思われる。そうした柵や柵列間に構えられた井楼櫓の用材が常に準備されており、攻城戦が始まると組み立てられたわけである。

ではなぜ力攻めをせず、こうした時間と労力のかかる包囲網を構築したのであろうか。元亀の小谷城攻めでは、『信長公記』に「然りといへども、大谷（小谷）は高山節所の地に候間、一旦に攻上り候事なり難く思食され、」（元亀元年（1570）6月28日条）と、巨大な山城に力攻めは極めてリスクの高かったことを記している。このために包囲戦が選択されたわけで、それはできるだけリスクを避けるためであった。まさに自軍の損傷を出来る限り最小限に止めるための戦いであった。

織田・豊臣軍が多用した包囲網の初源が元亀の佐和山城攻めや、私部城の戦いで構えられた鹿垣であった。さらに私部城で註目されるのは、単なる攻城戦に用いられたのではなく、私部城を攻める松永軍の取出を攻めるために後詰として鹿垣を廻らせたという、二重の包囲網戦が繰り広げられたのであった。

ところで松永軍の取出はどのあたりに築かれたのであろうか。こうした臨時的な陣城については地元に伝承を残すところが少なく、松永軍の取出に関しても地元には伝承をまったく残しておらず、不明である。ただ、私部城の南方約700mに位置する私部南遺跡で検出された23-15溝は谷を背後にコの字状に廻るもので、幅は5.1m、深さ2.41mを測る。その断面はV字形の薬研堀で、溝の内側角度が50度、外側が40度となる。報告書では、「一度溝内に入ると上がることが非常に難しい斜度である。」と記している（註1）。遺物が出土しておらず、時代を限定するのはむつかしいが、大きくは中世の遺構であり、断面の形状から城館遺跡の空堀の可能性が高く、距離的には私部城の相城として築かれた取出の堀である可能性は高い。なお、この溝は埋土の堆積状況より内側から一気に埋められており、そうした行為からも臨時的な取出の堀の可能性が高い。

なお、私部南遺跡が松永方の取出となると、信長軍が包囲網として築いた鹿垣はさらにその外方を廻る長大な施設であったこととなる。

Ⅲ　私部城跡出土の瓦

私部城跡の発掘調査成果でもっとも註目されるのは瓦の出土である。織田・豊臣系城郭の特徴は石垣、瓦葺き、礎石建物という３つの要素が備わった城ということができる。戦国時代の城は軍事的な防御施設であり、山を切り盛りして築いた土の城であった。それが織田信長の小牧山城、岐阜城、安土城の築城によって革命的な変化を遂げたのである。戦うだけの城から、天下人の居城として見せる城へと大きく変化する。城は統一政権のシンボルとなったわけである。

しかし、一方で16世紀の初頭にはこうしたパーツを城に取り入れる地域も出現する。石垣については信濃の松本周辺、美濃、北近江、南近江、西播磨、東備前、北九州、そして三好長慶によって築かれた城などである。瓦に関しては畿内、備前、北部九州などで寺院の瓦を城郭に導入している。礎石建物については全国的に認められるものの天主（天守）に相当する施設は認められない。

そうした織田・豊臣系城郭の大きな特徴のひとつである瓦が私部城跡から出土したことは注目される。これは単に私部城跡の特徴というだけではなく、日本城郭史にとっても重要な問題である。ここでは織田信長の安土築城前後の近畿における城郭の瓦について概観しておきたい。

さて、まず最初に安土築城前後に築かれた城で、瓦が出土した城跡としては、河内［交野城跡、津田城跡、本丸山城跡、若江城跡、烏帽子形城跡、飯盛城跡］、摂津［有岡（伊丹）城跡、池田城跡、芥川山城跡、高槻城跡］、山城［田辺城跡、鹿背山城跡、勝龍寺城跡］、大和［多聞城跡、龍王山城跡、立野城跡、椿井城跡］、近江［坂本城跡、小谷城跡］、播磨［三木城跡、置塩城跡、御着城、豊地城跡、恒屋城跡］などがあり、全国的にも密集する地域であることがわかる。ここではそれらについて簡単に触れておきたい。

河内

・私部城跡（大阪府交野市私部）

私部城跡から出土する瓦については本報告に詳細に述べられているところであるが、その出土状況は本郭に集中しつつも城跡全域から出土しており、瓦当も出土していることより、城郭の建物の多くが本瓦葺きであったことを示している（註2）。軒平瓦の紋様からはこれらの瓦が16世紀中～後半に製作されたことが明らかにされている。吉田知史氏の分析によって私部城跡出土軒平瓦は、永禄５年（1562）銘瓦が出土した大坂本願寺（石山本願寺）の軒平瓦よりやや後出し、若江遺跡27次Ｃ地区堀３より出土した軒平瓦よりはやや古いものであることが確認されている。さらに北河内や摂津、奈良などの在来の瓦であることも明らかにされている。

こうしたことより、私部城跡から出土した瓦は織田信長の影響を受けたものではなく、在来の瓦を安見氏が居城に導入したことは明らかである。

・津田城跡（大阪府枚方市津田）

津田城は標高286.5mの国見山の山頂付近に、津田氏によって築かれた山城といわれている。昭和31年に津田町史編さんに伴い、城跡の最高地点を発掘したところ、地表下30cmに焼土層が広がっており、その下15cmで地山となり、その底部付近で瓦片と貿易陶磁の出土したことが報告されているが、詳細は不明。文献史からは、永禄11年（1568）に三好三人衆方であった津田城が松永久秀、三好義継方へ寝返り、義継が津田城に入城している。その後、信長を離反した久秀が元亀４年３月に津田城に入ったことがわかっており、津田城が久秀にとって重要な城であったことがわかる。

ただ、城跡と推定される場所は削り残したと見られる土塁状の高まりによって三方が囲まれてい

るが、背後に堀切も設けられておらず、戦国期の山城としては疑問も残り、ここが久秀の津田城とは断定できない。あるいは山岳寺院の可能性もあり、出土した遺物もそうした寺院に伴う可能性も視野に入れて検討すべきである。

・本丸山城跡（大阪府枚方市津田）

国見山の北西山麓に位置する本丸山に位置する城跡で、古くは津田正時が津田落城後に築いた城と伝えている。この本丸山はほぼ全域が発掘調査されており、戦国時代の堀や石組、丸瓦の暗渠、平瓦の暗渠、焼土塊などが検出されている。出土遺物には軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦などがあった。吉田知史氏の分析によれば、軒平瓦は勝龍寺城跡出土の軒平瓦に酷似しているが、本丸山城跡出土の軒平瓦がよりシャープとし、北河内に系譜が求められるとする。また、鬼瓦は宝珠文鬼瓦で、戦国期特有の鬼瓦とし、やはり勝龍寺城跡出土の宝珠紋鬼瓦より先行する瓦とした（註3）。

ところで本丸山城跡そのものの評価であるが、この城を私部城攻めの際に松永久秀が築いた相城のひとつではないかと考えられている。『多聞院日記』元亀3年（1572）4月29日条にある「一、昨夜ツタノ付城落居了云々、実否如何。」のツタ（津田）の付城が本丸山に想定されるのである（註4）。確かに松永氏が大和から河内に進出するには国見山を越えた場所ではある。ただ、本丸山城跡も戦国期の城郭としてはイレギュラーな構造を示しており、この遺跡自体を城館遺跡と断定することには疑問が残る。さらに相城にしては豊富な遺物が出土しており、その点も付城としては疑問が残る。

国見山の山頂部が城郭として疑問だとすることにより、この本丸山こそが津田城ではないかとする考えもある。

筆者は詰の山城として国見山に単郭の小規模な城を築き、その山麓に居館として築いたものが本丸山遺跡ではなかったかと想定している。本丸山もすべてを城館遺跡として扱うのではなく、屋敷地として階段状に平坦地を構えたものと考えられる。

いずれにせよ、出土した瓦は元亀2年以前のもので、安土城に先行する瓦と評価できるものである。

・若江城跡（大阪府東大阪市若江本町・若江北町・若江南町）

若江遺跡は弥生時代から戦国時代までの複合遺跡である。若江城跡もこの若江遺跡に含まれている。

さて、若江城は室町時代に河内守護を世襲する畠山氏の居城として築かれ、河内守護所となった城である。実質的には守護代遊佐氏によって築かれたものと考えられている。応仁の乱によって畠山義就は守護所を誉田屋形に移す。

永禄11年（1568）に上洛した織田信長は、三好三人衆に対立していた三好義継を河内北半国守護として若江城に入れ置いた。しかし義継は後に松永久秀とともに反信長方となったため、天正元年（1573）信長は佐久間信盛に命じて若江城を攻めさせた。若江城では若江三人衆が信長方に内応したため、義継は自刃し、城は落城した。その後若江城は若江三人衆によって支配される。

さらに信長は大坂本願寺攻めの前線基地として若江城に在陣している。本願寺との和解後、廃城となったようである。

城跡は地上に痕跡を一切残しておらず、城跡推定地付近ではこれまで100次近い発掘調査が実施され、中心部には幅5mを超える溝によって東西140m、南北150m規模の方形区画が確認されている。その溝から大量の瓦や土壁の下地、礎石が投棄された状態で出土しており、城割りによって破却されたものと考えられる。

出土した三巴文軒丸瓦は珠文が31を数え、巴は頭が接し、尾は長いという特徴を持つ（註5）。元亀2年（1571）の勝龍寺城跡の瓦に類似する。

宝珠文の鬼瓦は両側の周縁部に円形文を押しており、本丸山城跡出土鬼瓦に酷似する。こうした特徴より天正元年の信長本陣よりも古い様相を呈しており、三好義継段階の若江城に葺かれていた瓦と考えられる。

・烏帽子形城跡（大阪府河内長野市喜多）

烏帽子形城の初見は、文正元年（1466）に、畠山義就が河内金胎寺城に出陣し、押子形城に兵を向けたと記された『経覚私要鈔』である。その後、畠山義就系の基家、義央、義堯と、畠山政長系の尚順、稙長、高政が烏帽子形城の争奪戦を繰り広げる。

天正３年（1575）に織田信長は高屋城に三好康長を攻め落とすと、河内国内の破城をおこなうが、烏帽子形城は信長の配下となった畠山氏家臣の烏帽子形衆によって支配されていた。豊臣秀吉は天正11年（1583）に中村一氏を岸和田城主とし、翌12年には「同（８月）四日、河内国高屋城ノ奥、ゑほしがた（烏帽子形）と云古城普請、筑州より被仰付由にて、中孫平人数にてコサルヽニつきて、」（『宇野主水日記』天正12年８月４日条）とあるように、すでに廃城となっていた烏帽子形城を中村一氏が羽柴秀吉の命令によって普請している。これは烏帽子形城を紀州根来寺攻めの拠点として改修したものであった。

この烏帽子形城跡では昭和61年以来数次にわたる発掘調査が実施されており、主郭からは礎石建物が検出されるとともに、瓦が出土している。出土した瓦は14～16世紀に製作されたもので、14世紀の瓦は周辺の寺院瓦が転用されたものと考えられている。三巴文軒丸瓦は三巴文の外側に圏線を巡らせるもので、その外側には23個の珠文を配している。巴文は頭部が離れ、尾は圏線とは接していない。また、軒平瓦には波状文が認められる（註6）。こうした特徴より瓦は、永禄５年（1562）に畠山高政が三好長慶に敗れた後、天正12年（1584）の中村一氏による改修までの段階、特に三好三人衆による支配段階の可能性が高く、安土城に先行する瓦と考えられる。

・飯盛城跡（大阪府大東市北条・四条畷市南野）

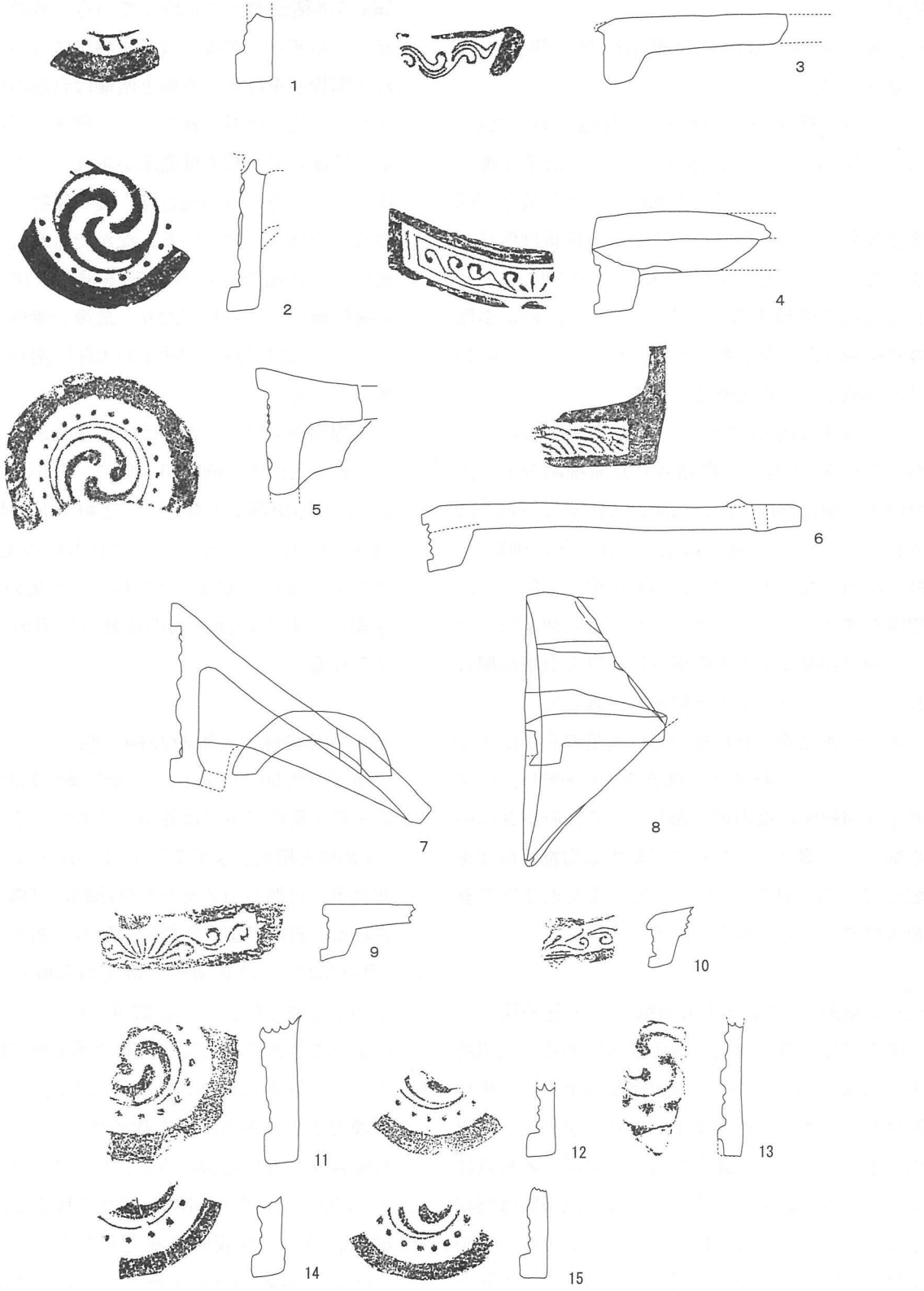
飯盛城は天文年間に畠山義堯が河内支配のために木沢長政に命じて築いた山城である。永禄３年（1560）に三好長慶が芥川山城より飯盛城に入り居城とするが、その４年後の永禄７年（1564）に城内で没した。

その後、三好義継や三好三人衆も飯盛城にいたようであるが、織田信長の上洛後は畠山昭高に与えられる。昭高が遊佐信教の反乱で討たれると、信長は飯盛城を攻め、天正４年（1576）頃に廃城となる。

現存する城郭遺構は永禄３年に入城した三好長慶によって築かれたものと考えられる。広大な山城は北方の防御空間（北城）と、南方の居住空間（南城）から構成されており、近年の分布調査によって北城の大部分が石垣によって構築されていたことが明らかとなっている。安土城に先行する石垣として、同じ三好長慶の居城である芥川山城とともに注目される。

1981年には南城の千畳敷と呼ばれる一画でラジオ局の中継無線基地造営に伴う発掘調査が実施され、かわらけ、瓦質土器、陶器などとともに瓦片が出土している。山城でかわらけが出土するのは山城に居住施設のあったことを雄弁に物語っている。飯盛城では長慶が水論調停をおこなったり、千句を詠んだりしており、山城が社会、文化の中心であったことがわかる。こうした住む山城はこれまでの戦う空間としての山城像を大きく覆す結果となった。

この飯盛城跡からは発掘調査で出土した瓦以外にも数点の瓦片が採集されている。小片の丸瓦片で、年代を決定するのはむつかしいが、コビキ痕はA手法であり、天正11年（1583）以前の瓦と見られ、まず三好長慶時代の瓦と見てよい。



1～4：交野城跡、5～6：烏帽子形城跡
7～8：有岡城（伊丹城）跡、9～15：池田城跡

第１図　近畿地方の戦国期城郭出土瓦（１）

摂津

・有岡（伊丹）城跡（兵庫県伊丹市伊丹・宮ノ前・中央）

伊丹城は摂津の国人伊丹氏の居城であったが、天正２年（1574）に織田信長によって摂津守護となった荒木村重が伊丹氏を滅ぼし、伊丹城を有岡城と改名して居城とした。その後、村重は信長を離反したため、信長は天正６年（1578）12月より有岡攻めを開始する。村重は11ヶ月におよぶ籠城戦を戦うが、内応者が出て、天正７年（1579）10月に落城し、その後廃城となる。

その遺構は地上にほとんど残されていなかったが、昭和50年度より開始された発掘調査と、江戸時代初期に作成された絵図から徐々に明らかにされつつある。その構造は段丘の縁辺部に選地し、段丘崖面となる東辺中央に本丸を配し、段丘上に惣構を構えている。また、これまでの数十次にわたる発掘調査によって惣構内にも巨大な堀が掘られ、城下町には武家地と町屋を区画していた。

本丸の西北隅の石垣裾からは大量の瓦が出土している。三巴文軒丸瓦は珠文を20個配し、巴文の尾は圏線状に次の尾に接している。軒平瓦は中心飾りを三葉とし、左右に三転する均整唐草文を配している（註7）。こうした瓦は天正２年の有岡城段階のものと考えられる。

・池田城跡（大阪府池田市城山町・建石町）

池田城は北摂の国人池田氏居城である。池田勝正は永禄11年（1568）に織田信長が上洛し、摂津進攻を開始すると織田傘下となり、伊丹氏、和田氏とともに摂津三守護となるが、家臣荒木村重によって追放されてしまう。その後、池田城は廃城となるが、天正６年（1578）から開始された有岡城攻めに際して、織田信長が「古池田」を本陣としたことが『信長公記』に見え、その「古池田」が池田城であったと考えられる。最終的な廃城は有岡落城後のことであろう。

城は五月山から南方へ張り出した標高35～55mの洪積台地上に立地している。城の西側には猪名川が流れ、背後には杉ヶ谷川によって形成された開析谷を控え、西側と南側は台地の崖面を利用し、東側には堀を廻らせて、惣構を形成している。城域の北西端の最高所が本丸で、これまで数次にわたる発掘が実施され、礎石建物、虎口、石垣などが検出されている。なかでも本丸の中央で検出された幅7m、深さ2.5mを測る大溝は礎石建物を破壊して造られており、最後の遺構であることより、織田信長の古池田の本陣に関わる遺構と考えられる。

発掘調査では、少量ではあるが瓦が出土している。軒平瓦は中心飾りが９葉で、下から２本目が３反転する唐草文となる。三巴軒丸瓦は数種類の型式が出土しているが、いずれも巴の尾は長く、次の尾と接して圏線状となるものも認められる（註8）。これらは池田氏の最終段階頃のものと考えられる。

・芥川山城跡（大阪府高槻市原）

標高182.6mの三好山の山頂に築かれた山城で、北・西・南の三方には芥川が流れている。

『瓦林正頼記』永正７年（1520）10月に「芥川ノ北ニ当リ可然大山ノ有ケルヲ城郭ニソ構へ」と記される、摂津の国人能勢氏の居城であった。天文２年（1533）には管領細川晴元が入城し、畿内政治の中心地となる。天文22年（1553）に三好長慶によって入れ置かれていた芥川孫十郎が謀反をおこすと、長慶は芥川山城の東方に位置する帯仕山に陣を敷き、芥川山城を攻め落とした。その後、長慶自身が芥川山城に入り、居城とする。永禄３年（1560）に長慶が河内飯盛城に移ると、芥川山城は息子の三好義興が城主となるが、永禄６年（1563）に義興が急死すると、三好長逸が城主となったようであるが、永禄11年（1568）に織田信長が摂津に進攻し、高槻の天神馬場に陣取り、芥川山城を攻め落とした。信長は摂津三守護和田惟政を城主とする。惟政は後に高槻城へ移ると、芥

川山城には家臣の高山友照を入れ置いた。元亀2年（1571）に惟政が白井河原の戦いで戦死すると、息子惟長が高槻城主となるが、これを機会と、高山友照・重友が惟長を追放して高槻城に入り、芥川山城は廃城となった。しかし、近年の発掘で17世紀前半の遺物が出土しており、高山氏は高槻城の支城として維持していた可能性がある。

城の構造は、三好山の山頂に本郭を配し、南尾根筋に階段状に曲輪を配置する。この本郭部と谷を隔てて、東側の頂部に出丸と呼ばれる曲輪群が構えられ、さらに堀切を隔てて東側に方形区画された曲輪群が構えられている。東端は自然の谷筋が入り、帯仕山と完全に分離されている。

本郭と出丸間の谷筋が大手であったと考えられ、谷筋の中腹には谷を塞き止めるように巨大な石垣が構えられている。また、出丸の帯曲輪にも石垣が認められ、要所は石垣によって構えられていたようである。

2次にわたる発掘調査のなかで、本郭の調査では礎石建物が検出されている。建物は束柱を伴っており、縁を廻らせた建物であり、山上に御殿的施設の存在していたことが明らかとなった。この建物から瓦は出土していない。

出丸の北側帯曲輪より三巴文軒丸瓦が1点採集されている。瓦は灰色を呈し、胎土は粗い。巴の尾は長く、次の尾に接して圏線状となる。珠文も密である（註9）。

・高槻城跡（大阪府高槻市城内町）

高槻城は三好長慶が芥川山城を居城としたときに支城として、入江氏が入れ置かれていた。

織田信長の摂津進攻後、摂津三守護のひとり和田惟政が芥川山城から高槻城を居城としたため、この頃より摂津支配の拠点的城郭として整備されたようである。惟政が白井河原の戦いで戦死すると、息子の惟長が城主となるが、芥川山城に居た高山友照、重友（右近）父子に追われ、高山父子が高槻城に入った。

豊臣政権下で、天正13年（1585）に高山重友が船上城に移されると、高槻は一時秀吉の直轄地となり、その後新庄直頼が城主となる。関ヶ原合戦後は徳川氏の直轄地となり、元和元年（1615）に内藤信正が入城すると近世城郭に大改修され、以後明治まで存続する。

その構造は本丸、二ノ丸を並立させて内堀で囲い込み、その外郭に三ノ丸を配置し、それらを外堀が囲むという輪郭式の縄張りであった。

本丸の発掘調査によって石垣の基底部下より梯子胴木と呼ばれる石垣構築の基礎が検出され、近世城郭の石垣構築技術が明らかにされた。また、三ノ丸の外堀からは杭列と横木からなる護岸施設が検出されるなど、近世城郭の普請について多くの成果が得られた調査であった。

出土した瓦では、丸瓦凹部に糸切によるコビキ痕が斜位につくコビキA手法と、コビキ痕が水平につくコビキB手法をはじめて報告されている（註10）。出土した大量の瓦はⅠ期からⅥ期に時期区分され、Ⅰ期の瓦は入江氏在城時代末期から高山右近在城時代とされている。三巴文軒丸瓦の特徴は、巴の頭が小さく、尾が長く全体として渦巻状を呈している。珠文は小さく、22個を数える。

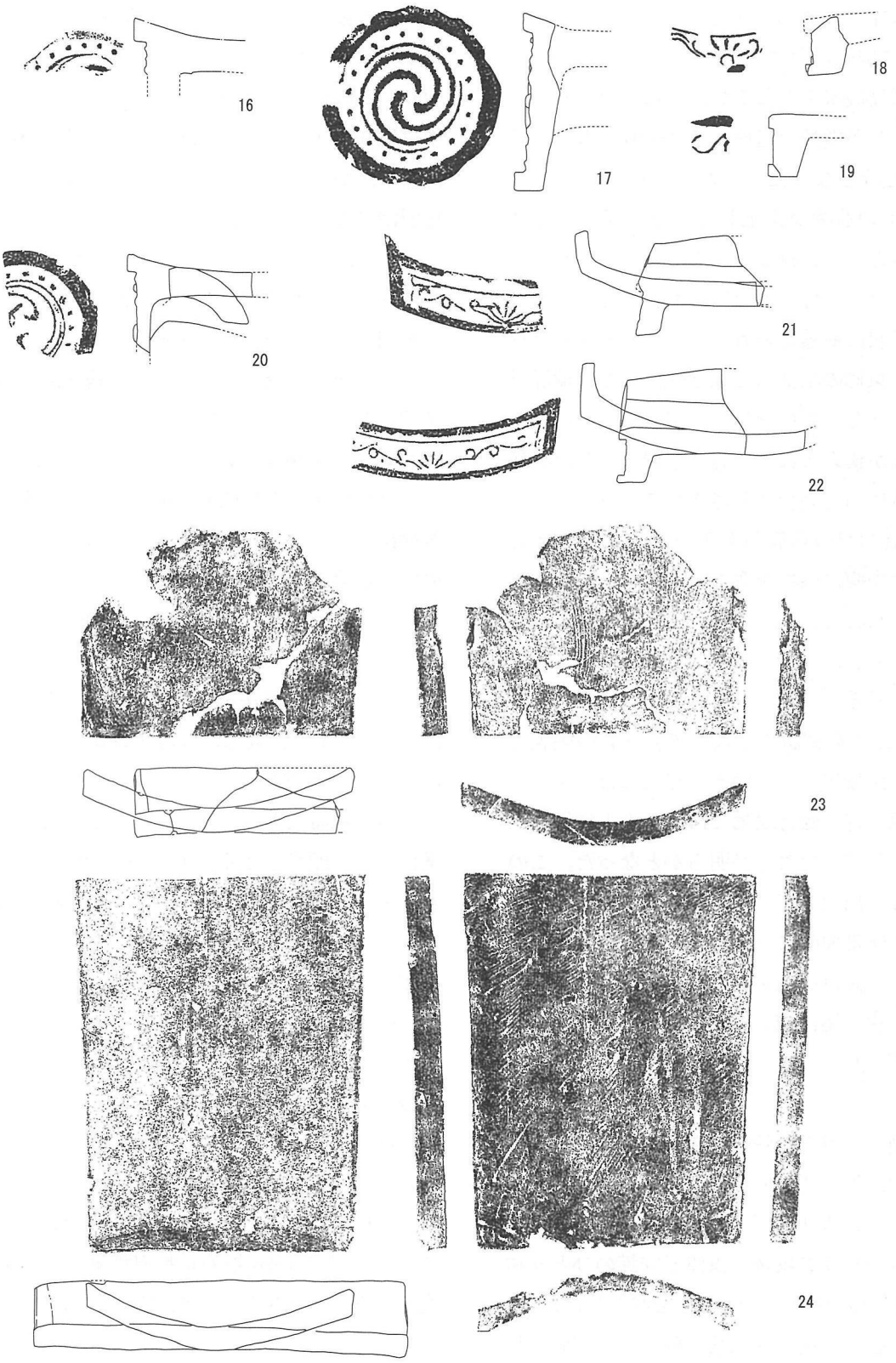
山城

・田辺城跡（京都府京田辺市田辺奥ノ城）

田辺城は、山城国一揆に登場する国人田辺氏の居城である。その築城年代などについては詳らかではない。

これまでに田辺町教育委員会、京都府埋蔵文化財調査研究センターによって発掘調査が実施されている。特に1996年の京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した調査では矢穴技法によって割られた花崗岩を用いた石垣が検出されている。この石垣は桝形虎口に用いられていた。出土した遺物からこうした虎口や石垣が15世紀後半のものであることが確認され、大きな話題を呼んだ。

出土した軒瓦は小振りで、築地等に使われたも



16：芥川山城跡、17～19：高槻城跡
20～22：田辺城跡、23～24：鹿背山城跡

0　20cm

第２図　近畿地方の戦国期城郭出土瓦（２）

のと想定されている。軒平瓦は区画線が残り、三巴文軒丸瓦は圏線が残るという特徴より、15 世紀後半の製作と考えられる（註 11）。

・鹿背山城跡（京都府木津川市鹿曲田）

鹿背山城跡は標高 141m の通称城山の山頂に選地しており、城跡からは眼下に木津川を望むことができる。

『大乗院寺社雑事記』には文明元年（1469）に興福寺六方の末寺である菩提院方分に鹿山の名が見え、同じく文明 11 年（1479）には一乗院の御祈願所として鹿山の名が、さらには成身院順宣が賀世山に出張したこともみえる。こうした記録より 15 世紀には寺院的施設が鹿背山にあったことがうかがえる。

文明 11 年（1479）には狛氏や成身院、佐川父子が大和中川寺に出陣したのに対して、木津執行が加世山に退いたと記されており、木津氏に関わる城郭的施設も存在していたことが知られる。

その後『多聞院日記』永禄 11 年（1568）に多聞院の手の者たちが三好三人衆に追われてカセ山へ逃げ込んだと記されている。15 世紀に興福寺によって構えられた城が、戦国時代には松永久秀による大和支配の北方防御の出城として大改修が加えられたものと考えられる。

その構造は南北約 300m、東西約 450m を測る巨大なもので、南山城最大の山城である。並列する 3 つの頂部を本郭と副郭とし、四方に派生する尾根上すべてを階段状に曲輪を配置しており、先端部には堀切が設けられている。本郭の西側尾根先端部と南端の副郭の周囲には畝状空堀群が巡らされている。

国史跡指定を目的して近年継続的に発掘調査がおこなわれている。その本郭から 15 世紀のものと考えられる平瓦が出土している（註 12）。

・勝龍寺城跡（京都府長岡京市勝竜寺）

室町時代には乙訓郡役所として機能していたと考えられる。元亀 2 年（1571）には織田信長より桂川以西の一職を任せられた細川藤孝によって改修されたものが現在残されている遺構と見られる。

発掘調査によって中心部分は石垣によって築かれていることが明らかとなり、桝形虎口も検出されている。また、大量の瓦が出土しており、石垣上の櫓や塀は瓦葺きの建物であったことがわかった。『東山殿御文庫記』に「殿主」で古今伝授のおこなわれたことが記されており、安土城に先行する天主の存在した城であることは特筆される。

出土した三巴文軒丸瓦は、巴の頭部が渦巻いて接しており、尾は長く次の巴の尾に接している。この軒丸瓦は坂本城跡、小丸城跡（福井県武生市）出土の三巴文軒丸瓦と同笵であることが確認されている。

また、軒平瓦は中心飾りが 5 葉となり、その顎部に半円形の圏線を設け、中心飾りは旭日のようであり、左右に四反転する唐草文が施されている。また、本丸山城跡や若江城跡からも出土している、宝珠文の鬼瓦も出土している（註 13）。

これらの瓦も元亀 2 年（1571）の細川藤孝による改修に用いられた瓦と見られ、坂本城跡出土瓦と同笵関係にあることより、織田信長配下の築城に同一工人が動員されたことを示すものと考えられる。

大和

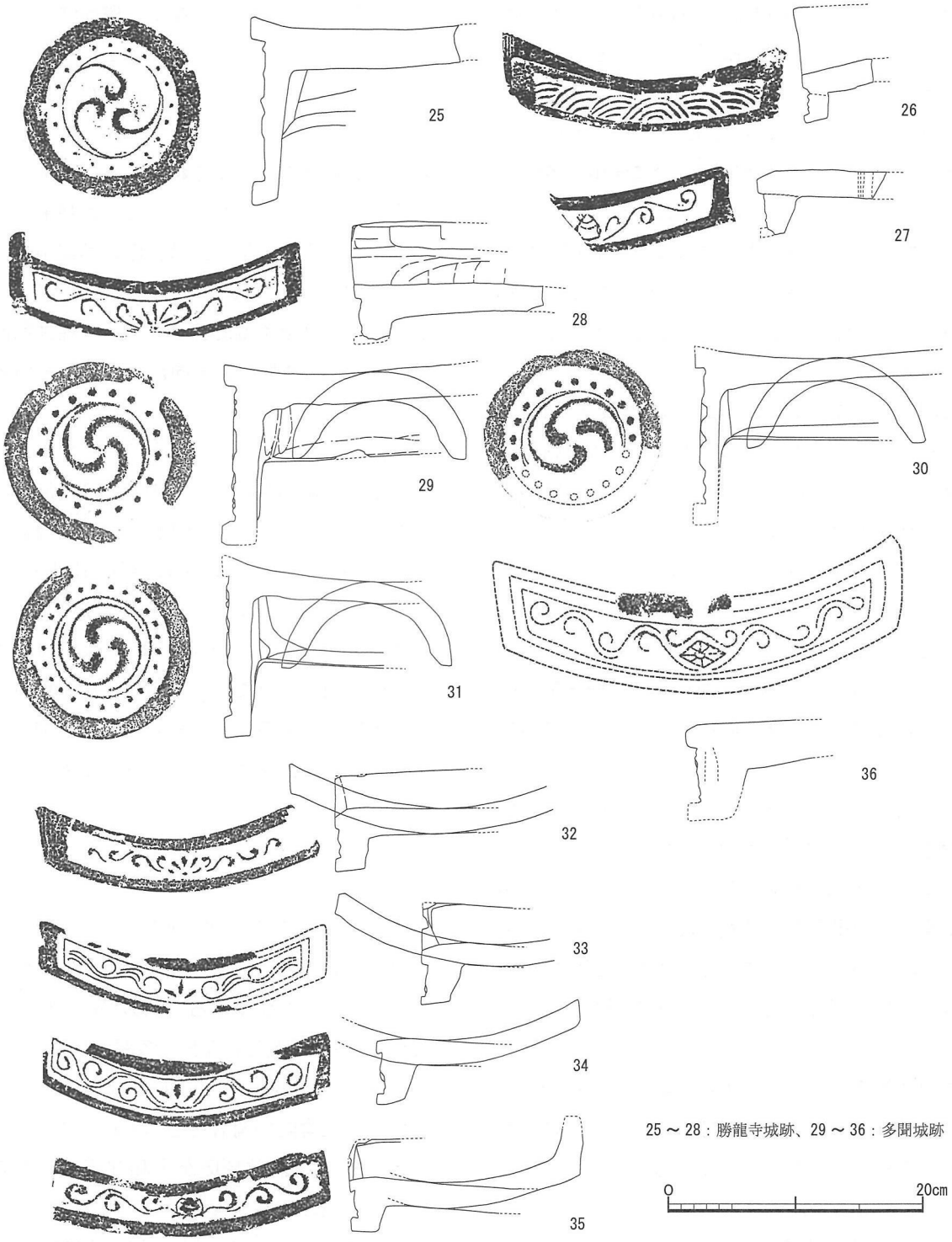
・多聞城跡（奈良市多門町）

多聞城は永禄 3 年（1560）に松永久秀がその居城として築いた城である。久秀が織田信長に叛いて信貴山城で降伏すると、多聞城には明智光秀、柴田勝家が入城し、天正 2 年（1574）には信長が入城し、正倉院の蘭奢待を切り取っている。天正 4 年（1576）に筒井順慶が大和守護に任じられると、多聞城は破却された。

奈良市街の北方に位置する標高 115m の小丘陵を利用して築かれた多聞城は破却されたうえに、

現在は中学校の校地となり、地形以外に城跡の遺構は認められない。ただ、宣教師の報告などから四重の建物をはじめ豪華な建物が建てられていたことが知られる。

また、発掘調査によって大量の瓦が出土している。なかでも特徴が捉えられる軒平瓦について、山川均氏は南都の寺院の瓦そのものを転用した可能性は低く、多聞城の瓦として専用に製作されたものとし、大和の新たな覇者、松永久秀が旧来の寺社権門下の瓦工組織を解体・吸収し、新たに編



第３図　近畿地方の戦国期城郭出土瓦（３）

成した組織によって製作したものであったと想定している（註14）

こうした瓦について、ルイズ・アルメイダは「家及び塔は予が嘗て見たる中の最も良き瓦の種々の形あり又二指の厚さありて真黒なるものを似て覆へり。此の如き瓦は一度葺けば四五百年も更新する必要なし。」と記している。

・龍王山城跡（奈良県天理市柳本町）

龍王山城跡は大和の代表的な戦国時代の山城である。現在の橿原市域に勢力を持つ国人十市氏の山の城として築かれた。永禄5年（1562）頃に十市氏は松永久秀方に降り、以後松永方の城となる。天正3年（1575）には久秀の嫡男久通と十市おなへが祝言をあげ、龍王山城は実質的には久通の居城となる。しかし、天正5年（1577）に久通は久秀とともに織田信長に対して謀反を起こし、信貴山城で自害した。その後信長の手によって取り壊された。

城は標高585.7mの龍王山の山頂に築かれた南城と、標高521m地点に築かれた北城からなる別城一郭タイプの構造となる。

南城では本郭の一段下の帯曲輪で発掘調査が実施され、礎石建物や庭園の遺構が見つかった。この調査で少量ではあるが瓦が出土している。瓦は丸瓦と平瓦しかなく、軒先瓦は認められない。瓦の詳細は不明であるが、コビキA手法が凹部に残り、年代的には松永氏時代のものと考えられる。

本瓦葺きの建物ではなく、板葺きか柿葺きの屋根の棟に用いられた瓦の可能性が高い。

・立野城（奈良県生駒郡三郷町立野）

立野城は、信貴山の南東部に位置している。ここは河内・大和の国境龍田越の要衝にあたる。周辺は大乗院方の国民である立野氏の本貫地であるが、立野城もその居城であったと考えられる。また、『大和志』には「信貴山城の子城が立野村に在る」とあり、松永久秀の信貴山城の南口を押える出城でもあった。

城は4つの曲輪群から構成されているが、いずれもが尾根上に構えられ、個々の独立性が極めて高い構造となっている。

1974年度と1980年度の2次にわたって発掘調査が実施され、D地区と呼ばれる北東部の曲輪からは2時期の建物跡が検出され、瓦が出土している。

出土した軒丸瓦は三巴文瓦、軒平瓦は中心飾りを宝珠文とする唐草文瓦であった（註15）。おそらく松永久秀によって築かれた立野城に葺かれたものと考えられる。

・椿井城跡（奈良県生駒郡平群町椿井・下垣内）

平群谷に構えられた椿井氏の居城である。戦国時代には嶋氏の居城だったようである。

城は矢田丘陵の南端、標高318mの山頂に構えられている。その構造は北城と南城からなる別城一郭タイプである。南城には石垣が認められることより、北城と南城には構築に時間差が存在するようである。

瓦は南城から表採されている。現在知られている瓦は丸瓦2点、平瓦2点のみで、軒先瓦は認められない。丸瓦の凹部にはコビキA痕が残る。

龍王山城と同様に本瓦葺きの建物ではなく、板葺きか柿葺きの屋根の棟に用いられた瓦の可能性が高い。

近江

・坂本城跡（滋賀県大津市下阪本）

永禄11年（1568）に上洛する織田信長は南近江の守護六角氏の観音寺城を落して、南近江を支配下に置く。さらに元亀2年（1571）には比叡山を焼き討ちし、そこで明智光秀によって築かれたのが坂本城である。

城は北国海道（西近江路）に面した琵琶湖岸に位置し、本丸は琵琶湖に突出し、内堀、中堀、外堀は琵琶湖と直結していたと考えられる。『兼見

卿記』には「城中天主作事以下悉披見也。驚目了。」とあり、安土城に先行して天主の存在していたことがうかがえる。また、小天主の存在も知られており、連立式の天主であった可能性が高い。
天正10年（1582）の本能寺の変後、秀吉軍に攻められ落城するが、直ちに丹羽長秀によって再建され、杉原家次、浅野長政が城主となるが、天正14年（1586）に大津城が築かれ、廃城となる。
城跡では数次の発掘調査がおこなわれている。なかでも本丸の一画に相当する湖岸の調査では焼土を挟んで2面の遺構面が検出されており、下層が明智光秀段階の、上層が丹羽長秀段階の遺構と見られる。

下層からは軒瓦に加え、鬼瓦や鯱瓦などを含む大量の瓦が出土している。Ⅱ類とされる三巴文軒丸瓦は、20個の珠文を配し、巴の頭は渦巻いて接している。また尾は長く次の尾と接している（註16）。このⅡ類は勝龍寺城跡出土瓦、小丸城跡出土瓦と同笵関係にある。特に元亀2年（1571）に織田配下として細川藤孝が築いた勝龍寺城跡との同笵は両城の瓦製作に同一の工人が動員されたことを示唆しており興味深い。坂本城でも天主が築かれ、瓦が葺かれているということは、この築城には織田信長の強い関与が認められる。あるいは技術的には信長の工人貸与、または信長主導による築城で、そこに光秀が配置されたことも考えられる。

・小谷城跡（滋賀県長浜市湖北町伊部）

小谷城は北近江の戦国大名浅井氏3代50年の居城で、戦国時代を代表する山城である。天正元年（1573）に織田信長軍に攻め落とされると、浅井氏の旧領は羽柴秀吉に与えられた。秀吉は天正3年（1575）に完成する長浜城に移るまで、少なくとも2年間は小谷城を居城としていた。

城の構造は大きく小谷山の山頂部に構えられた大嶽地区、中腹の尾根頂部に構えられた本丸・大広間地区、出丸として築かれた月所丸、福寿丸、山崎丸、金吾丸、出丸と、山麓の清水谷からなる。

さて、こうした小谷城の構造は浅井氏時代に築かれたものと考えられ、昭和45年度より実施された本丸、大広間の発掘調査でも16世紀後半の遺物が出土している。

瓦はこのときの調査で1点も出土しておらず、浅井氏段階では瓦葺き建物は存在しない。ところが山麓で実施された、ほ場整備の際に備前焼の大甕とともに多量の瓦が出土したとのことである。発掘調査は実施されておらず詳細は不明であるが、地元に三巴文軒丸瓦1点と、丸瓦3点、平瓦1点のみ保管されている。

三巴文は頭部が接して、尾が長い。珠文は12個残存しており、おそらく16個めぐっていたと考えられる。坂本城跡や勝龍寺城跡出土の軒丸瓦に似るが、ややシャープさに欠け、これらよりは後出するものと考えられ、羽柴秀吉が小谷城主の時代に葺かれた瓦と考えられる。丸瓦の凹部にはコビキA痕が残る（註17）。

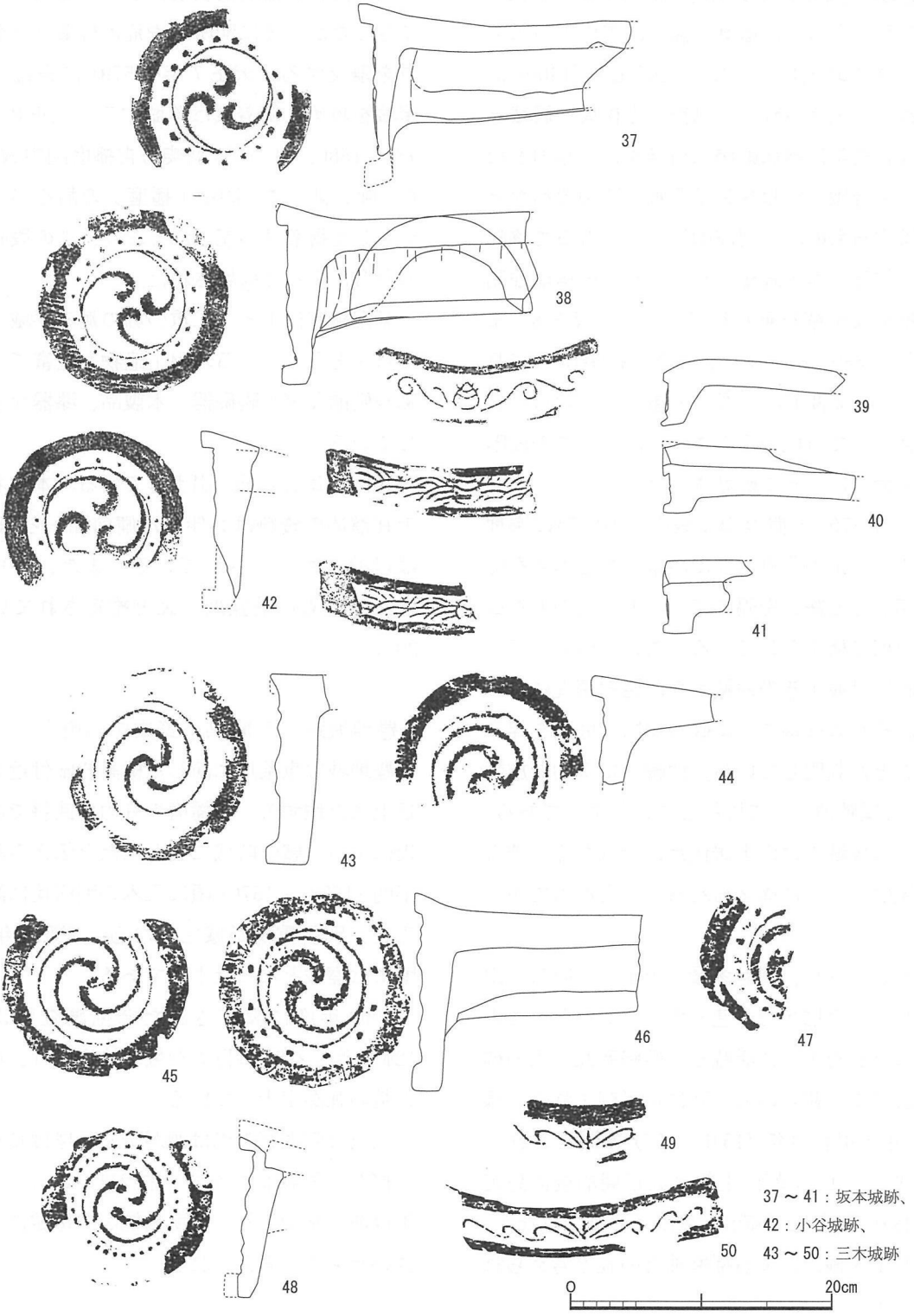
播磨

・三木城跡（兵庫県三木市上ノ丸町）

三木城の築城については詳らかではないが、別所則治によって築かれたとする説が有力である。以後別所氏の居城となり、永禄11年（1568）には織田信長の傘下となる。しかし天正6年（1578）に別所長治は信長方を離反し、毛利方となり、三木城に籠城する。これに対して信長軍は長大な包囲網を廻らせた攻城戦を繰り広げる。この戦いが有名な三木の干殺しである。

天正8年（1580）の落城後は城代が置かれていたが、天正13年（1585）に中川秀政が入城する。文禄3年（1594）に中川氏が豊後に移されると、豊臣氏の直轄地となり、城番が置かれた。慶長5年（1600）の関ヶ原合戦後は播磨は池田輝政領となり、三木城もその支城となり、伊木長門が城主として入れ置かれるが、元和の一国一城令で廃城となる。

城跡は舌状台地の先端に築かれているが、現在地上に痕跡は残していない。これまで数次にわたる発掘調査が実施され、瓦が出土している。田中幸夫氏によって、三木城跡出土瓦は４類に分類され、特に多く使われている軒丸瓦（１類）と、軒平瓦（３類）は当初基本として葺かれたものとされている。さらに近隣の寺院瓦との同笵、同文関係より、１、３類は弘治から永禄年間（1558～



第４図　近畿地方の戦国期城郭出土瓦（４）

1570）に生産されたものであり、別所氏時代の三木城に瓦葺きの建物の存在したことを想定されている（註18）。

・置塩城跡（兵庫県姫路市夢前町宮置・糸田）

応仁の乱によって、播磨、備前、美作の旧領を回復した赤松政則によって、文明元年（1469）に築城されたと伝えられる。以後、赤松氏の居城となる。天正初年に赤松則房は羽柴秀吉の与力となり、賤ヶ岳合戦、小牧長久手合戦、四国攻めなどにも参戦するものの、阿波国住吉へ一万石で移封される。信長、秀吉政権に与するが、則房は強制的に播磨の支配権を奪われてしまう。天正８、または９年（1580、81）の「羽柴秀吉播磨国中城割り覚」（一柳文書）に、国中（播磨）の割るべき城の覚えとして置塩城が記されており、この段階で秀吉の命令によって破城された。

城は標高370mの置塩山（城山）の山頂に選地している。山頂の北東端部に詰城となる本丸を配し、堀切となる鞍部を隔てて二の丸、三の丸も広大な山頂部に構えられている。この二の丸、三の丸とそれに付属する帯曲輪からは発掘調査によって、それぞれの曲輪ごとに礎石建物、庭園を伴っていることが判明している。曲輪は軍事的な施設ではなく、屋敷地として機能していたようである。つまり、置塩城では山上居住だけではなく、被官たちの屋敷も山上に構えられる、山上都市であった。

石垣も多用され、瓦も多量に出土している。出土鳥衾瓦にヘラ描きで「甚六作」とあった。この甚六とは英賀を中心に活躍した姫路系瓦工人の橘国次の息子で、甚六の名で瓦に銘が刻まれるのは天文18年～弘治３年（1549～57）の間とされている。また、Ⅰ-1郭出土瓦は天正期前後に想定されており、これらは織田、豊臣系の瓦ではなく、姫路系瓦工人橘氏による播磨独自の瓦と考えられる（註19）。

・御着城跡（兵庫県姫路市御国野町御着）

永正16年（1519）に赤松氏の一族である小寺政隆によって築かれたと伝えられる、小寺氏の居城である。

羽柴秀吉の播磨侵攻後、小寺政職は一時織田方に与したが、後に別所氏や荒木村重とともに織田方を離反する。天正７年（1579）に秀吉は播磨の諸城を攻め、御着城は落城する。天正８、または９年（1580、81）の「羽柴秀吉播磨国中城割り覚」（一柳文書）に、国中（播磨）の割るべき城の覚えとして御着城が記されており、この段階で秀吉の命令によって破城された。

発掘調査によって二重の堀の廻る平城の構造が明らかとなっている。出土遺物も豊富で、貿易陶磁や備前などの陶磁器、木製品、漆器などが出土している。

また、瓦も大量に出土している。本丸北トレンチ瓦溜めの資料は共伴した備前焼から15世紀半ば以前のものとされている。また、井戸１上層の瓦は御着城最盛期の瓦と推定されている（註20）。

・豊地城跡（兵庫県小野市中谷町）

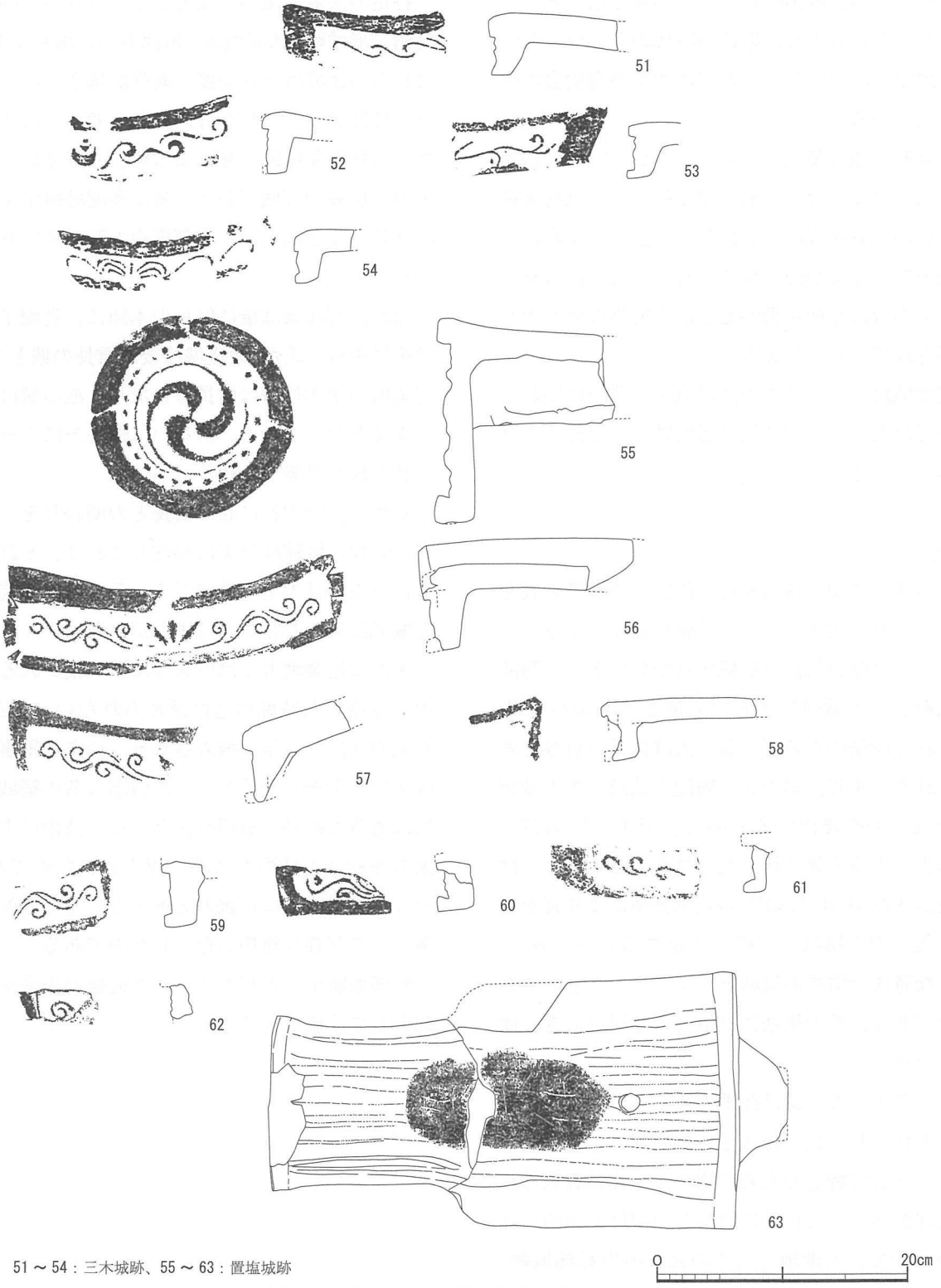
豊地城は東条川に面した標高68m付近の河岸段丘上に立地する。東播磨の有力な武将である依藤氏によって戦国時代に築かれたと伝えられ、永禄年間（1558～1570）頃に三木の別所氏に滅ぼされると、別所重棟が城主となる。天正８年（1580）頃には廃城となったようである。

2009年度に実施された発掘調査により、幅12m、深さ2.5mの巨大な堀が検出され、堀内より大量の瓦が出土している。

三巴文軒丸瓦の巴は頭が接し、尾は長く次の尾に接し、圏線状をなす（註21）。これらは天正８年以前の瓦であり、別所重棟が豊地城に入城して葺いたものと考えられる。

・恒屋城跡（兵庫県姫路市香寺町恒屋）

恒屋城は赤松氏の被官恒屋氏の居城であるが、築城年代については詳らかではない。城は標高236mの常居山に築かれている。その構造は北端の最高峰に構えられた後城と、南端に構えられた前城という別城一郭タイプとなる。いずれも階段状に曲輪を配するが、両城ともに西側斜面に畝状竪堀群を構える。山麓には、お屋敷、姫屋敷と呼



51～54：三木城跡、55～63：置塩城跡

第５図　近畿地方の戦国期城郭出土瓦（５）

ばれる居館が残る。

この恒屋城跡からは軒丸瓦、鳥衾、軒平瓦、鬼瓦が採集されている。通路部分より採集されていることより、塀や城門に葺かれていたものと考えられる。以前は戦国時代に瓦は存在しないという前提で、これらの瓦は姫路藩時代のものではないかと想定されていた。現在瓦は北恒屋自治会に所蔵されている。

軒丸瓦は銀杏葉文とされているが、家紋の銀杏には当てはまらない。最も似る紋としては抱茗荷紋に近い。軒平瓦は中心飾りが三巴で、左右に四反転飛び唐草文が配されている。鬼瓦には舌を出した亀の背に小槌を乗せるという特異な姿が中心に配されている（註22）。

置塩城跡と同じくこの瓦は織田、豊臣に関わるものではなく、戦国時代に播磨独自で発達する瓦と考えられる。

考察

このように安土城に先行、併行する城郭の瓦を分析すると、大きく二つの系譜が見えてくる。

ひとつは織田信長と関係する城郭である。勝龍寺城跡、坂本城跡出土瓦は元亀２年（1571）に築城された段階のもので、瓦工人は信長の貸与と考えられる。小谷城跡の瓦も勝龍寺城跡、坂本城跡出土瓦にやや後出するもので、天正元年（1573）の秀吉による再建に伴う瓦と見られる。これらは信長が永禄10年（1567）の岐阜築城により瓦を用いた後、安土築城までの間に収まるものであり、大きな意味で信長の築城として捉えることのできる城であり、その築城には信長の意思が大きく働いていた。

今、ひとつの系譜は在地の瓦であるが、ここには先進地として瓦が導入された城郭と、先進地であるとともに特定の大名に関わって瓦が導入された城郭がある。これらは信長との関係が認められないもので、先進地としての瓦は河内私部城跡、津田城跡、本丸山城跡、摂津有岡城跡、池田城跡、高槻城跡、山城田辺城跡、鹿背山城跡、大和椿井城跡、播磨三木城跡、置塩城跡、御着城跡、豊地城跡、恒屋城跡である。これらは大和や播磨の瓦工が関わったものである。

特定の大名に関わる城としては、河内若江城跡、烏帽子形城跡、飯盛城跡、摂津芥川山城跡である。これらの諸城は三好長慶、義継が城主となっており、長慶が城郭に瓦を導入したと考えられる。また、大和多聞城跡、龍王山城跡、立野城跡は松永久秀の居城や支城であり、特に多聞城跡出土瓦には寺院の瓦とは違い、城郭専用の瓦が用いられている。

なお、若江城は後に信長の本陣に、烏帽子形城は後に中村一氏が、飯盛城は後に信長の城となり、有岡城の荒木村重は信長方となり、池田城は信長の本陣となっている。あるいは信長方になってから葺かれた可能性も残る。

しかし、いずれにせよ信長との関わりを一切見いだせない城跡は確実に存在しており、それらは古代以来の瓦の生産地に近く、そうした寺院の瓦を城郭に導入したことはまちがいない。

確かに近畿地方では巨大な山城は築かれるものの、発達した城郭構造は認められない。しかし、石垣や瓦はいち早く導入される。つまり軍事的には武田氏や後北条氏といった戦国大名の築城技術には劣るものの、石垣や瓦といった技術は古代以来の寺社造営技術が城郭に導入されたのである。そうした意味では近畿の先進地としての城郭の特徴として瓦葺き建物が存在したのである。

私部城跡出土の瓦もこうした近畿の先進地の城郭として評価できる。

Ⅳ　おわりに

さて、拙稿では私部城跡を構造と攻城戦からと、出土した瓦から分析を試みた。とりわけ安土城に先行する瓦に焦点をあてて、広く近畿地方の瓦が出土した城館跡を集成して分析した。その結果、私部城は安土城に先行して瓦を城に導入した、先進地の城郭であることが明らかにできた。

構造面では、大阪府においては平地に残る極めて貴重な城跡であることが改めて確認できた。しかし、一方では城跡付近にまで開発がおよんでおり、危機的な状況となっている。今後、国史跡に指定され、末永く保存されることが望まれる。大阪府では河内長野市で烏帽子形城跡が実に79年ぶりに中世城館跡として国史跡に指定されている。私部城跡がそれに続くことを望みたい。

註

1.（財）大阪府文化財センター 2011『私部南遺跡Ⅲ 有池遺跡・上私部遺跡・上の山遺跡』
　なお、交野南遺跡からこの堀跡が検出されていることは、交野市教育委員会の吉田知史氏からご教示を得た。
2. 小川暢子 1995『私部城跡 －発掘調査概要報告書1-』交野市教育委員会
3. 吉田知史 2014「大阪府枚方市津田城（本丸山城）」『城郭談話会30周年特別例会「一人一城」レジメ集』城郭談話会
4. 馬部隆弘 2004「津田城－付、本丸山城」『図説近畿中世城郭事典』城郭談話会
5. 東大阪市立郷土博物館 2005『なぞの城 －発掘調査からみた若江城－』
6. 太田宏明他 2011『河内長野市指定史跡烏帽子形城跡総合調査報告書』河内長野市教育委員会
7. 鈴木充他 1977『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ』伊丹市文化財保存協会
8. 田上雅則 1991『池田城跡 －主郭部発掘調査概要報告2-』池田市教育委員会
9. 橋本久和 1994「Ⅴ 芥川山城跡」『嶋上遺跡群18』高槻市教育委員会
10. 森田克行 1984『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
11. 石尾政信 1996「田辺城跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第62号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
12. 中島正 2010「鹿背山城跡第1・2次発掘調査概報」『木津川市内遺跡発掘調査概報Ⅱ』木津川市教育委員会
13. 岩崎誠他 1991『勝龍寺城発掘調査報告』（財）長岡京市埋蔵文化財センター
14. 山川均 1996「城郭瓦の創製とその展開に関する覚書」『織豊城郭』第3号 織豊期城郭 研究会
15. 中村博司 2014「安土築城以前の瓦」『中世城館の考古学』高志書院
16. 吉水眞彦 2008『坂本城跡発掘調査報告書』大津市教育委員会
17. 中井均 1994「小谷城跡出土の瓦について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
18. 田中幸夫 1994「三木城出土瓦について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
19. 山上雅弘他 2006『播磨置塩城跡発掘調査報告書』夢前町教育委員会
20. 秋枝芳他 1981『御着城跡発掘調査概報』姫路市教育委員会
21. 兵庫県立考古博物館 2010『ひょうごの遺跡』75号
22. 伊丹市立博物館 1979『第10回特別展 荒木村重と伊丹城』

第５章　文献史料からみた私部城

小谷　利明

Ⅰ　室町・戦国期の私部郷

１、私部城の築城時期

私部城が文献に現れるのは、元亀元年（1570）のことである。永禄11年（1568）織田信長が足利義昭を伴って上洛し、室町幕府を再興してから2年後のことである。私部城主は安見右近允（丞）（以後、安見右近と略す）と言い、この翌年、松永久秀の命で奈良市中の西新屋で切腹し、それに続いて久秀は右近の居城であった私部城を攻めた。右近の城は、「片野」（史料102、105）「カタノ」（史料106・109）と呼ばれ、或いは「キサイヘノ城」（史料112）とも呼ばれた。交野は広域地名であり、私部は一村落を指す言葉である（馬部09）。ここでは、限定された地域名称である私部城で統一して叙述する。

私部城の築城時期については、私部城主安見右近周辺の史料から三説が提示されている。片山長三氏の南北朝期説（片山63）、中西裕樹氏の織田信長上洛以前説（中西04）、馬部隆弘氏の織田信長上洛後説（馬部09）の三説である。片山説は、私部城主安見氏について近世に成立した「安見氏系譜」から復元したものである。それによれば、安見氏は南北朝期に南朝方の安見清賢、清儀が出て、交野郷軍39士の１人として数えられる活躍をし、私部城もこの時期に築城されたという。また、戦国期には安見美作守直政が河内一国を支配する権力となり、三好長慶と対立し、交野以外の地を失った。その後、信長上洛後の石山合戦では、信長方として活動するが、私部城で病没したとする。片山説は長く通説を守った。しかし、弓倉弘年氏が戦国期の安見氏発給文書を検討し、安見美作守の実名は宗房であり、直政ではないことや、安見氏の存在は戦国期以前の史料にはみられず、その出自は明確ではないことを指摘した（弓倉06）。これに加え拙稿は、安見宗房は、鷹山弘頼とともに遊佐長教から山城上三郡守護代職を得て登場することから大和の鷹山氏との関係が重要であることを指摘した（小谷03）。片山説は、私部城主安見右近と安見美作守を混同し、近世に作成された系図を利用するなど今日の研究レベルから見ると、大いに問題のある議論であった。

弓倉氏及び拙稿が公表された後に、私部城築城期を説明したのが中西氏と馬部氏の研究であった。中西説は、信長上洛前に飯盛城将として活躍した安見宗房との関係を考慮して信長上洛前から私部城の存在を推測したものである。馬部説は、安見右近の本拠は星田であることを根拠に、私部を掌握したのは信長上洛以後とした。

以上、築城時期については、確実な築城史料がないため、いずれも推測の域を出ていなかった。しかし、発掘調査成果から永禄期以降（1558～1570）ごろの築城と考えられている。永禄期は、守護畠山高政から三好長慶の支配へと大きく変化した時であり、長慶死後、三好三人衆と松永久秀が争い、更には織田信長の上洛により畿内の秩序が大幅に変わった激動期でもある。直ちに、築城主体を考えることは難しいため、ここでは、私部地域の歴史的特質を紹介し、永禄期の北河内の状況を展望し、私部城が文献に登場する歴史を叙述したい。

２、室町期の石清水八幡宮と私部郷の在地領主大塚兵衛

私部城の具体的な検討に入る前に、中世における交野地域の特質について説明しておきたい。交野地域で成立した庄園のなかで最も古いものは、石清水八幡宮領の交野郡三宅山である。その初見は延久４年（1072）９月５日付太政官牒（史料１）である。この文書は、延久の荘園整理令に際して出された文書で、石清水八幡宮領庄園全34箇所に対して21箇所が安堵され、13箇所が収公された。この内、三宅山は安堵された庄園のひとつであった。三宅山は、山1400町、御倉町并舘院等内地６町、免田23町という広大なもので、山の領有は、同文書が引用する延喜17年（917）12月21日付の交野郡司解状によれば、交野郡前擬大領であった守部平麻呂、同廣道らが太政官符を得て領有したものであった。また免田については、同上文書が引用する天暦４年（950）３月20日付の河内国司解状が石清水八幡宮三宅御山司佃20町正税を宮雑事に宛用いることを認めたとされ、この時点で三宅山が石清水八幡宮領であったこともわかる。三宅山は、交野郡三宅郷に由来する地名で、交野市の南東部の丘陵すべてが入るという。また、山地中に残る傍示の地名は、三宅山の傍示と考えられている（『大阪府の地名』平凡社）。この理解によれば、少なくとも私部村の丘陵部もこれに入ることになる。この庄園は、保元３年（1158）12月３日付の官宣旨（史料３）にも存在が確認できる。

次に私部の南に位置する星田には、興福寺円成院領星田庄があった。その初見は、保元元年（1156）10月13日付の播磨守平清盛書状である（史料２）。これによると、星田庄は「故院御時」の御沙汰では「御牧」内ではなかったとする内容で、鳥羽院政期（1129～1156）に立庄されたと見られる。その後、鳥羽院の寵妃美福門院領御祈祷所となり、円成院の仏聖料所となった（史料４）。ところが、文中元年（1372）９月16日付長慶天皇綸旨によって大交野庄内星田郷国衙分が石清水八幡宮毎日御供料所として寄進され（史料６）、以後、星田国衙分は石清水八幡宮領となる。この大交野庄は、当初、興福寺円成院領で、天福元年（1233）５月日付石清水八幡宮所司等言上状では、石清水八幡宮領として登場してくる（史料５）。大交野庄と星田庄との関係はよくわからないが、興福寺円成院領から石清水八幡宮領へと石清水八幡宮支配が伸長したことをたどることができる。

以上、三宅山を中心に石清水八幡宮領が拡大したことを見てきた。再び、私部に戻ると、永享５（1433）年８月15日付石清水八幡宮駕輿丁前床神人交名に「下私部」の地名があり、ここから４人の人物が神人となっていたことが記されている（史料７）。三宅山と「下私部」との関連が想定されよう。

また、私部郷には朝廷・幕府と結び付いた臨済宗東福寺派光通寺の存在がある。光通寺の開山は別峰大殊（1321～1402）で、赤松円心（1277～1350）と深いかかわりがあり、後村上天皇（在位1339～1368）から円光国師の号を賜った人物である。別峰は、大和興聖寺、伊勢清水寺、播磨臨済寺、備中定林寺、河内光通寺、紀伊西光寺を創建し、応永９年（1402）に河内光通寺で没した（『大日本史料』応永９年８月２日条）。光通寺はその後も勅願所として機能しており（史料９）、また、応永18年（1411）には、足利義持により将軍家祈祷寺になった（史料８）。石清水八幡宮とは別の宗教権力が私部で成長したのである。

この二つの宗教勢力の下で在地勢力による石清水八幡宮への反領主闘争が行われたことを示唆する事件が起こる。永正15（1518）年４月22日付室町幕府奉行人連署奉書では、石清水八幡宮造営要脚として交野郡内に1000貫文を懸け、また用木を伐採するため人を遣わしたところ、私部郷地下人が承引せず、社家使と争った（史料10）。また、大永８（1528）年８月11日付室町幕府奉行人奉

書によれば、石清水八幡宮と光通寺が対立していることがわかる（史料12）。そこには「去々年以来衆僧悪行に依り、寺家并びに神領亡所となすと云々」とあり、光通寺の僧により石清水八幡宮領が押領されたとする。

ここで注意を要するのは、光通寺という勅願所を維持するためには、有力な檀越を想定しなければならない。そして有力な檀越らが、石清水八幡宮支配から自立しようとしたことが上記した事件につながった可能性がある。それでは、私部郷の在地領主は誰に想定できるだろうか。その答えを考えるに当たって、重要だと思われるのが大永5（1525）年7月4日付室町幕府奉行人連署奉書である。これによれば、石清水八幡宮は、遷宮のために「河州交野大塚兵衛」に対して要脚3000貫文が宛てられている（史料11）。この賦課に対して大塚は、200貫文を支出すると主張したが石清水八幡宮は納得せず、幕府奉行人連署奉書を以て細川高国及び河内守護代遊佐順盛に催促をさせている。個人に対して3000貫文もの銭が賦課されたことは、大塚が交野の在地領主として大きな力を持っていたと推測できる。前記した永正15年の造営要脚では交野郡全体で1000貫文が賦課されたのに対して、個人宛で3倍もの賦課が懸ったことになる。1貫文＝1石とすれば、大塚は3000石も支出を命じられたことになる。軍役で見ると、150人程度の軍事動員ができる領主と言える。しかも、豊臣蔵入り地段階の私部村の村高が1017石余ほどの石高である。年貢は、その3割から4割ぐらいだろうから、とんでもない賦課が懸ったといえよう。いずれにしても、3000貫文の賦課から見て、大塚兵衛は交野庄全体を統括できるほどの在地領主と判断できよう。大永8年の光通寺と石清水八幡宮との対立は、大塚兵部への賦課から3年後のことであり、この事件と連続していると見られる。

後記するが、永禄11（1568）年2月5日付篠原長房賦は、鷹山藤寿に対して私部郷内の鷹山知行闕所分を書き上げている（史料96）。それには「大塚分、南分、源左衛門尉分、道宗分、坂長分、地下分」とあり、前述した大塚氏を筆頭に何人かの侍衆と地下分を鷹山氏が支配していたことがわかる。彼らはある段階で鷹山氏の被官となったため、このような記述となったと思われる。鷹山氏が私部に入ったのは比較的新しい。それ以前は、石清水八幡宮の神領支配を受けながら、石清水八幡宮被官であった大塚氏を中心に私部郷の秩序が成り立っていたと考えられる。やがて、大塚らは、石清水八幡宮支配から脱するために武家権力の下で自立したと見られる。後記する交野一揆の構成員の中心は彼等だろう。

3、牧・交野一揆と鷹山弘頼

私部城築城の意義のひとつは、北河内に築城された城であることである。元々、河内で守護所が置かれた場所は、鎌倉末に丹南、南北朝期に古市、応仁の乱前後に古市・若江、応仁の乱後の誉田・正覚寺、16世紀初頭に高屋など、ほとんどが南河内にあり、例外は中河内の若江だけである（小谷03）。当然ながら、それ以外にも城郭はあるが、一時的に活用される城であり、恒常的に武家権力が地域支配をするための城ではなかった。しかし、享禄4年（1531）に木沢長政が飯盛城を築城すると天文5年（1536）には畠山在氏の守護所となり、守護による地域支配の拠点のひとつとして北河内が重要な位置を占めるようになった。これは、鎌倉時代以来、河内の国衙系武士が南河内を中心に編成されており、南北朝から室町期の守護がこれら武士との主従関係を結ぶことで統治しようとしたからである。特に北河内は河内十七ケ所など広大な幕府御料所があり、守護支配が貫徹できない地域であった。飯盛城が織田信長上洛後にいつしかその機能を失ったのに対して、私部城は北河内の中心城郭に成長する。北河内で、例外的に守護内衆として活躍したのが、牧郷の野尻氏であった。

野尻氏は牧郷の犬田城で活躍するなど、戦国末までこの地域で重要な役割を果たした。牧郷と私部を含む交野地域は、連動しながら展開していった。牧・交野一揆への関心は重要である（馬部 09）。ここでは、まず、私部地域が河内のなかで重要な地位を占めるようになった時期から説明していきたい。

前述したように北河内が政治的中心地のひとつになったのは、木沢長政の飯盛城の築城からである。木沢長政は、義就系守護畠山在氏の守護代として、また、京都で覇権を得た細川晴元の内衆として幕府内でも大いに力を発揮した人物であった。また、長政は大和守護とも言われた。しかし、木沢長政は、幕府内部の対立に敗れ、天文 11（1542）年 3 月 17 日に河内太平寺の戦いで戦死してしまう（史料 16）。これを討ったのは、紀伊に本拠を置いていた政長系守護畠山稙長や高屋城にいた遊佐長教及び山城・摂津勢などの武士を組織した細川晴元勢などであった（史料 13・14）。この時、牧・交野一揆が活動した兆候がある。南山城の狛孫一は、「牧・交野」に対して軍事動員を行った（史料 15）。木沢長政が築いた北河内の地域支配は、南山城の国衆と牧・交野一揆を結び付けた可能性がある。

天文 11 年の太平寺の戦いで木沢長政は戦死したが、まだ飯盛城には畠山在氏が健在で、飯盛城は落ちていなかった。このため、河内に復帰した畠山稙長は、同じく木沢方だった和泉の松浦氏攻めと飯盛城攻めを同時に立案する。和泉には、稙長自身が出馬し、飯盛城には大和勢を宛てた。大和勢の中心は筒井順昭と中坊駿河守であり、また、別に鷹山弘頼が交野に出陣して飯盛を攻める段取りになっていた（史料 17）。鷹山弘頼が陣を敷いた交野とは、地理的関係や前述した篠原長房賦から見て私部を指すと考える。鷹山は、傍示越で私部とつながっており、隣接しているのである。弘頼の私部在陣とその後の飯盛城攻めは、私部が河内の政治史に登場する最初の出来事と言えよう。

ここで、筒井氏と鷹山氏について簡単に説明しておこう。筒井氏は応仁の乱の畠山政長の時代から大和の大将として同盟関係にある間柄である。鷹山も筒井氏同様、官符衆徒と呼ばれる大和武士団を率いる武士のひとりだったが、この時、河内守護代遊佐長教の誘いに乗って畠山家中に入り、その立場を大きく変えた人物である（史料 13）。天文 13 年には、鷹山弘頼は河内勢 300 人余を引率して大和で活動するなど、河内で軍事動員権を持つ権力に成長している（史料 21）。弘頼が動員できた河内の武士はどの地域の武士だったのであろうか。前述したように、鷹山氏は私部郷に所領を持っていたことがわかっており、このため、交野郡内から 300 人の兵を動員できたと考えるべきだろう。牧郷には 500 人の武士を動員できる野尻治部がいた（史料 22）。野尻氏は、応永 16 年（1409）から畠山内衆として活躍していることが確認できる者で、畠山氏の分裂後は、一貫して政長流畠山氏に属した。本拠は、牧郷と考えられる（小谷 03）。野尻治部が盛んに活動していることがわかるのは、木沢長政の死後であるため、飯盛城を築いた義就流の畠山在氏守護代木沢長政の活動によって野尻治部の活動は制限されていたと思われる。長政の死後、牧・交野一揆への軍事指揮権は野尻と鷹山が担った。このため、牧・交野一揆に対する軍事指揮権は、狛孫一から野尻治部と鷹山弘頼へと移ったとみるべきであろう。

天文 14（1545）5 月 16 日に畠山稙長が病没すると、河内守護代遊佐長教の全盛となり、天文 15 年 8 月以降、長教は細川氏綱を旗頭に幕府と戦いはじめる。弘頼は、天文 15 年の芥川城の三好長慶との戦いで、畠山氏の主力として戦っており、極めて重要な地位にあった（史料 23 ～ 26）。このころ、弘頼は安見宗房とともに山城上三郡守護代職を遊佐長教から宛行われ、南山城、北大和、北河内を支配する権力に成長した（史料 19・20）。天文 17（1548）年 5 月 10 日、遊佐長教と三好長慶が同盟し、以後、両者は幕府に叛き、畿

内を支配する権力へと成長していく。そのなかで、鷹山以下の役割も大きく変わっていくことになる。

4、鷹山弘頼と安見宗房の対立

天文20（1551）年5月5日、河内守護代遊佐長教が暗殺された（史料27）。これによって、河内は、下郡代で飯盛城にいる安見宗房と、上郡代で高屋城にいる萱振賢継が覇権を争うようになる。いつの間に安見宗房は、下郡代で飯盛城将としての地位を得たのであろうか。天文10年代までは宗房よりも弘頼の活動の方が記録に多く登場しており、北河内の軍事指揮権は弘頼に任されていたと見られる。しかし、山城上三郡守護代職は共同で得ており、弘頼を中心に宗房が補佐する体制が出来ていたと考えられる。このため、弘頼も飯盛城将として飯盛城にいたが、いつしかふたりの関係は逆転したものと考えるのが妥当だろう。畠山在氏が籠った飯盛城攻めは、天文12年1月まで継続し、この時に落城しているから（史料18）、これ以後、ふたりは飯盛城将であった可能性が考えられよう。一方、高屋城内には、萱振賢継をはじめ、牧郷の領主野尻治部、中小路、丹下など主だった畠山内衆が居住していた。飯盛城は、木沢の乱後に新たに取り立てられた勢力が入る城と位置づけられたのであろう。

天文21年2月10日、安見宗房は大事件を起こす。宗房は萱振賢継を飯盛城に招待し、そこで賢継を殺害してから高屋城に乗り込み、萱振と同心した者を打ち殺す惨劇を起こしたのである（史料28・29）。宗房と賢継は、遊佐長教後の河内支配をどちらが把握するかで対立していた。特に目立つのは、長教後の遊佐家督を誰にするかであった。宗房は、遊佐太藤を河内守護代に推し、上郡代の萱振賢継は、根来寺の松坊（杉坊か、長教弟）を推した。両者の対立は抜き差しならないものになっていた。しかし、安見の息子を萱振に婿入りさせ、両者は表面上、和睦したかに見えたが、宗房の陰謀でこのように決着したのである（史料29）。また、北河内最大の戦国領主野尻治部は、半死半生の状態で逃げている。その後、野尻は牢人として招堤寺内に入った（小谷03）。これに対して宗房は、自身の嫡男に野尻氏の名跡を継がせ、野尻満五郎と名乗らせ牧郷を掌握した（史料41～44）。併せて安見自身、高屋城衆まで動員できるまでの権力となり（史料30）、京都においても一定の力を保持する権力となった（史料32）。天文22年7月から8月に起きた細川晴元による蜂起で、三好長慶の居城芥川城を預かる芥川孫十郎が晴元と同調した事件が起こる。京都に迫った晴元は、将軍足利義藤（義輝）と和し、長慶を追い詰めた。この時、長慶を応援し、京都攻めや芥川攻めを行ったのが安見宗房であった。彼は三好長慶との同盟関係を重視し、河内勢を使って縦横無尽の活躍をしたのである（史料37～39）。

さて、萱振一派粛清後の河内の体制維持のため、天文21年9月には畠山高政が守護に擁立される（史料31）。この擁立は、畠山氏の守護家の家臣丹下盛知によって実現した。鷹山弘頼は、この時、畠山高政方として行動していたようで、畠山家中は、畠山高政派と遊佐太藤・安見宗房派に分裂した。天文21年のものと思われる10月17日付の鷹山弘頼宛ての畠山高政書状は、安見宗房と鷹山弘頼が対立したことを示す内容で、しばらくは弘頼に在庄することを促している（史料33）。弘頼の在庄とは、本拠である鷹山だったのか、河内の本拠といえる私部だったのか知りたいところだが、よくわからない。但し、後の息子藤政の活動を見ると、この在庄は私部の可能性が高い。その後、鷹山弘頼は、天文22年閏1月頃、高屋城に入城した兆候がある。十河一存は、弘頼の音信を受けて「幾重も高屋御入城之儀肝要存候」とあり、弘頼の入城が予定されていたことを示す内容の書状を書いている（史料34）。しかし、翌天文22(1553)年5月4日、弘頼は高屋城で自刃した（史

料 35・36)。天文 23 年と思われる正月 25 日付丹下盛知宛畠山高政書状には、「鷹山の事、太藤今に憤るの由、誠に笑止の儀に候」とあり、鷹山氏に対して太藤の憤りが収まらないことを伝えている。太藤は、鷹山氏家督継承についても尋ねているが、高政は軍役を果たせば知行は安堵することを明言している（史料 40)。

弘頼の息子鷹山藤政の活動が見え始めるのが弘治２年（1556）６月からである。大和国の万歳と布施が対立し、安見宗房は万歳を支援するために大和に出陣した（史料 45 ～ 47)。この時､藤政は、「河内ヨリハウシヲ焼払」とあり、河内から挙兵して傍示を攻めている。傍示は、私部と鷹山の中間に位置する村である。藤政の挙兵は、畠山尚誠とともに行動を起こしたもので、反安見・反畠山の行動であった。これには筒井氏も同調した。藤政の挙兵は、私部から傍示に向かったと推測できる。このことから父弘頼の死後、藤政は、私部を本拠に活動していたと判断される。

なお、その後、鷹山藤政の動向はよくわからない。恐らくは、私部、鷹山ともに安見宗房によって没収されたと考えるべきだろう。永禄２(1559) 年６月、三好長慶は、安見宗房を討つため、河内攻めを行った。大和では松永久秀が筒井藤勝（順慶）の筒井平城と鷹山を攻めている（史料 55 ～ 59)。藤勝は、前年に安見宗房を仲介として遊佐太藤の聟となり、畠山氏に帰参していた（史料 48 ～ 53)。鷹山は宗房領であったのであろう。この時、鷹山は焼き討ちされた。高山八幡宮本殿は元亀３年（1572）の棟札があり、この時の焼失により再建されたのかもしれない。

小括

ここで簡単にまとめておこう。私部郷は、石清水八幡宮の支配を受ける地域であったが、相当な課役賦課を受け、在地領主大塚兵衛らは経済的圧迫を受けていた。光通寺と石清水八幡宮との対立もこのような背景があったと考えられる。

北河内の武士を軍事編成した最初の人物は木沢長政であろう。木沢の乱の時、牧・交野一揆を指揮したのは南山城の狛氏で、その後、鷹山氏と野尻氏がそれを継承した。木沢段階で私部を含む交野は、武家領化したと考える。「牧・交野一揆」と史料に出てくるのは、このためである。

更に、鷹山弘頼は畠山家中に入り、飯盛城攻めや芥川城攻めの主力となり、私部郷を知行した。弘頼は大塚氏をはじめ、主だった交野庄の侍層を押さえ、畿内の戦乱の中心的勢力として活動しはじめたのである。私部城の前身となる鷹山氏の居館がこの時期造られたものと考えられる。

鷹山弘頼は、安見宗房とともに飯盛城将として活動するが、萱振賢継粛清後は、高屋城将として畠山高政を護る立場となった。しかし、安見宗房や遊佐太藤との対立に敗れ、高屋城で自刃した。その後、息子の鷹山藤政は私部を本拠として活動した。

Ⅱ　安見右近と私部城

1、安見右近の登場

三好長慶は、永禄2（1559）年6月と永禄3年6月に河内に出兵し（史料62～65）、永禄3年10月24日には飯盛城が、27日には高屋城が長慶に明け渡された。そして、長慶が飯盛城に、長慶弟実休が高屋城に入った。これに対して畠山高政や安見宗房は、永禄5年2月から軍事行動を開始し（史料70・71）、3月5日には和泉久米田寺の合戦で三好実休を戦死させ（史料72・73）、高屋城を押さえた。すると安見宗房らは飯盛城攻めを開始する。また、摂津衆などを引き連れた三好義興らが、5月20日の河内教興寺の戦いで畠山方の湯川直光を戦死させ、飯盛城攻めていた畠山勢は総退却となった（史料74～76）。この時、安見宗房は、大坂に逃げ、息子の野尻孫（満）五郎は、鷹山谷へ退いたとする史料がある。

このように、畠山氏の河内支配が三好氏によって奪われる頃、安見右近の姿が見えるようになる。それは、本願寺蓮如末子実従が残した日記『私心記』に登場する（史料60・61・66・68・69）。実従は永禄2年11月30日に大坂本願寺から河内枚方順興寺に移住した。右近の動静がわかるのは、その後からである。永禄2年12月20日条では、安見が枚方寺内の家を差し押さえようとしている（史料60）。これを従来、安見右近と解釈している（草野04、鍛代08、馬部09）。この時期は、まだ河内は畠山氏の支配下にある。また、翌年1月3日条では、安見与助が枚方に宿を持っていることが判明する（史料61）。与助は右近の同族と考えられる。

永禄3年10月、河内は三好氏の手に落ちた。三好長慶が飯盛城主となり、河内北半国を支配した。ところが翌年の永禄4年1月17日条には安見右近が星田に居ることがわかる。右近は、星田を支配していたのである（史料66・史料98）。また、畠山高政及び安見宗房没落後も右近は健在であった。恐らく、三好氏の被官になった可能性があろう。飯盛城の周辺の領主は、三箇島の三箇氏や飯盛城の東に位置する田原氏など三好長慶の被官となった河内の在地領主がいる。右近もそのひとりと考えたい。

2、天下再興の戦い

永禄8（1565）年5月19日、将軍足利義輝が、三好三人衆や松永久秀らによって殺害された（史料79）。その前年三好長慶は病没し、後継の三好義継を擁しての強行であった。これにより、反三好方は活気づき、畠山方は各地の大名に出陣を要請しはじめるのが、6月段階からで、「天下御再興」を促している（史料80・81）。8月には丹波で、松永久秀の弟内藤宗勝が自刃し、10月には大和方面では安見右近や筒井藤勝も活動を開始する（史料82）。11月15日には、三好三人衆が飯盛城を攻め、三好義継を奪う（史料83）。義継は、この時数え15歳であるから、どれだけ主体的な行動であったかわからない。これ以後、松永久秀と三好三人衆との関係は完全に断たれた。

この年のものと思われる12月18日付松永久秀宛遊佐教（信教）書状に、「安見右近允の儀、先書申し候如く、長々召し置かれ候、」とあり、遊佐信教と松永久秀の同盟が成立していたことがわかる。そしてこの同盟の要として安見右近を長々召し置いてくださいと書いているのである（史料84）。右近は、一旦、三好被官となったが、将軍暗殺を機に筒井藤勝らと連携して大和で蜂起し、これを見た遊佐教は、安見右近を松永久秀に与えて、天下再興の戦いを始めようとしたのであろう。以後、右近は久秀方として活動する（史料85）。

三好三人衆と松永久秀の戦いは、当初、三人衆方が圧倒的に有利であったが、永禄10年2月16

日に入ると、三好義継が松永久秀と同心する（史料86・87）。そして、久秀は義継を伴い、信貴山城に入り（史料88）、続いて多聞山城に入った。これにより三人衆方が奈良に結集し、遂に東大寺大仏殿炎上となるのである（史料89）。

この頃になると、8月23日には飯盛城の松山安芸守が久秀方に寝返った（史料90）。しかし、翌9月6日には三人衆方が飯盛城を取り戻している（史料91）。更に、10月22日には、飯盛城のすぐ東に当たる田原の坂上氏が久秀方に裏返ったため、久秀は多聞山から飯盛城に500人を入れている（史料93）。また、永禄11年1月には河内の津田、南山城の田辺も久秀方となり、「河内通路これなし」といった状態であった（史料94）。これに乗じて三好義継は、多聞山城から河内津田城に入城している（史料95）。久秀方は、信貴山城や多聞山城などを本拠に南山城や北河内地域を一部掌握できる状態が生じたのである。さて、右近の活動だが、永禄10年9月10日に、大和で筒井方の井戸勢と戦い負傷している（史料92）。右近は久秀の近く、大和方面で戦っているようである。

一方、前述したように、永禄11年2月5日付篠原長房賦がこの時期発給されている（史料96）。これは、鷹山藤政の後継と思われる鷹山藤寿の訴訟によって出された古文書である。交野郡私部郷の内、鷹山氏が支配していた大塚分らの土地が没収されていたため、あらためて篠原長房が藤寿に与えたもので、忠功を励むことを命じている。松永久秀が飯盛城・津田城・田原城を掌握しかけていた時期であり、私部城はそのなかで孤立していたと考えられる。このため、藤寿に私部郷を与えて北河内の状況を変えることが目的であったと見られる。この後、信長が上洛した時、飯盛城は三人衆方の城であるため、藤寿らは再び飯盛城を奪還したと見られる。

３、織田信長の上洛と私部城の登場

永禄11年9月26日、織田信長が足利義昭を伴って上洛した（『大日本史料』永禄11年9月26日条）。これにより、三好三人衆方は悉く没落し、畠山高政・秋高親子、三好義継、松永久秀や、三人衆方であった摂津池田氏などが義昭に帰参した。この時期の畿内の武士は、将軍足利義昭の幕府に結集したのであり、織田信長と被官関係を結んだのではない。

この時、畠山高政は高屋城に入り、三好義継は、飯盛城に入っている（史料97）。義継が若江にいることは、松永久秀が永禄13年正月に若江に礼に向かったことから判明する（史料100）ので、それ以前に義継は、飯盛城から若江城に移った模様である。これ以後、飯盛城は史料から姿を消す。北河内で軍事的に重要な城郭は津田城と私部城になり、政庁的な城は中河内の若江城に移動したことになる。

元亀元（1570）年4月、織田信長は上洛命令に従わない朝倉義景を討伐するため、越前に侵入した。この時、浅井長政が裏切ったため、信長は辛くも京都に引き上げた。6月28日、信長は、近江姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍を破るが、三好三人衆が摂津野田・福島で挙兵すると、信長は8月30日、将軍足利義昭を引き連れて三人衆攻めを始める。しかし、9月12日、野田・福島にごく近い大坂本願寺の顕如も挙兵した。しかも、浅井・朝倉軍は北近江から山科・醍醐まで進出したため、9月23日信長は京都に帰り、近江への軍を差し向けた。信長はこれ以後信長包囲網の中で苦しむことになる。

さて、この時期の京都からみて南方勢力には、「南方三好三人衆の事、野田・福島の普請を改め、諸牢人、河内・摂津国端々へ打ち廻し致すと雖も、高屋に畠山殿、若江に三好左京大夫、片野に安見右近、伊丹、塩河・茨木・高槻、何れも城々堅固に相拘へ」（史料101）とあり、三好三人衆と大

坂本願寺勢力に対して、畠山秋高をはじめとする勢力を書き上げている。このなかにはじめて片野を本拠とする安見右近が登場するのである。河内では、守護クラスである畠山秋高や三好義継と安見右近の名前が併記されるのは、河内の中で私部城の安見右近が一定の統治権を持つ武将となっていたためであろう。更に、右近は、信長上洛以前の畿内での天下再興の戦いの中心人物のひとりであり、このためこのような処遇を受け、畠山・三好とならぶ武家として安見右近の名が挙がったものと思われる。

しかし、元亀2（1571）年5月11日、安見右近は松永久秀によって「西新屋小屋」で切腹した（史料102）。西新屋とは、元興寺極楽坊西側に当たるため、奈良市中で自刃したことになる。この時、松永久秀は、国衆に出陣命令を出したが、どこへの出陣が知らせず、この日、右近が自刃したのである。

この事件をどのように評価すべきだろうか。ひとつは、右近についてである。安見右近は、わざわざ私部から久秀に命じられて奈良市中に来て自刃した。これは、右近がこの段階でも松永久秀の被官であったと見られる。遊佐教が久秀に右近を召し置かせてから、右近は久秀の被官として活動しなければならない立場だったと見られる。

自刃理由は、右近が和田惟政や畠山秋高らと申し合わせて敵になる企てがあったため、腹を切らせたとある。これを見ると、和田惟政と畠山秋高に対して松永久秀は対立関係に入ったことがわかる。久秀は、自刃後の右近の城私部城を攻めた後、三好三人衆とともに高屋城攻めを行っている。松永久秀はこれ以後も度々信長を裏切ることになるが、その最初の行為が安見右近の自刃事件だったのである。

右近は、単身で奈良に来たわけではなく、右近の家臣は奈良不退寺に陣取っていた。これに対して久秀方の菊川衆が対陣していた（史料104）。その後、松永方は、私部城を攻めている（史料105～110）。しかし、私部城は堅固で落城しなかった。

翌元亀3年4月16日以前、久秀は、再び私部城攻めを始める。この時、城将として名前が挙がるのが安見新七郎である（史料115）。この時、久秀は、私部城攻めのため、私部に相城を造ったが織田勢に囲まれ、4月16日には相城から撤退している（史料112・113）。また、久秀は「ツタノ付城」も4月29日には落城しているので、私部城と津田城は連動して戦いが行われていたことがわかる（史料114）。この時期、若江城の三好義継も松永久秀と同心して本願寺方として戦っており、織田勢をはじめとする軍勢が私部城を護った。松永久秀・織田信長ともに私部城は軍事戦略上重要な城であったことがわかる。

4、私部城の最後

私部城の廃城時期については、具体的に文献に現れるわけではない。馬部氏によれば、私部城が最後に見えるのは『信長公記』天正6（1578）年10月1日条で堺の港で九鬼水軍の大船を見た信長が、住吉から「安見新七郎所」に暫く休息してから京都に上った史料を紹介している（史料116）。若江城のように天正8年8月2日の石山合戦終結で破城しており、私部城もこの時に破城したと考えられる。

なお、安見新七郎自身は、天正9年2月28日の京都での正親町天王の叡覧の下の馬揃では、河内の取次者として新七郎の名前があるため（史料117）、河内で健在であったと見られるが、その後については、具体的にはわからない。近世では、安見氏は上杉家を頼ったらしく、直江兼続の配下に安見氏がおり、兼続の娘に本多正信の次男政重が婿入りした時に、政重の家臣に安見氏が加わっている。その後、政重は会津を出て加賀前田家に帰参して家老となった時も、安見氏は同道している（藩老本多蔵品館の展示史料による）。

小括

Ⅱをまとめたい。永禄３年の三好長慶による河内支配以後、安見右近は三好に臣従したのか星田に拠点を据えていた。しかし、永禄８年の松永久秀・三好三人衆らによる将軍足利義輝の暗殺により、安見右近は畿内で最も早く軍事行動を起こした武将のひとりとなる。その後、三好三人衆と松永久秀による対立が先鋭化して両者による戦争が始まった。遊佐教は松永久秀と組んで、安見右近を久秀に預けた。一方、私部郷の旧領主だった鷹山氏は藤寿の代で、私部郷を得ている。

永禄11年、織田信長が上洛を果たすと、私部城は安見右近の城として位置づけられる。しかし、右近は久秀被官であり、久秀の威光に反した右近は、奈良で自刃する。その後、私部城は安見新七郎が守るが、石山合戦後に破城したと考える。

まとめ

私部城が築城された時期は、文献史学から明確にはできなかったが、いくつかの点は明らかにできたと思われる。

ひとつは、交野が武家領となったのは、木沢長政の時代であるということである。

二つ目は、鷹山弘頼が私部に居館を構えたと考えられ、私部城の前身の居館を想定する必要がある。その後の鷹山藤政、鷹山藤寿も私部を拠点に活動した兆候がある一方、安見宗房や息子野尻満五郎も私部を押さえていた時期もあり、この時期に私部城が造られた可能性は残しておきたい。

三つ目は、安見右近の評価である。私部城主となった安見右近は、元々、星田の領主から私部城に移ったと見られるが、これは松永久秀の力に拠るところが大きいだろう。右近が河内のなかで飛びぬけた存在になったのは、信長上洛以前に畿内の戦争に深く関わり、大いに活躍したためである。

四つ目は、私部城は、当初、松永方の城として位置づけられる側面があったことである。また、北河内の玄関口としても重要な城であり、南山城、北大和、北河内を繋ぐ重要な役割を果たす城として畿内の政治史に位置づける必要がある。

参考文献

交野市教育委員会　『私部城跡発掘調査概要報告書』Ⅰ　１９９５年
交野市文化財事業団編　『光通寺』　交野市教育委員会・交野市文化財事業団１９９５年
片山長三　『交野町史』　交野町役場　１９６３年
鍛代敏雄　「枚方寺内町の構成と機能」（『戦国期の石清水と本願寺』　法蔵館　２００８年
草野顕之　「一家衆の地域的役割―順興寺と枚方寺内町を中心に―」
（『戦国期本願寺教団史の研究』　法蔵館　２００４年
小谷利明　『畿内戦国期守護と地域社会』　清文堂出版　２００３年
小谷利明　「畠山稙長の動向―永正から天文期の畿内―」
（矢田俊文編『戦国期の権力と文書』）　高志書院　２００４年
小谷利明　「畿内戦国期守護と室町幕府」（『日本史研究』５１０号）　２００５年
小谷利明　「中世の城郭と文芸」（『大阪春秋』１４９号）　（株）新風書房　２０１３年
中井　均　「交野城」（『日本城郭体系』第１２巻　大阪・兵庫）新人物往来社１９８１年
中井　均　「交野城跡と北河内の城跡」
（『まんだ地域文化誌』第１６号）　まんだ編集部　１９８２年
中西裕樹　「私部城」（『図説近畿中世城郭事典』）城郭談話会　２００４年
野田泰三　「鷹山氏と興福院文書」
（『古代中世史の探求　シリーズ歩く大和』）　大和を歩く会　２００５年
馬部隆弘　「城郭由緒の形成と山論―「津田城主津田氏」の虚像と北河内戦国史の実態－」
（『城館史料学』第２号）　城館史料学会　２００４年
馬部隆弘　「牧・交野一揆の解体と織田政権」（『史敏』６号）　史敏刊行会　２００９年
福島克彦　『戦争の日本史１１　畿内・近国の戦国合戦』　吉川弘文館　２００９年
八尾市立歴史民俗資料館　『動乱の河内』八尾市立歴史民俗資料館特別展図録１９９３年
弓倉弘年　『中世後期畿内近国守護の研究』　清文堂出版　２００６年
吉田知史　「わたしたちの文化財　私部城跡（交野城跡）」（『ヒストリア』２３３号）
大阪歴史学会　２０１２年
吉田知史　「私部城（交野城）－信長の河内平定のクサビ、北河内の雄・安見氏の城―」
（『大阪春秋』１４９号）　（株）新風書房　２０１３年